



2018年度

課外・ボランティア活動支援センター紀要

the Journal of the Center for Service Learning and Extra Activities 2018

東北大学 高度教養教育・学生支援機構
課外・ボランティア活動支援センター

2019年3月発行





1

新入生対象のボランティア団体合同説明会「ボランティアフェア」
(大学内)

2018年4月

2

荒浜にてSCRUM、たなぼた共催
の新歓ツアー(宮城県仙台市)

2018年4月



3

気仙沼市の元消防士で語り部の
佐藤誠悦さんをお招きした課外・
ボランティア活動研修会(大学内)

2018年5月





4

碓井神社例大祭の神輿を担いだ
福島ボランティアツアー
(福島県いわき市)

2018年5月

5

いわき市営永崎団地での花植え
ボランティア(福島県いわき市)

2018年6月



6

今泉災害公営住宅にて
サンドウィッチランチ会
(岩手県陸前高田市)

2018年6月





7

SCRUM、大学祭実行委員会、生協
学生委員会、学友会報道部による
課外活動団体合同研修会(大学内)

2018年6月

8

基礎ゼミ受講学生による新西前沼
第二公営住宅にて流しそうめん
(宮城県石巻市)

2018年7月



9

基幹科目・社会の構造「東日本大
震災からみる現代日本社会」にて
CILたすけっと事務局長杉山裕信
さんの講義(大学内)

2018年7月





10

西日本豪雨災害に伴う第2次広島派遣、安芸津地区にて広島大生と現地のニーズ調査(広島県東広島市)

2018年7月



11

栃ヶ沢災害公営住宅にて晚餐交流会(岩手県陸前高田市)

2018年8月



12

毎年行われる動く七夕祭、和野組への参加(岩手県陸前高田市)

2018年8月



13

西日本豪雨災害に伴う第3次広島
派遣、小屋浦地区避難所にて足湯
ボランティア(広島県坂町)

2018年8月

14

SCRUM 震災伝承部による学校
防災スタディーツアー
(宮城県東松島市)

2018年9月



15

小名浜漁協にて原発事故後の
漁業の現状と課題を伺う
(福島県いわき市)

2018年9月





16

第11次熊本派遣、馬水仮設住宅
集会所にてペットボトルを使った
キャンドルホルダーづくり
(熊本県益城町)

2018年9月

17

熊本大学にて熊本大生、
熊本県立大生と意見交換会
(熊本県熊本市)

2018年9月



18

ぽかぽか上半期振り返り合宿にて
震災遺構たろう観光ホテルを視察
(岩手県宮古市)

2018年10月





19

仙台市ボランティアセンターによる
災害ボランティアセンター運営
サポーター養成講座(大学内)

2018年10月

20

石巻南境第四仮設住宅にて草刈り
(宮城県石巻市)

2018年10月



21

大川小学校跡地にて大川伝承の
会から説明を受けながら視察
(宮城県石巻市)

2018年10月





22

HARU、SCRUM主催の山元町つばめの杜地区ハロウィンイベント
(宮城県山元町)

2018年10月

23

米崎中学校仮設住宅にて年末の大掃除(岩手県陸前高田市)

2018年12月



24

VERY GOOD DAY TOURと題した留学生対象ツアーを実施
(宮城県南三陸町)

2019年2月



はじめに

2018年度は、課外・ボランティア活動支援センターにとって、運営と活動の両面について、激動の年となりました。

まず、本センターの前身である東日本大震災学生ボランティア支援室の設置以来、同室および本センターの運営に大きな貢献をしてこられた藤室玲治・水口早苗の両氏が、任期満了で2018年3月に退任されました。そして、藤室氏の後任として4月に菊池遼氏、水口氏の後任として11月に金田理沙氏が、おのおの着任されました。教職員3人体制を（実現時期はともかくとして）どうにか維持できたことになり、本当に安堵しています。

また、2018年は日本各地で自然災害が多発しました。本学からは、大阪北部地震、西日本豪雨、北海道地震に際して、本センターの教職員や学生スタッフを中心とするメンバーが、ボランティア活動に携わるために現地に入りました。まさに東奔西走という感じだったと思います。そのなかで、被災地が比較的遠隔地にある場合のボランティア活動のありかたとして「現地大学との連携にもとづくノウハウ移転」という発想が生まれてきました。今後は、この発想の延長線上に、被災経験をもつ大学のネットワーキングを進めてゆきたいと考えています。

さらに、本センター教職員が大学における課外活動・ボランティア活動支援の意義について考えるようになったのも、2018年度の特徴です。そのなかで、課外活動と授業の相互フィードバックを構築する「課外・正課リンク」試行の場、「社会的関心（エンゲージメント）、エンパワメント、居場所作り（ピロングング）」の手段、といったアイデアが生まれつつあります。

他方、学生スタッフ諸君は、昨年ひきつづいてみずからの力で（多額の!!）各種外部資金を獲得したり、あたらしい活動団体を創設したりするなど、さらに活発な活動を展開しています。彼らのエンパワメントが着実に進んでいることを実感しています。

じつは、本センターは2019年度も複数の人事異動が予定されており、一種の「綱渡り」体制はまだまだ続きそうです。しかし、本センターは、社会が抱える様々な課題に対して学生という立場から取組む諸活動をサポートするという重要な課題を担っています。そうである以上、綱からおちない方策を探しつづけなければなりません。昨年も書きましたが、学生諸君の人的な成長にとって、課外活動やボランティア活動は重要な役割を果たせるし、また果たしていると確信しているからです。

2019年3月

東北大学 高度教養教育・学生支援機構
課外・ボランティア活動支援センター
センター長 小田中直樹

目次

第 I 部 授業開発・学生支援、課外・ボランティア活動に関する研究・論考

研究ノート

- 「正課・課外リンク」の構築可能性 ―学生ボランティアの事例を中心に― 江口怜 1
- 東日本大震災で被災した自治体ごとの応急仮設住宅に関する管理・運営体制の違い
..... 安達拓矢, 栗田陽子 9

報 告

- 大学生による「伴走型」支援活動の可能性 ―熊本地震被災地支援の事例から― 山本賢 16

第 II 部 2018 年度 課外・ボランティア活動支援センター事業報告

1. 課外・ボランティア活動支援センターの事業報告 20
- 1-1. 課外・ボランティア活動支援センター2018年度の概括 20
 - 1-2. 高度教養教育・学生支援機構の自己評価 21
 - 1-3. 事務連絡会議（運営会議） 22
 - 1-4. 日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）との協定事業 24
 - 1-5. 課外・ボランティア活動研修会 26
 - 1-6. ボランティア登録団体の支援 29
 - 1-7. 開講した授業 29
 - 1-8. 国内外の大学との交流 38
 - 1-9. 緊急災害時の学生ボランティア派遣 39
 - 1-10. 課外活動団体合同研修会および滝沢理事への要望 41
 - 1-11. 東北大学学友会の支援・連携 50
2. 学生スタッフチーム SCRUM の活動報告 52
- 2-1. 2018年度の学生スタッフチーム SCRUM の概要 52
 - 2-2. 総務 54
 - 2-3. 渉外 56
 - 2-4. 広報 58
 - 2-5. 会計 61
 - 2-6. 企画 63
 - 2-7. その他学内イベント 65
 - 2-8. 国際部 69

2-9. 震災伝承部	71
2-10. 人権共生部（ひととも）	72
2-11. もしとさ	74
2-12. 地域共創部	75
2-13. 緊急時の災害対応	76
2-14. 他団体とのコラボ活動	84
2-15. その他 SCRUM の学生が参加したイベント	85
3. 学生ボランティア団体の活動報告	91
3-1. 陸前高田応援サークルぽかぽか	91
3-2. インクストーンズ	94
3-3. 福興 youth	97
3-4. 地域復興プロジェクト“HARU”	102
3-5. 震災復興・地域支援サークル“ReRoots”	105
3-6. 国際ボランティア団体“As One”	107
3-7. 基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークル“たなぼた”	108
3-8. 高校生支援団体“bridge”	111
3-9. フェアトレード推進サークル“amo”	113

第 I 部 授業開発・学生支援、課外・ボランティア活動に関する研究・論考

研究ノート

「正課・課外リンク」の構築可能性

—学生ボランティアの事例を中心に—

江口 怜¹

課外・ボランティア活動支援センター

1. はじめに

本稿の課題は、課外・ボランティア活動支援センターが取り組んできた課外活動、特にボランティア活動の支援と、正課教育の連携について、「正課・課外リンク」という新しい概念を用いてその可能性について考察を行うことである。

課外活動の歴史は古く古代ギリシャまで遡り、運動競技、クラブ、討論、生徒の自治、特別な日の祝祭、演劇、音楽などが教育の現場で取り組まれてきた。その後、長く課外活動は生徒・学生の自治的活動として取り組まれたが、20世紀初頭のアメリカにおいて、デューイの教育理論の影響を受けつつ、課外活動の教育的意義が認識され、カリキュラムの中に取り込まれていった。戦前期日本でも欧米の影響を受けて課外活動の取り組みが始まるが、国家主義的精神を植え付けるための方法として導入された側面が大きく、児童・生徒・学生の自治的・自主的活動としての課外活動が重視されるのは戦後改革後のことである（伊藤 2013）。高等教育においては、文部省が 1950 年代に厚生補導・学生助育（Student Personal Service）の概念を提示して課外活動の教育的意義を強調したが、1960 年代以降に学生運動が興隆すると、厚生補導は学生管理的な色彩が強まり、その教育的意義に関する議論は停滞した（大竹・諏佐 2017）。

しかし、近年になって再び、高等教育における課外活動の教育的意義に関して関心が集まっている。1999 年に旧文部省に設置された大学における学生生活の充実に関する調査研究会が 2000 年に発刊した報告書『大学における学生生活の充実方策について—学生の立場に立った大学づくりを目指して—』では、正課外教育の意義の積極的な見直しの必要性が提起された。また、2007 年に日本私立大学連盟が刊行した『大学生が人間（ひと）として成長するために—正課外教育の重要性と再認識』では、正課外活動ではなく正課外教育という表現を用いてその教育的意義を強調した²。さらに、2008 年の中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」においても、到達すべき学習成果は、課外活動を含めたあらゆる教育活動の中で修業年限全体を通じて培うものであることが強調された³。

このように課外活動の教育的意義が強調される中で、課外活動全般や課外のボランティア活動に関して正課との統合・連携・融合の必要性が課題として指摘されている（桜井・津止 2009、河井 2015、

¹ えぐち さとし、特任助教、satoshiegunchi2016@gmail.com

² 公益社団法人全国体育連合会 Web サイト http://daitairen.or.jp/?page_id=7009（2019 年 3 月 10 日最終閲覧）。

³ 「特集 特徴ある正課外教育で学生を教育する」『大学時報』2015 年 9 月号。

大澤 2015、逸見 2015、池田ほか 2018)。また、愛媛大学が正課教育と正課外活動の中間に「準正課教育」を位置づけたのも、正課と課外の関係性を意識してのことであろう(村田・小林 2015)。他にも、体育会系部活動やキャリア教育等に関連して課外活動に注目する研究・報告が近年増加している。

こうした動向の背景には、高等教育で育成すべき能力観に関する変化がある。松下(2014)が整理しているように、流動化、リスク化、不安定化、個人化、再帰化、グローバル化等の特徴をもつ後期近代において、先進国では〈新しい能力〉と総称される様々な能力に注目が集まり、日本では90年代以降、高等教育に限っても「就職基礎能力」や「社会人基礎力」「学士力」「ジェネリック・スキル」等の概念が提起されてきた。〈新しい能力〉は、人格全体を「力」の中を含むこと、社会や仕事との接続や生涯にわたる必要性が意識されていること等の特徴とする。ただし、こうした〈新しい能力〉は、後期近代における産業構造の転換の影響下で企業側から要請された能力としての側面が大きく、社会と接続しつつも独自の知の生産・継承を使命とする高等教育がそのままその要請に応えるだけでよいのか疑問も残る。また、本田(2005)は、人格全体を含む「ポスト近代型能力」が要請される社会状況を「ハイパーメリトクラシー」と呼び、人格全体が社会的に動員される状況に警鐘を鳴らしている。さらに、現代において〈新しい能力〉が仮に必要なとしても、大学生は卒業後職業人としてだけ生きるのではなく、余暇を楽しむ、政治的活動に参画する、地域社会で生活する等の際に必要な市民性の育成という観点もより強調されるべきではないだろうか⁴。

本稿では、高等教育において課外活動の教育的意義を強調し、その積極的な奨励や正課との連携を模索する動向を〈課外活動の教育化〉と呼ぶことにしよう。これから述べるように、筆者の属する課外・ボランティア活動支援センターも、課外・ボランティア活動を支援しつつ、正課のサービス・ラーニング科目の開発と結び付けようと試みている点で、この〈課外活動の教育化〉の流れに位置する。ただし、江口(2018)で論じたように、正課教育と課外活動には参加する学生の意識において違いが見られ、課外活動は学生にとって「自分たちのもの」という意識が強い。これは、課外活動が学生の自治的・自主的な活動として行われてきたことに鑑みれば、当然の感覚である。〈課外活動の教育化〉の中で、学生にとっての自由の領域が狭まり、単に「動員」されるに留まる可能性は常に存在する。問われるべきは、本来的に自由な領域としての課外活動に対して、正課との連携を含めて教職員がいかなる関与を行えば、この自由の領域を拡張しながら、かつ大学に固有の使命である知の生産・継承と現代社会で求められる力・市民性の獲得を両立させることができるのか、という点であろう。以下では、こうした問題を検討する上での基盤作りの作業として、正課・課外の関係と教育的意義に関する先行研究を整理した上で、学生ボランティアの学びに関するワークショップの記録を基に課外の学びの特徴を示し、正課との連携に向けた課題について考察する。

2. 正課・課外の関係と教育的意義

本節ではまず、正課と課外関係を整理した上で、その教育的意義や効果についてどのように論じられてきたのかを整理しておきたい。

【表1】は、正課、準正課、正課外関係を整理したものである。近年の〈課外活動の教育化〉の動向の中で拡大しているのは、大学や大学教職員が関与するが単位は付与されない、「準正課」(Co-curricular)とも称される領域である。本センターの事例で言えば、主に学生スタッフ SCRUM という組織を通じて教職員と学生が協働して実施するボランティアツアー等は「準正課」に当たり、学生

⁴ 課外・ボランティア活動支援センターの開発したサービスラーニングの中で育成する市民性の内実として、藤室・江口(2017)は「地域視点」と「人権感覚」の二つを仮説的に提示している。

の自主的なボランティア活動（団体・個人）の支援は狭義の「正課外」活動支援、全学教育の中で開講しているサービスラーニング科目は「正課」として整理できる。この他、大学祭実行委員会や、学友会組織なども大学教職員が関与した「準正課」的な活動として行われている。

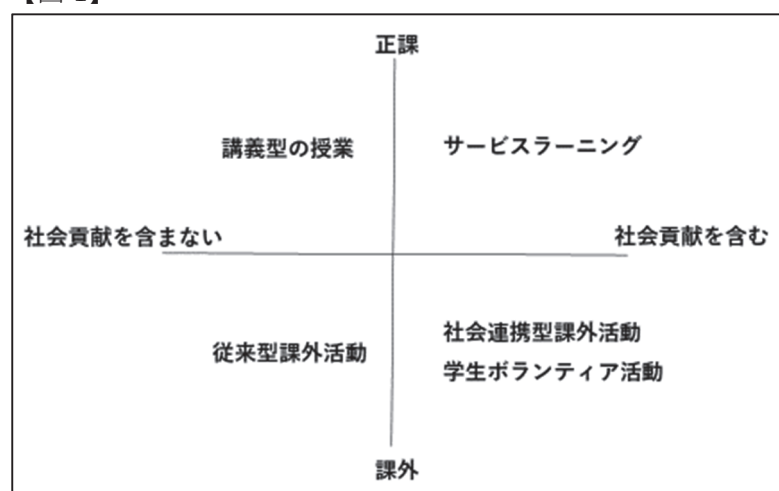
【表 1】

Curricular	Co-curricular	Extra-curricular
単位付与型教育実践	非－単位付与型教育実践	
	大学や大学教職員関与あり	大学や大学教職員関与なし
正課	正課外（広義）	
	準正課（正課補助・正課連動）	正課外（狭義）
東北大学課外・ボランティア活動支援センターの場合		
全学教育のサービスラーニング科目（基礎ゼミ、展開ゼミ、基幹科目）	<ul style="list-style-type: none"> ・学生スタッフ組織 SCRUM と協働で開発するボランティアツアーや体験プログラム等 ・大学祭実行委員会 ・学友会（文化部、体育部、報道部） 	<ul style="list-style-type: none"> ・学生団体や学生個人によるボランティア活動 ・サークル活動

注：池田ほか（2018）に手を加えて筆者作成。

次に、正課・課外の関係に社会貢献の要素を含むか否かという軸を加えて整理したのが、【図 1】である。「従来型課外活動」（クラブやサークル・同好会等）と「社会連携型課外活動」の区分は、大東ほか（2012）が提起したものであり、この区分を用いて藤室（2018）は、課外活動がもたらす教育的機会・価値について【表 2】のように整理している。自主的に設定した課題への挑戦による成長と学びの機会の提供が、あらゆる課外活動に対する支援の基盤にあるが、仲間や居場所を得たりレクリエーションの機会を得ることも課外活動の重要な教育的要素であることを藤室は強調する。また、ボランティアに特徴的なのは、社会貢献を行うためにその対象となる他者や社会への理解と、翻っての自己理解が求められることによって独自の学びと成長の機会になっている点である。

【図 1】



注：藤室（2018）を参考にして、筆者作成。

【表 2】

教育的機会・価値	該当するもの
A.自主的に設定した課題への挑戦による、成長と学びの機会	従来型課外活動＋ボランティア
B.同じ課題に取り組み、大学への適応を支える仲間	従来型課外活動＋ボランティア
C.課題に取り組み、大学への帰属意識ももたらす居場所	従来型課外活動＋ボランティア
D.仲間との取り組み、居場所による気晴らしと休養、回復の機会（レクリエーション）	従来型課外活動＋ボランティア
E.多世代交流、異文化体験、社会の仕組みへの理解、社会問題の発見など、社会の中で活動することによる学び（社会体験による学び）	ボランティア
F.貢献を意識することによる、貢献対象になる自分とは社会的背景が異なる他者についての学び（他者に対しての学び）	ボランティア
G.貢献しようとする自分自身の社会的背景、弱みや強み、興味関心についての学び（自分自身についての学び）	ボランティア

注：藤室（2018）を基に筆者作成。「ボランティア」が該当する部分は、「社会連携型課外活動」が該当する可能性も高いが、表では割愛した。

この他に、課外活動の教育的意義や効果を論じた先行研究として三点を取り上げたい。

まず、日瀨ほか（2009、2010）は、他大学・他領域の研究者や地域・NPO・行政・企業等と協働することができる資質を「ヒューマンコミュニティ創成マインド」と定義し、その資質を「チームワークを大切にする構え」と「コミュニケーション能力」「ネゴシエーション（交渉）能力」「プランニング（企画立案）能力」「マネジメント能力」「リーダーシップ能力」の5つの能力で捉え、正課外活動を行うことによるこれらの資質・能力の変化を分析している。大学院生を対象とする調査の分析結果では、単なる「参加」ではなく「運営」の役割を担った場合能力の上昇が見られること、活動後にフィードバックの機会を得ることで本人も資質・能力の変化が実感できて有意義であること等が指摘されている。

次に、河井（2015）は、「大学生のキャリア意識調査」の結果から、学生生活の中での成長に関して正課と正課外を分けてどの程度身についたかを検討し、「リーダーシップ能力」と「協調性」、「チャレンジ精神」は正課よりも正課外で身についたと考える学生が多いことを指摘している。キャリアに関しては、池田ほか（2018）は、仕事における様々な困難から回復する力を「キャリアレジリエンス」と呼び、クラブ・サークル活動において「メンバーとの深いコミュニケーション」「積極的な関与」「目標達成に向けた取り組み」「内省」の機会を得ることで、キャリアレジリエンスが向上する結果が見られたと述べている。

このように、課外活動の教育的意義や効果に関しては少しずつその成果指標や重要な因子に関して研究が進みつつある。その中で、その関与の量ではなく質が重要であるという点が注目され始めており、特に、企画・運営に積極的に関わった経験、自分の行為に対して内省する経験等が重要であることが指摘されている。江口（2017）で述べたように、課外・ボランティア活動支援センターでは、学生スタッフ SCRUM という組織を育成し、学生自身がボランティアの「企画・運営」に従事する機会の提供、毎回のボランティア後における振り返りの機会の確保等を大切にしてきた。このように

「準正課」の領域におけるプログラム開発や企画・運営に学生と教職員が協働的に取り組む形態は、今後の課外活動支援のモデルになりえる可能性をもっていると考えられる。

3. 多大学合同東北被災地ツアーとボランティアセミナーの事例

(1) ツアーとセミナーの概要

本節では、2019年2月20日に開催した東北大学ボランティアセミナー「災害時の学生ボランティアの経験をつなぐ」内のワークショップにて行った、災害ボランティアに取り組む学生が学んだことの自己分析結果を取り上げて、若干の考察を行う。

セミナーの前には、2月18日～19日にかけて、課外・ボランティア活動支援センターおよび学生スタッフ SCRUM 内の震災伝承部のメンバーを中心に企画し、多大学合同東北被災地ツアーを開催した。ツアーおよびセミナーには、8大学9団体から33名の学生が参加した。参加したのは、1995年の阪神・淡路大震災、2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震、2018年の大阪北部地震・西日本豪雨災害後にボランティア活動を行う学生団体である。熊本地震や大阪北部地震、西日本豪雨災害後に SCRUM の学生が支援活動を通して関係を構築してきた団体を中心に声をかけ、ツアーでは主に宮城県石巻市の震災遺構や復興公営住宅等を巡って、復興の現実を現地の住民の声を通して学ぶことを企図していた。ツアーおよびセミナーの企画は、課外・ボランティア活動支援センター教職員と SCRUM メンバーで協働しながら行い、上記に述べた学生による「企画・運営」に関わるボランティア活動の蓄積の下で実現したものである（詳しくは本紀要の活動報告【II2-15-3】を参照）。

セミナーの中では、神戸大学学生ボランティア支援室コーディネーターの東末真紀氏に「災害時／災害後の学生ボランティアの教育的意義」と題してご講演をいただき、その中で学生の学びに関するワークショップが行われた。テーマは「ボランティア活動を通して自分が得たもの、学んだもの」とし、学生たちはA3の用紙に自分が得たもの・学んだものの大きさを勘案して紙を分割し、自分にとって重要なものほど大きな紙に、重要でないものほど小さな紙に記した（何枚に分割してもよい）。最後に、その紙を全員が壁に張り出し、似ているものをまとめた。参加した学生は31名である。



ワークショップで張り出した紙の一部

(2) 学生が得たこと・学んだことの種類

次に、学生の記した「学んだこと、得たこと」について、紙の大きさを考慮せずにすべて書き出したところ、153点が挙がった。それらを、【表2】で示したボランティア独自の学びである「社会体験による学び」「他者に対しての学び」「自分自身についての学び」に大きく分類し、内容ごとに小分類を行って作成したのが【表3】である。「社会」に関しては、社会のあり方への気づき・理解、特定地

域への知識・愛着、ボランティアに関する知識・理解、震災・災害・防災に関する知識・理解の4つに、「他者」に関しては、地域住民・被災者等との関係／に関する理解、学生・若者同士の関係、広く人との関係の3つに、「自己」に関しては、自分の所属する団体に関する気づき・理解、自分に関する理解・自己の変化、具体的な知識やスキルの獲得、見方・考え方・態度の獲得の4つに分類した。

【表3】

大分類	小分類	大分類	小分類	例
社会	社会のあり方への気づき・理解	62	24	・社会には様々な人がそれぞれ異なる暮らし方をしていること ・テレビの世界から「現実」の世界に変わったこと ・「こんな社会をつくりたい」の具体化
	特定地域への知識・愛着		17	・活動先の地域を知り、好きになった ・地元・福島のことをもっと深く知れた（震災のこともそれ以外も） ・地域の特色を大切にしたいと思うようになった
	ボランティアに関する知識・理解		8	・学生ボランティアの在り方についての問題を考えること ・ボランティアの楽しさを知った ・ボランティアという立場だからこそは入れたエリアや雰囲気があった
	震災・災害・防災に関する知識・理解		13	・東日本大震災について深く知れた ・災害や防災に関する知識 ・復興に終わりが無い
他者	地域住民・被災者等との関係／に関する理解	36	19	・住民目線の地震当時の体験や心境 ・普通の生活では決して出会えなかった人との出会い ・心を開いてくれるまでにかなり時間がかかる
	学生・若者同士の関係		8	・メンバーとの団結感、信頼関係 ・仲間（真面目に言いあえる、意見を言いあえる、認めあえる、考えあえる） ・同じ志を持った学生で大きなイベントを成し遂げる難しさと達成感
	広く人との関係		9	・様々な人との出会いでたくさんの考え方を学んだ ・いろんな人と話すことができる、つながることができる ・人のあたたかさ
自己	自分の所属する団体に関する気づき・理解	55	5	・自分の団体の良くないところを知れた ・課題を探し、何をすべきか考える経験ができた（運営や企画） ・運営の大変さを知った
	自分に関する理解・自己の変化		16	・キャリア（将来）を迷うようになった（良い意味で） ・行動に移す勇氣 ・他人事だと思わないようになった
	具体的な知識やスキルの獲得		24	・ニーズを引き出すコミュニケーション ・組織の運営 ・コミュニケーション力 ・発信力・発言力 ・傾聴の仕方 ・イベントの企画力・運営力 ・人権感覚
	見方・考え方・態度の獲得		10	・直接話し合うことが一番の問題解決策になる ・寄り添う大切さ ・人の話に耳をかたむけることの重要性を知った（被災者、ボランティア、行政など）
計		153	153	

注：筆者作成。

【表3】を見ると、学生が最も実感しているのは社会に関する学びであり、特に社会のあり方に気づいたことを自身の学びとして重視していることがわかる。こうした一般的な社会の構造や現実に関する理解に加え、特定の地域で支援活動を行うことで、地域の実情に関して理解を深めると同時に愛着を抱くようになっていくことが印象的である。次に学生にとって重要なのは自己に関する理解、変化、知識・技術の獲得等である。特に具体的な知識やスキルの獲得を実感しており、これは対人支援の技法から団体運営のノウハウ、広報技術等まで多岐にわたる。その他の項目も含め、自分にとって何らかの良い変化を感じていることが、学生が課外でボランティア活動を続ける動機になっている

ることが窺える。最後に、他者に関する学びとしては、特に地域住民・被災者への理解やそうした人々との関係について言及するものが多い。これは、社会貢献を含まない従来型課外活動では得られないボランティア活動に独特のものである。社会や自己に関する学びも、こうした他者との出会いに触発されて生じているものが多いと考えられるため、キャンパス外での多様な他者との関係は学生の学びにおいて重要な位置を占めているといえるだろう。

(3) 「正課・課外リンク」構築に向けた示唆

以上、課外において災害ボランティア活動に取り組む学生が、自分が活動の中で得たこと・学んだことをいかに捉えているか、ワークショップの結果を基に分析してきた。この中で、通常は半年間、長くても1年間で終了する正課の授業で学ぶことが困難なのは、特定地域に継続して通うことによって得られる知識や愛着、学生・若者同士の信頼関係や団体運営に関わる知識・スキルの獲得等であろう。また、課外のボランティア活動においては、こうした社会・他者・自己に関する学びが複合的かつ並行的に生じていたが、正課の授業においてこれらの要素を網羅的に組み込むことは難しく、そうすることでむしろ焦点がぼやけてしまう可能性もある。正課の授業においては、その授業全体の設計や課題の設定、評価の方法等に関して、こうした学びの複合性を意識しつつも、どこに焦点を当てるのかを明確にすることが望ましいと考えられる。

関連して、筆者の開講した授業を二つ取り上げてみよう。一つは、基礎ゼミ「共生社会に向けたボランティア活動」で、これは貧困問題・障害者問題・教育支援・外国人支援等のテーマに関連して既存のNPOやボランティア団体が実施している支援活動に2～3名のグループを作って体験的に参加するという形式をとっている。この形式では、「社会のあり方への気づき・理解」や「支援対象者(当事者)に関する理解や関係構築」等を重視し、レポート課題ではこの点の理解を主に評価している。もう一つ、展開ゼミ「福島における人権保障と共生の課題」では、最後に2泊3日のフィールドワークを行い、そこで受講生が考案・企画したボランティア活動を実施することをゴールに設定している。調べ学習等を通して「社会のあり方への気づき・理解」を深めることを意図しつつも、「特定地域に関する知識や愛着の獲得」、「学生同士の協働を通して企画を立案・実行する力の獲得」等も重視されている。このように、ボランティア活動の形態やフィールドとなる地域・領域の特徴によって、柔軟に授業設計を組み替える力量が教員には求められる。

さらに、いずれの授業においても、既に課外で同じ課題に取り組む学生の参加や発表、助言等の機会を組み込むように配慮している(詳しくは江口(2018)参照)。正課の授業においてすべての知識・技能を獲得することが難しくても、既にそうした課題に取り組み、学びを実感している学生の声を聴くことによって、正課の授業の先にどのような学びが得られるのかを見通すことができると考えられる。そのような意味で、正課と課外をつなぐ「準正課」の領域は、固くデザインされた正課の授業と学生の自由の領域である課外活動の良い部分を生かしながら、それらを結び付ける触媒としての可能性を有しているといえるだろう。また、溝上(2005)が紹介するように、準正課活動に取り組む学生たちが正課教育のデザインや教育内容の見直しに積極的に参加する機会をつくることも有効だと思われる。

4. おわりに

本稿では、〈課外活動の教育化〉の動向や正課・課外の関係と教育的意義に関する研究状況を整理した上で、課外でボランティア活動に取り組む学生の学びの事例を取り上げ、課外と正課をつなぐ学

びの可能性について考察した。特に、検討を通して課外・ボランティア活動支援センターが学生スタッフ SCRUM と協働で開発してきた「準正課」的プログラムが、「正課・課外リンク」を構築するうえでも有効であることが示唆された。ただし、今回とりあげた事例はボランティア活動に限られるため、今後は従来型課外活動まで含めた課外活動全般の意義と正課との連携可能性について射程を広げた考察が求められる。

参考文献

- 池田めぐみ・伏木田稚子・山内祐平（2018）「大学生のクラブ・サークル活動への取り組みがキャリアレジリエンスに与える影響」『日本教育工学会論文誌』42巻1号
- 伊藤明子（2013）「特別活動におけるJ.デューイの「活動的な仕事」」『四天王寺大学紀要』55号
- 江口怜（2017）「学生ボランティアは福島で何を学んでいるのか」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』3号
- 江口怜（2018）「課外・ボランティア活動支援と正課教育の連携事例とその可能性」『2017年度課外・ボランティア活動支援センター紀要』
- 大澤敏（2015）「正課×正課外の連携による総合力の育成」『大学時報』2015年9月号
- 大竹秀和・諏佐賢司（2017）「日本の大学における正課外教育プログラムの現状」桜美林大学大学院大学アドミニストレーション研究科『大学アドミニストレーション研究』7号
- 大東貢生・新矢昌昭・湯川宗紀・富川拓・長光太志・平田毅・山幸代（2011）「大学における体育・スポーツ系課外活動に関する研究の諸課題」『佛大社会学』36号
- 河井亨（2015）「正課外教育における学生の学びと成長」『大学時報』2015年9月号
- 桜井正成・津止正敏編著（2009）『ボランティア教育の新地平』ミネルヴァ書房
- 日瀨淳子・森口竜平・小山田祐太・齊藤誠一・城仁士（2009）「正課外活動によって得られる能力尺度の開発」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』2巻2号
- 日瀨淳子・森口竜平・小山田祐太・齊藤誠一・城仁士（2010）「正課外活動によるヒューマンコミュニティ創成マインドの変化」『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』4巻1号
- 藤室玲治（2018）「高等教育機関における課外・ボランティア活動支援の目的」『2017年度課外・ボランティア活動支援センター紀要』
- 藤室玲治・江口怜（2017）「サービス・ラーニングを通してつちかう〈地域視点〉と〈人権感覚〉」『2016年度課外・ボランティア活動支援センター紀要』
- 逸見敏郎（2015）「正課外教育のもつ教育力」『大学時報』2015年9月号
- 本田由紀（2005）『多元化する「能力」と日本社会』NTT出版
- 松下佳代（2014）「大学から仕事へのトランジションにおける〈新しい能力〉」溝上慎一・松下佳代編『高校・大学から仕事へのトランジション』ナカニシヤ出版
- 溝上慎一（2005）「学生の活力を改革に生かす」ベネッセ教育総合研究所『Between』2005年6・7月号
- 村田晋也・小林直人（2015）「正課教育、準正課教育、正課外活動」『大学時報』2015年9月号

東日本大震災で被災した自治体ごとの 応急仮設住宅に関する管理・運営体制の違い

安達拓矢⁵, 栗田陽子⁶

東北大学リーディング大学院グローバル安全学トップリーダー育成プログラム

1. はじめに

阪神・淡路大震災では「被災前に住んでいた地域」→「避難所」→「応急仮設住宅」→「災害／復興公営住宅」に移り住む過程で、コミュニティが分断されることにより生じる危険性が指摘された^[1]。このコミュニティの分断により住民の孤立が促進され、孤独死が大きな社会問題となった。東日本大震災では、応急仮設住宅への入居方針・見守り体制は各自治体に一任されていた。阪神・淡路大震災の教訓を踏まえれば、元のコミュニティを維持したまま仮設住宅に入居する「コミュニティ入居」が理想的である。しかし、応急仮設住宅に関してこれまでも先行研究で様々な問題が報告されてきたが、応急仮設住宅の管理・運営体制の違いに着目した調査はほとんど行われていないのが現状である。応急仮設住宅の管理・運営体制は、住民が受けるストレスや自立に大きく影響を与えるため、管理・運営体制の最適化が、住民の生活の質の向上に大きく貢献することが期待される。そこで実際、東日本大震災発生時には、自治体ごとにどのように応急仮設住宅が管理・運営されていたのか知るため、自治体職員に対してインタビュー調査を行った。インタビュー調査より、自治体ごとに応急仮設住宅の管理・運営体制が異なっていることが分かった。

その後我々は将来の災害時に建設される応急仮設住宅での最適な管理・運営法を提案するために、東日本大震災における応急仮設住宅の管理・運営体制の自治体ごとの差異を明らかにし、なぜ入居方針が異なったか、見守り体制が異なったかの2点について考察した。その結果、自治体ごとに震災前の状況や産業が異なっており、それぞれが最適だと思われる災害対応を行っていることがわかり、それらの災害対応をまとめて、ひとつの最適な管理・運営体制を提案するのではなく、自治体ごとに最適な応急仮設住宅の管理・運営体制を選択することが必要であることが明らかになった。

本紀要では、これまで我々が行った調査の概要を紹介し、そこから得られた知見について述べる。特に東日本大震災で被害を受けた石巻市、岩沼市、多賀城市ではどのように応急仮設住宅の管理・運営を行っていたのか紹介する。それらの自治体を実施した災害対応を参考に、今後応急仮設住宅を管理・運営する自治体が、それぞれの地域に適した災害対応を選択できることを期待している。

本活動は、東北大学リーディング大学院グローバル安全学トップリーダー育成プログラムの自主企画活動の一環として行われ、2015年からメンバーが入れ替わりながら現在まで行われてきた。自主企画活動とは、プログラムに所属している学生がグローバル安全学の目的や趣旨に合った課題を自主的に設定し、実践的な取り組みを行う活動のことである。

⁵ あだち たくや、東北大学大学院工学研究科博士後期課程1年、adachi.takuya@space.ifs.tohoku.ac.jp

⁶ くりた ようこ、東北大学大学院文学研究科博士後期課程2年、kurita1215@gmail.com

2. 調査概要

(1) 宮城県沿岸の自治体へのインタビュー調査

我々は2015年度、宮城県内で被災した仙台市宮城野区・若林区・太白区、多賀城市、岩沼市、石巻市においてインタビューを行った。インタビューの目的は、被災後の住民が応急仮設住宅に入居するプロセスと、住民に対する見守り活動の方針について、それぞれの自治体がどのように決定したのかを知るためである。

表1にインタビューで得られた情報をまとめたものを示す。インタビューの中で共通していたのは、どの自治体も阪神・淡路大震災での事例を参考にしていなかったことである。東日本大震災が発生したのちに、それぞれの自治体で試行錯誤しながら対応策を制定していったことが分かった。

まず、入居方針について説明する。応急仮設住宅に入居する際には、町内会などのもともとあったコミュニティごとに入居する方針と、もともとの地域とは関係なく、抽選で入居の順番を決める2つの方針がある。今回インタビューした自治体においては、被災規模の把握が可能であり、もともと地域のつながりが強い場合にコミュニティごとの入居が選択される傾向にあった。

入居後の見守り活動については、住民の孤立を防ぐために重要視する自治体がほとんどであった。対応できる自治体職員の数に限りがあることから、外部団体に見守り活動を委託する自治体などもあった。

【表1】 各自治体の入居方針と見守り体制一覧

自治体	入居方針	見守り体制	
仙台市	宮城野区	建設された応急仮設住宅団地の戸数に合わせて、もとの町内会が維持されるような形でコミュニティ入居。一部の団地では抽選入居。	コミュニティ入居がなされた団地では住民が相互の見守り。抽選入居の2団地では一般社団法人パーソナルサポートセンターに業務委託。
	若林区	もとの町内会が維持されるような形で入居。しかし、一部戸数が多い仮設団地に関しては複数の町内会が混在して入居。	区が直接雇用した臨時職員が見守り。
	太白区	当初は10世帯や5～10世帯でのグループ入居であったが、人が集まらなかったため途中から希望制で入居。	一般社団法人パーソナルサポートセンター(PSC)に業務委託。
多賀城市	コミュニティ入居は実施されず、高齢者や障がい者の方から優先的に入居。その後は抽選入居。	民間業者である共立メンテナンスに業務委託。	
石巻市	被害の大きかった旧石巻市では被災者・被災戸数が多く選制で入居。旧市以外で集落すべてが被害を受けた地域では集落ごとのコミュニティ入居。	石巻市社会福祉協議会に委託したが、職員が足りず被災者を中心に臨時雇用。	
岩沼市	岩沼市の応急仮設住宅は近い距離に集中させて建設されており、もとの行政区が維持される形でコミュニティ入居。	青年海外協力隊のOB・OGで構成されるJOCA	
岩手県野田村	基本的に抽選入居。	基本的に行政が管理し、NPO団体や保健師が協力して見守り。	

応急仮設住宅では、自治会を設立することが奨励される場合が多かったが、コミュニティごとの入居が行われた仮設住宅ではもともとの町内会のリーダーが自治会でも中心になるようだ。一方で、複数のコミュニティが入居した仮設住宅においては、違う町内会に属していた人同士の交流はあまり見られなかったという。住民同士の交流が少なかった仮設住宅においては自治体がイベントを企画するなどして住民同士の交流を促進する取り組みを行うこともあったという。

(2) 数的データの収集・考察

インタビュー調査で明らかとなった入居方針・見守り体制に差異が生じた要因をより定量的に考察するため、各自治体に関する被災規模やもともとの地域のコミュニティの繋がりの強さ、自治体規模などの数的データの収集・考察を行った。数的データには、国勢調査や各自治体のホームページから入手可能なものを利用した。ここでは、数的データの詳細は割愛する。ただし、得られた数的データから応急仮設住宅の管理・運営体制には、被災規模や元の地域のコミュニティの強さ、自治体規模が影響していることがわかり、それらの数的データと応急仮設住宅の管理・運営体制の関係について第3章で述べる。

3. 調査結果の考察

(1) 調査結果より得られた応急仮設住宅の管理・運営体制の傾向

調査結果から、それぞれの自治体での対応は多様であったものの、ある程度の傾向がみられることが分かった。それらをもとに、災害が発生してからの意思決定プロセスを分かりやすく表すために、フローチャートを作成した。

まず入居方針の決定プロセスを図1に示す。入居方針を決定するには、まず被災規模の把握が行われる。被災規模が甚大で把握が不可能である場合、応急仮設住宅を必要とする住民が多くなる。すると、住民のコミュニティ入居をさせることが難しくなり、公平性の原理からも抽選制での入居となる。また、プレハブ型の応急仮設住宅を建設するには土地の確保が必要である。土地が元々のコミュニティの大きさに対して不足している場合には、仮設住宅が分散して建設されることになり、住民は散り

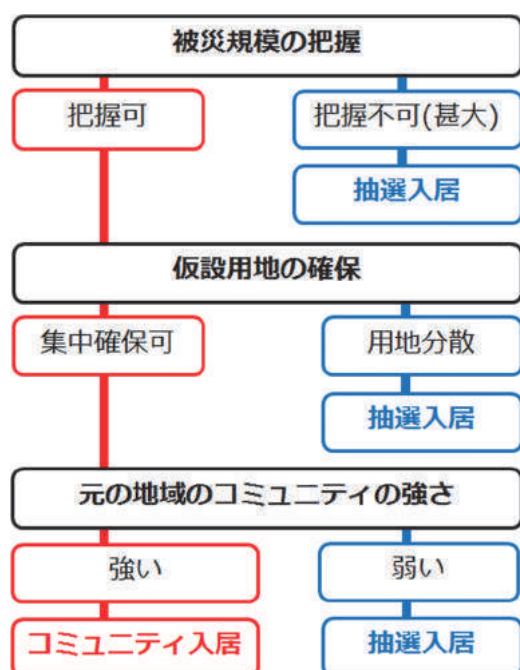


図1：入居方針決定までのフローチャート

散りに入居せざるを得なくなる。さらに、もともとの町内会や行政区の地縁的コミュニティの強さも入居方針決定に強く影響する。コミュニティの繋がりが強い地域では、そのコミュニティを維持したほうが、共助が働きやすくなるためコミュニティ入居を進めやすくなる。

次に見守り活動の請負主をどう決定するか、そのプロセスを図2に示す。見守り請負主を決定する大きな要因となるのは、自治体の職員数である。仮設住宅を管理・運営するのは基本的に行政の役割であり、その職員数が少なければ自治体の負担が大きくなり、見守りを外部に委託することに繋がる。また、入居方針が見守り体制に寄与する可能性が高い。コミュニティ入居であれば、外部支援が無くとも入居する住民の間で見守りを行いやすいお互いを見守りを行いやすい。しかし、抽選制入居の場合には、応急仮設住宅において新たにコミュニティを構築する必要があるため、外部からの力を必要とする。

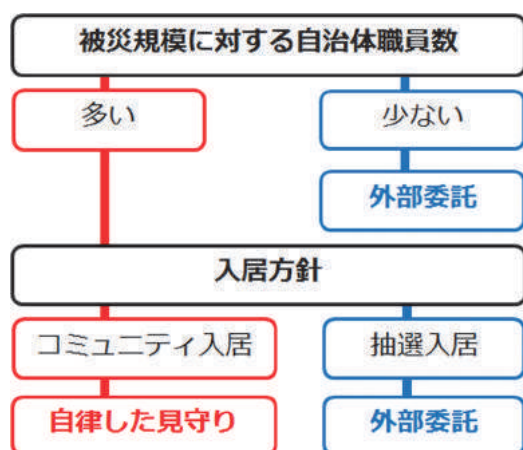


図2：見守り活動請負主決定までのフローチャート

これまでは応急仮設住宅の入居方針と見守り活動に関して、おおまかな傾向について述べた。以下ではより具体的に、東日本大震災で被災した自治体を例に、それぞれの自治体がどのように応急仮設住宅の管理・運営していたのか述べる。以下に示すような各自治体の対応例が、被災経験のない自治体における応急仮設住宅の管理・運営に役立つものと考えられる。

(2) 石巻市の応急仮設住宅の管理・運営体制

石巻市は津波によって甚大な被害を受けた。パソコンなどの電子機器が浸水被害を受けたため、建築課の職員が地図を見ながら被害戸数を推定した。約1万6千世帯が被災していると予想し、それを基に仮設住宅の建設戸数を決定した。仮設住宅の用地は半分が公有地、半分が民営地を買上げたものが用いられた。石巻市の職員は、「コミュニティ入居」が望ましいという認識は持っていたものの、市の中心部は大規模に被災したこともあり、抽選入居せざるを得なかった。また、もともとのコミュニティの結びつきもあまり強くなかったことも一因である。一方、半島部は漁村だったこともあり強いつながりがあった。被災した住民も比較的少数だったため、コミュニティごとの入居が可能となった。4月中に、避難所の住民に対してアンケートを取り、それをもとに戸数を決定した。4月24日に向陽団地の入居が始まり、134の団地に順次被災した住民が入居した。

コミュニティ入居ではなく、抽選入居となった地域もあったため、仮設住宅でコミュニティを再建することが求められた。そのため、各仮設住宅に自治会長を立てるように促し、仮設住宅が小規模の

場合は、市がその地区の町内会への入会を働きかけた。一方、自治組織がすでにあった地域には、市からの働きかけは不要だった。またコミュニティ再建を促すために、集会所や談話室が設けられ、相談支援が設置された。この集会所や談話室は市役所や支援団体主導での利用だけではなく、団地内に管理人を委嘱し、地元の利用も多くあったことが確認されており、集会所や談話室の有用性も確認されている。

見守り活動に関しては、入居者の孤独死を防ぐことを目標に、見守り隊が組織された。仮設入居者に見守りの希望のアンケート調査を実施し、それに従って見守り活動を実施した。加えて、外観調査(ポストの郵便物、洗濯物、ガスメーターのチェック)も行った。しかし、支援者も被災者ということもあり、被災者内格差や、支援者側のストレスに関する問題が生じた。

石巻市では現在でも、プレハブ仮設住宅に 118 世帯 271 人 (H30.12.1 現在)、みなし仮設住宅に 103 世帯 249 人 (H30.11.1 現在) が入居しており、その他県外なども加えると、全体で 243 世帯 567 人が仮設住宅に入居している。そのうち 55 世帯が来年度も供与期間が延長されることが決定しているが、全世帯で再建方法が確認されており、プレハブ仮設住宅は 2019 年 9 月までに解消するものと見込まれている。

(3) 岩沼市の応急仮設住宅の管理・運営体制

岩沼市では、「孤立死をゼロに抑える」こと、「自殺者を出さない」という目標を立て、被災直後から社会福祉課が中心となって住民のケアにあたった。4 月 5 日に行ったアンケート結果によって、7 割の住民が応急仮設住宅を必要としていることが分かった。

仮設住宅への入居に関しては当初、公平性を保つために抽選入居で行う予定だった。しかし、社会福祉課からはコミュニティ単位での入居が必要であるという意見が出たため、コミュニティごとに入居することとなった。岩沼市は農業地域であり地域での結びつきが強かったことと、避難所でも掃除当番などの仕事を通して、もともとのコミュニティが維持できていたことが主な理由である。仮設住宅への入居は 5 月から徐々に始まった。岩沼市は主に「里の杜団地」という応急仮設住宅に被災した住民が集住した。この団地には、岩沼市民の他に宮城県山本町、亶理町、福島県の住民も居住した。住民がどこに住むかは社会福祉課の職員と行政区の区長が相談して決定した。また、避難所でコミュニティが維持されており、従来の町内会長が、仮設住宅における自治会のリーダーシップをとった。入居後は、月 1 回のリーダー同士の連絡会により、情報共有を行った。またプレハブ仮設住宅に加えて、民間からの借り上げ住宅も多く活用された。岩沼市にはアパートが多かったことが要因の 1 つである。震災 1 か月後には、借り上げ住宅に入居する住民に対し、世帯ごとに家賃を一部補助する災害住宅手当を設けた。

また青年海外協力隊の元参加者で組織される団体「JOCA」は、震災直後から岩沼市でボランティア活動をしていた。国の補助金を利用し JOCA に見守り活動を委託することを、福祉自治体の事務局長が市長に提案した。協定締結の 1 か月後から、JOCA の見守り活動が開始した。仮設住宅に常駐し、住宅を 1 軒ずつ訪問することで安否確認をしている。住民との関係は良好で、地域の行事にも参加している。

岩沼市では、2016 年 4 月 28 日までにプレハブ仮設住宅入居者全員が退居し、同日、仮設住宅閉所式も行われた。ただし、みなし仮設住宅には、5 世帯 6 人が入居している (H30.12.31 現在)。

(4) 多賀城市の応急仮設住宅の管理・運営体制

多賀城市の3分の1が浸水被害に遭った。1階浸水のみ被害を受けた住居は、自力再建することができた。また、多賀城市では昔から居住していた人と新興住宅地に住む住民が混在しており、もともとのつながりは強くなかった。そのためコミュニティごとの入居はなされなかった。入居時には、避難所で暮らす高齢者・障がい者を優先的に入居させ、その他の人々に関してはすべて抽選入居という方法を取った。しかし、入居2~3か月後に、自治会が組織され始めた。行政から自治会の組織を促すために、お茶会・自治会に関する講習会を開催した。一方、息の合う人達が集い、自然発生的に自治会ができることもあった。

さらに多賀城市では、がれき撤去やボランティア調整に多くの人員が割かれたため、2011年4月からもともとつながりのあった民間企業「共立メンテナンス」に業務の一部を依頼した。彼らの行う業務は、応急仮設住宅の全体の指導および安否確認である。社会福祉協議会は、福祉の面からの支援を行うようになった。多賀城市役所内には2012年より生活再建支援室が設立され、サポートを行っている。特に見守り活動に関しては、人員不足を補うために、管理事業を行う民間へ見守り活動を委託した。福祉的な知識・サポートを得意とする社会福祉協議会と協力し活動を行った。最重要事項である孤立死の防止・入居者の健康状態の維持については、十分担保された。また、民間なので入居者との距離が近く、入居者の相談相手のバリエーションが増えた点は良かった。だが、自己解決できる問題も頼り、民間への依存性が高まるという問題点もあった。

多賀城市においても岩沼市同様、すでにプレハブ仮設住宅入居者は全員退居しているが、みなし仮設住宅には3世帯3人が入居している（H30.12.31現在）。

4. まとめ

本活動では、東日本大震災における各応急仮設住宅の入居方針・見守り体制の差異をインタビュー調査、および自治体のマクロな数的データに基づき考察した。調査の結果、入居方針の選定プロセスには、まず被災規模が把握可能であるかどうかを寄与し、仮設用地が集中確保可能、かつ被災前のコミュニティの繋がりが強い地域はコミュニティ入居を選定することがわかった。見守りサービス請負主の決定プロセスにおいては、被災者に対する自治体職員数が多く、かつコミュニティ入居がなされた自治体においては自立した見守り体制が取られることが示唆された。

最後に我々の活動から得た知見、東日本大震災で被災した地域の経験が多くの人に伝わり、今後の応急仮設住宅の管理・運営を行う人の負担が少しでも軽減されれば幸いである。

謝辞

本調査に際してインタビュー調査を受け入れてくださった、各自治体の担当課の皆様、一般社団法人パーソナルサポートセンターと石巻社会福祉協議会のご担当者様に感謝申し上げます。特に石巻市役所福祉部生活再建支援課のご担当者様には、今年度アンケート調査にもご協力いただき、有益な情報をいただくことができました。感謝申し上げます。

本活動を進めるにあたって、東北大学 高度教養教育・学生支援機構・課外・ボランティア活動支援センター 教育・研究支援者の菊池遼様に多くのアドバイスをいただきました。ここに感謝申し上げます。

本調査は日本 NPO 学会震災特別プロジェクトおよび東北大学リーディング大学院グローバル安全学トップリーダー育成プログラムの助成を受けています。担当教員の松本行真准教授にも多大なアドバイスを頂いたことに感謝いたします。

【参考文献】

- [1] 櫻井常矢, 伊藤亜都子, 震災復興をめぐるコミュニティ形成とその課題, 地域政策研究第 15 巻, 第 3 号, 2013.

大学生による「伴走型」支援活動の可能性

—熊本地震被災地支援の事例から—

山本 賢⁷

東北大学課外・ボランティア活動支援センター ボランティア支援学生スタッフ SCRUM

1. はじめに

本学では、東日本大震災被災地での活動に加え、地震・水害等の緊急災害が発生した際には支援活動を積極的に行っている。その中で熊本地震被災地への支援は、約3年間・12回にわたり継続され、本学の学生のべ59名が活動を行った。著者も熊本で継続的に活動を行った学生の1人である。

熊本地震被災地への支援は、本学の教員・学生が単独で活動を行うのではなく、現地大学（熊本大学・熊本県立大学）の学生と初期段階から合同で活動し、本学の教員・学生が現地大学の学生の「伴走者」となり、現地大学の活動の展開・継続をサポートしていたという点が特色である。

本稿では、本学の教員・学生による熊本地震被災地への支援の事例をもとに、大学生による「伴走型」支援活動の可能性について考察を行う。

なお、本稿は昨年度の課外・ボランティアセンター紀要に掲載いただいた「学生による緊急災害支援の意義 —平成28年熊本地震被災地に対する支援の事例から—」に本年度の活動を踏まえて加筆修正を加えたものである。

2. 本学の教員・学生による熊本地震被災地への支援の概要

(1) 熊本地震の概要

熊本地震（平成28年熊本地震）は、2016年4月14日に前震（M6.5）、4月16日に本震（M7.3）が発生した地震であり、熊本県熊本市や益城町、西原村、南阿蘇村を中心に大きな被害が出た地震である。熊本地震の特徴としては、①同一地点（益城町）で短期間に震度7を2回観測したこと、②震源が浅いため被害が局地的であること、③倒壊家屋が多かったことが挙げられる。

(2) 活動目的

本学では、地震発生から間もない2016年5月から熊本地震被災地への支援（以下、熊本派遣と記す）を開始し、先述の通り2019年3月までの約3年間で12回の派遣を実施した。熊本派遣は、以下の目的のもとで行われた。

- ①東日本大震災被災地にある大学としての大規模自然災害被災地への貢献
- ②熊本大学の学生ボランティア支援に関する助言・アドバイス（教員）
- ③学生ボランティア同士の経験交流（学生）

⁷ やまもと ただし、東北大学文学部3年、vol.tohoku.univ@gmail.com

なお、熊本での活動は先述の通り、熊本大学学生災害復旧支援団体熊助組（第1次～12次・以下熊助組と記す）および熊本県立大学学生ボランティアステーション（第5次～12次・以下県立大と記す）と合同で実施した。

(3) 活動概要

熊本での活動では、①発災直後独自の活動、②「ハード系」の活動、③「ソフト系」の活動、④その他の活動の大きく分けて4種類の活動を行った。

発災直後独自の活動としては、第1次派遣で行われた熊本市内での避難所実態調査が挙げられる。

「ハード系」の活動は、第1次～4次派遣で実施され、各市町村に設置された災害ボランティアセンターを通してのがれき撤去・家屋の片付けを行った。「ハード系」の活動は、東北ではできない活動であるため、本学の学生にとっては貴重な経験となった。また、熊助組メンバーは過去の水害等での活動経験があり、かつ熊本地震発生後も頻繁に活動していたため、本学の学生が熊助組の学生から学びを得る場面が多くあった。また、「ハード」系の活動においてもコミュニケーションを大切にし、現地の方の気持ちを考えて活動を行っていく重要性を実感することができた。

「ソフト系」の活動は、第1次派遣から通して実施された。第1次～4次派遣では、避難所での足湯ボランティア、第4次派遣以降は仮設住宅集会所でのサロン活動（足湯・手芸）を実施した。「ソフト系」の活動は、本学の学生が普段東北で行っている活動であり、東北での経験を現地大学の学生に伝えることができた。現地大学の学生からも、「足湯って良いなあ」というのが、今回一番感じたことです。“足も体も心もケアしてくれてありがとう”という住民の方の言葉にすべて表れていると思います。」（熊本



【写真】熊助組メンバーに足湯を教える様子
(2016年6月・第2次派遣)

県立大生・第5次派遣参加者アンケートより) という声が挙がるなど、本学の学生が普段東北で行っている寄り添い型支援の魅力や意義を実際に活動を通して感じてもらうことができた。このことが、現地大学の学生による継続的な活動につながった1つの要因であると考えられる。また、第7次・9次・10次・11次派遣では仮設住宅での清掃ボランティアを実施することができた。サロン活動のノウハウだけでなく、清掃ボランティアのノウハウも現地大学の学生に伝えることができたほか、住民の方にも喜んでいただくことができた。

その他の活動としては、現地大学の学生との交流・意見交換会および視察が挙げられる。交流・意見交換会は第1・4・6・7・11・12次派遣で行われた。交流・意見交換会では、現地大学の学生から避難所運営や災害ボランティアセンター運営の経験など貴重な話を伺うことができたほか、活動とは異なる形での経験交流を行うことができ、活動に取り組んでいくうえでのモチベーションにつながった。また、視察はほぼ毎回の派遣で行われた。活動を実施する避難所や仮設住宅の視察はもちろんのこと、熊本城や阿蘇地方の視察をあわせて行うことによって、熊本地震被災地の状況を深く知ることができた。

(4) 現地大学の動きとそれに伴う派遣の変化

ここでは、「ソフト系」の活動に関する現地大学の動きに関して述べていく。2016年度は大きな動きは見られず、2016年12月に1度、熊助組単独でのサロン活動が行われたのみであったが、2017年度は、現地大学の学生による仮設住宅での活動が本格化した。2017年7月以降、熊助組・県立大ともに月1回程度、比較的支援が入りにくい小規模な仮設住宅での活動が展開されるようになり、2019年3月現在も継続して実施されている。

熊助組・県立大による小規模な仮設住宅での定期的な活動が始まったことに伴い、2017年8月の第8次派遣以降は、基本的に熊助組・県立大が活動を行う仮設住宅に絞って活動を行った。活動場所を絞ったことにより、今後行っていくべき支援をそれぞれの仮設住宅の現状に即して熊助組や県立大の学生と一緒に考えることができたほか、現地大学の学生と住民の方の関係が深まっていく様子を目にすることができた。また、本学の学生にとっても同じ仮設住宅を継続的に訪問できることとなり、一度きりではない関係を住民の方と築くことができた点でメリットがあった。

3. 「伴走型」支援活動の意義・可能性

(1) 熊本派遣の成果

本学が行ってきた熊本派遣は、熊助組・県立大と合同で活動し、本学の教員・学生が現地大学の学生の「伴走者」となり、現地大学の活動の展開・継続をサポートしていたという点が特色であった。これまでの熊本派遣の成果は、以下の3点であると考えることができる。

- ①学生間での経験交流を十分に行うことができたという点（目的③）
- ②現地大学の学生による仮設住宅支援が継続的に行われるようになった点（目的①）
- ③本学の学生と現地大学の学生の関係性が非常に密な関係になった点

成果①と成果②に関して補足を行うと、まず成果①に関しては、「ハード系」活動と「ソフト系」活動の双方を行っていた初期の派遣（第1次～4次派遣）において特に顕著であった。「ハード系」の活動に関しては、本学の学生が熊助組の学生から学び、「ソフト系」の活動に関しては熊助組の学生が本学の学生から学ぶといった形で展開された。つまり、一方が「教える側」、もう一方が「教わる側」といったものではなく、互いの強みを学び合う双方向的な活動であったと言える。

【図1】初期の熊本派遣における経験交流の模式図（著者作成）



また、仮設住宅での「ソフト」系の活動がメインになってから（第5次派遣以降）は、主には本学の学生から現地大学の学生にノウハウを伝えることがメインとなった。熊本派遣において寄り添い型支援のノウハウを伝えることは、本学の学生にとっても、普段東北で行っている活動を振り返る契機になったという点でも有意義であった。

そして、成果②に関しては、先述した通り熊本派遣での合同ボランティアが契機となり、熊助組・県立大による仮設住宅支援が継続的に行われるようになった。熊助組・県立大が定期的かつ継続的に仮設住宅での活動を行うようになったことは、仮設住宅のコミュニティ形成の一助となったと考えられる。東北から恒久的に熊本への支援を続けることが難しい中で、寄り添い型支援という東日本大震災以降、本学の学生が東北で培ってきたものを現地大学の学生に伝え、かつ支援のバトンを引き継ぐことができた。この点から、当初の目的①を達成できたといえるのではないかと思う。

(2) 「伴走型」支援活動の可能性

熊本派遣の事例を踏まえると、大学生による「伴走型」の支援活動を行っていく利点は以下の3点であると考えることができる。

- ①学生間での経験交流が期待できる点
- ②ノウハウ移転⇒支援のバトンの引き継ぎを円滑に行いやすい点
- ③今後行うべき支援を一緒に考える関係性を構築できる点

熊本派遣における「伴走型」支援活動は本学の緊急災害支援⁸の際のモデルケースとなり、2018年に発生した平成30年7月豪雨（西日本豪雨）の被災地である広島県を支援する活動（以下、広島派遣と記す）にも継承された。広島派遣においても、過去に東北と一緒に活動した経験のあった広島大学のボランティア団体 OPERATION つながり⁹と初期段階から合同で活動し、全6回の派遣を通して OPERATION つながりの活動の展開・継続をサポートした。広島派遣においても、熊本派遣と同様に寄り添い型支援のノウハウ移転を行うことができた。

「伴走型」支援活動は、伴走者の立場に立つ個人・団体の持つノウハウ移転を行い、支援のバトンを引き継ぐことを行いやすい。それに加え、異なるバックグラウンドを持つ学生同士が共通の課題に取り組むことを通して、学生間での経験交流が期待できるほか、継続的に合同で活動を行う中で、今後行うべき支援を一緒に考える関係性を構築できるという点で有効であるといえる。また、本学の熊本派遣や広島派遣といった緊急災害支援に限らず、防災や地域活性化の活動等、ほかの活動においても先進地のノウハウを取り入れる際や、ノウハウ移転を行っていく際に応用可能なモデルであると考えることができる。

【参考文献】

山本賢（2017）「学生による緊急災害支援の意義 ―平成28年熊本地震被災地に対する支援の事例から―」『2017年度課外・ボランティアセンター紀要』, pp.34-37, 東北大学課外・ボランティア活動支援センター。

⁸ ここでの「緊急災害支援」とは、「東日本大震災以降に発生した大規模な自然災害に対する支援活動」を表す。

第Ⅱ部 課外・ボランティア活動支援センター等の活動報告

1. 課外・ボランティア活動支援センターの事業報告

1-1. 課外・ボランティア活動支援センター2018年度の概括

2018年度の課外・ボランティア活動支援センターの主な出来事に関しては、「はじめに」で小田中センター長も触れているため、簡潔に記す。

第一に、課外・ボランティア活動支援センターの人事面の変化である。藤室玲治特任准教授と事務職員の水口早苗氏のご退職に伴い、4月より教育・研究支援者として経済学研究科博士課程を修了したばかりの菊池遼氏が赴任し、11月に金田理沙氏が事務職員として赴任した。菊池氏は東日本大震災後に学生ボランティアを経験し、東北大学の院生時代にセンターの前身の支援室関係のボランティアツアーや授業に参画したこともあり、その赴任はセンターにとって大きな力となった。しかし、2019年度に特任助教の江口怜が転出することが決まり、続いて11月頃には菊池遼氏が次年度転出する見込みとなった。このように本年度は、人事や組織の面において、これまでの体制を次の世代にいかにか継承していくのかという課題に直面することになった年であった。こうした状況のため、今年度からは小田中センター長と教職員のスタッフ打ち合わせを週1回定期開催し、緊密な情報共有を行った。

第二に、東北大学の上部でも動きがあり、センターの運営にも一部影響を与えた。2018年4月に大野英男新総長に交代し、高度教養教育・学生支援機構長には滝澤博胤先生が就かれた。前花輪機構長時代に始められた課外活動団体リーダー層と機構長との直接の意見交換会は、今年度は計3度行われ、スプリングフェスティバルと生協学生委員会組織部（おおわん）の時間割決め大会の合同開催が決まるなど、課外活動支援の面でも大きな進展があった。また、後述する災害ボランティア派遣の面でも滝澤理事には大変お世話になった。さらに、高度教養教育・学生支援機構の自己評価報告書のとりまとめが1年をかけて実施され、その中で改めて課外・ボランティア活動支援センターの意義と役割が問われることになった。

第三に、授業に関しては、開講数が減ったものの、東日本大震災に関するオムニバス講義や震災復興や様々な人権課題に取り組むサービスラーニング科目について、藤室先生の開発された授業も含めて引き続き7コマを開講することができた。その実施に際して、ティーチングアシスタントとして長年授業開発に協力していただいた大学院生の松原久氏の援助も大きかった。サービスラーニング型の授業における学びの意義や特徴に関しては、学習支援センターやグローバルラーニングセンターの先生方と5月頃に「他者との学び研究会」を立ち上げ、そこに江口と菊池氏が参加して有意義な議論を行うことができた。

第四に、2018年の漢字に「災」が選ばれたことに象徴されるように、自然災害が多発した。センターとしては、体制が不安定な中で方針に迷いもあったが、「被災地に行きたい、何かしたい」という学生の声に押されながら、大阪北部地震、西日本豪雨災害、北海道胆振東部地震の被災地に学生ボランティアを派遣することになった。そこで培われた関係と、熊本地震や東日本大震災の被災地で培ってきた関係をもとに、2019年2月には9大学合同の東北被災地ツアーとボランティアセミナーを開催し、大学間ネットワーク構築に向けた基盤づくりを行うことができたのは、今年度の事業の中でも特筆すべきことであった。

第五に、SCRUM の中でも新たな活動領域が広がっただけでなく、井戸端会議にも環境や貧困など様々なジャンルのボランティア団体の参加が増え、学内ネットワークの連携も進んだ。ボランティアフェアへの出展団体数も増加している。また、SCRUM 関係の活動に関しては、昨年度に引き続きYahoo!基金よりご助成をいただいたことが大きく、また日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）と協定を結び多くの援助を受けることができた。東日本大震災関係の助成金が減少する中で、活動をいかに継続できるのか、今年度は顕在化しなかったが、引き続き今後も大きな課題となるだろう。

以上のように、大きな変化の中でも、これまでの蓄積を生かしてセンターとしては一定の役割を果たしたと考えている。付言すれば、目前に控えた「東京オリンピック・パラリンピック」と「東日本大震災 10 年」を睨みつつ、東日本大震災の経験と教訓を忘れず、人々の具体的な生活現実や抱える課題に寄り添いながら、〈ポスト震災期〉を見据えた課外・ボランティア活動のあり方を模索していくという課題は、次年度にも引き継がれることになるはずである。

1-2. 高度教養教育・学生支援機構の自己評価

課外・ボランティア活動支援センターは、2014 年度の高度教養教育・学生支援機構（以下、機構）の新設の際に新たに発足したセンターである。2018 年度は、機構の自己評価が行われ、自己評価委員会の作業部会に江口特任助教が参加した。その作業の中で改めて課外・ボランティア活動支援センターの意義や役割が見直されることになった。また、東北大学では大野新総長の下で新たなビジョン策定が行われ、11 月には「東北大学ビジョン 2030」が示され、教育と社会連携に関連してボランティア活動が重点取り組みに位置づけられるなど、学内の課外・ボランティア活動の位置づけに関しても変化が見られた。

自己評価委員会の作業部会は 5 月に初めて集まり、機構ビジョンの重点戦略・展開施策ごとに自己評価をとりまとめることになった。課外・ボランティア活動支援センターは、重点戦略 6「自己発展力のある主体的学生を育成する総合的学生の推進」の項目の中で、達成状況や評価、残された課題や将来への施策提案等を記した。課外・ボランティア活動支援センターに関しては、この 4 年間で想定以上の成果をあげたと自己評価し、将来への施策提案には、「特に震災復興ボランティアの推進や授業開講等のこれまでの成果を踏まえ、多様な分野の課外活動・ボランティア活動（まちづくり、過疎地支援、地域福祉、災害救援、人権擁護等）の総合的支援を行い、課外活動と連携した正課のサービス・ラーニング科目の開発・実施・評価を行う。また、課外活動・ボランティア活動支援の意義について、市民性教育、学生の居場所創出、地域連携・社会連携等の多様な観点からの解釈と提言を行う。さらに以上の取組みを進めるための体制整備（専任教員の配置等）を行う」と記した。その後のとりまとめを経て、11 月に機構の自己評価報告書が作成され、12 月には外部委員の評価を受けた。自己評価報告書の中では、「課外・ボランティア活動」に関する将来構想の中で、「学生の挑戦心に応え、自己実現と能力の開花を図る機会として、課外活動やボランティア活動には貴重な教育的意義があり、主体的・自発的な挑戦機会を拡充していく必要があるが、継続的な業務実施のため、専任教員ポストの確保が課題である」と記された。これまで、センターには専属教員の配置がなく、安定的な運営を行うことが困難であることが大きな課題となっており、この問題点が機構の中で公式に位置づけられたことは大きな意味があった。

2 月には、自己評価報告書で設置が提案された「高度教養教育・学生支援機構改革推進本部」が設置され、引き続き江口特任助教が構成員となった。改革推進本部では、機構の新たなビジョン策定、

部門・室とセンターのマトリクス構造の検証、予算や人事、後方のあり方等が様々な側面で検討されており、その中で改めて機構や大学全体における課外・ボランティア活動支援センターの意義と役割を一層明確にしていくことが求められている。

1-3. 事務連絡会議（運営会議）

事務連絡会議（運営会議）は、課外活動・ボランティア活動に関連する教職員が月に1回定例で行う情報交換の場であり、実質的に課外・ボランティア活動支援センターの方針はここで相談して決定している。現在は、課外・ボランティア活動支援センターの教職員、グローバルラーニングセンターの教員、学友会体育部・文化部の教員、有識者教員（西出優子先生、門間由記子先生）、学生支援課長、支援企画係長、活動支援係長、学生スタッフ SCRUM 代表が参加している。毎回の主な議題をまとめたのが下表である。

本年度は、藤室玲治教員・事務職員の水口さんのご退職に伴い、4月に学術研究員として菊池遼先生が赴任、11月に事務職員として金田理沙さんが赴任した。さらに翌年度には江口と菊池の転出が決まり、翌年度の人事・体制に関して大きな時間を費やした。その他、教育開発推進経費に関する事業や Gakuvo との協定事業、相次いだ自然災害対応等についても議論がなされた。この他、体育部長で副センター長の永富良一教員からは、大学スポーツ協会 UNIVAS 設立の動向や東京オリンピック・パラリンピックを巡るボランティア募集の動向等についても情報共有がなされた。課外活動関係では、新サークル等の修繕と新たなテニスコート裏の部室棟の整備などの動きがあった。

【表】事務連絡会議一覧（2018年4月～2019年3月）

回	日程	主な議題
34	4/18	<ul style="list-style-type: none"> ・新年度の授業実施状況について ・新年度のセンター予算見込みについて ・学生アルバイト雇用について ・学生ボランティア活動支援委員会およびボランティア団体登録について ・高度教養教育・学生支援機構の自己評価委員会作業部会について ・ベイラー大学生の受け入れについて ・日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）との協定事業について
35	5/15	<ul style="list-style-type: none"> ・新年度のセンター予算見込み・教育開発推進経費の申請について ・学生ボランティア活動支援委員会およびボランティア団体登録について ・仙台市社会福祉協議会およびピースボートボランティアセンター（PVC）共催の災害ボランティア入門講座について ・課外活動団体合同研修会について
36	6/13	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア団体登録の申請について ・学生ボランティア活動支援委員会について ・自己評価委員会について ・課外活動団体合同研修会について
37	7/18	<ul style="list-style-type: none"> ・教育開発推進経費「社会連携・市民性教育・「居場所」創出に向けた「正課・課外リンク」の開発と評価について ・大阪北部地震被災地派遣および西日本豪雨災害への対応について

38	8/20	<ul style="list-style-type: none"> ・西日本豪雨災害対応について ・教育開発推進経費「社会連携・市民性教育・「居場所」創出に向けた「正課・課外リンク」の開発と評価について ・第2回課外活動団体合同研修会について ・来年度に向けた体制づくりについて
39	9/18	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度のセンター体制について ・教育開発推進経費「社会連携・市民性教育・「居場所」創出に向けた「正課・課外リンク」の開発と評価について ・第2回課外活動団体合同研修会について ・Gakuvo 協定事業について
40	10/17	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度のセンター体制について ・教育開発推進経費「社会連携・市民性教育・「居場所」創出に向けた「正課・課外リンク」の開発と評価について ・第2回課外活動団体合同研修会・滝澤理事との意見交換会の結果について ・総長裁量経費第2次募集と北海道被災地支援について
41	11/14	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度のセンター体制について ・教育開発推進経費「社会連携・市民性教育・「居場所」創出に向けた「正課・課外リンク」の開発と評価について ・第3回課外活動団体合同研修会・滝澤理事との意見交換会の結果について ・総長裁量経費第2次募集と北海道被災地支援について ・『2018年度 課外・ボランティア活動支援センター紀要』刊行について
42	12/12	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度のセンター体制について ・教育開発推進経費「社会連携・市民性教育・「居場所」創出に向けた「正課・課外リンク」の開発と評価について ・第3回課外活動団体合同研修会・滝澤理事との意見交換会の結果について ・活動実施届について
43	1/21	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度のセンター体制について ・教育開発推進経費「社会連携・市民性教育・「居場所」創出に向けた「正課・課外リンク」の開発と評価について ・スプリング・フェスティバル&時間割決め大会 ・『2018年度 課外・ボランティア活動支援センター紀要』刊行について ・活動実施届について
44	2/13	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度のセンター体制について ・教育開発推進経費「社会連携・市民性教育・「居場所」創出に向けた「正課・課外リンク」の開発と評価について ・2019年度課外・ボランティア活動支援センター開講の授業について ・スプリング・フェスティバル&時間割決め大会 ・『2018年度 課外・ボランティア活動支援センター紀要』刊行について ・学生ボランティア活動支援委員会およびボランティア団体登録 ・活動実施届・活動報告書について

45	3/5	<ul style="list-style-type: none"> ・来年度のセンター体制について ・スプリング・フェスティバル&時間割決め大会 ・学生ボランティア活動支援委員会およびボランティア団体登録 ・活動実施届・活動報告書について ・Gakuvo 協定事業について ・大学間ネットワークの形成について
----	-----	---

1-4. 日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）との協定事業

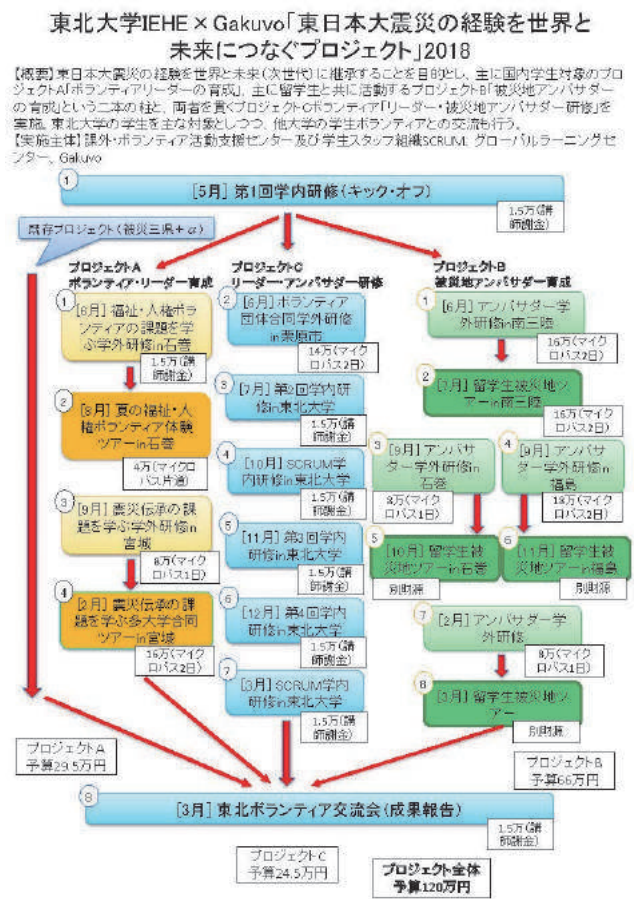
公益財団法人日本財団学生ボランティアセンター（以下、Gakuvo）は、学生ボランティア活動推進のため、日本国内の各大学に協定締結の呼びかけを行っており、東北大学には2016年11月にその旨のご提案があり、総長室より連絡を受けて学生支援課および課外・ボランティア活動支援センターで検討を重ねていた。その後、Gakuvo 担当者との打ち合わせ等を経て、課外・ボランティア活動支援センターとグローバル・ラーニングセンターの2業務センターが中心となって、Gakuvo と連携して「東日本大震災の経験を世界と未来につなぐプロジェクト」と題した事業を2018年度以降に進める目処が立ったため、高度教養教育・学生支援機構（以下、機構）とGakuvo で「学生ボランティア活動推進に関する協定」を結ぶことになった。協定は、2017年12月の機構教授会議で承認されたのち、Gakuvo と協定が結ばれた。なお、協定に基づく事業実施にかかる経費は、毎年、機構とGakuvo の合意によって定める実施計画書・予算書に従って、分担を決めることになった。分担された経費については、本学が寄付金・事業委託等として受け取るものではなく、Gakuvo が直接、支出するという方式をとった。

2018年度の事業計画については、課外・ボランティア活動支援センターおよびSCRUMの学生とグローバル・ラーニングセンターで打ち合わせ、3月13日にGakuvoの宮腰氏と打ち合わせを行った後、右図のように決定した。

実際に、Gakuvoのご支援を受けて実施した事業および打ち合わせの日程・概要は次頁以下の表の通りである。特に、SCRUM 震災伝承部の学校防災スタディツアーや他大学合同ツアー、SCRUM 国際部の事前研修ツアー等は、このご支援がなければ実現が困難であり、大変ありがたかった。その他全体を通して、これまでに実施してきた事業をより発展的に行うことができた。

来年度は、計画をもう少し緩やかに設定し、学生の自発性が発揮されるプログラムとすること、課外・ボランティア活動支援センターおよびグローバル・ラーニングセンターの教員が開講する正課の授業もプロジェクトの中に組み込むことを予定している。

【図】Gakuvo 協定事業



【表】 Gakuvo との協定事業一覧

事業番号	実施時期	事業名称	概要	支援を受けた予算
	5/9	Gakuvo との打合せ		
C-1	5/15	佐藤誠悦氏講演会「震災の経験を伝えるということ」(第1回学内研修)	元消防士で震災語り部の佐藤誠悦氏をお招きした講演会。プロジェクトBと関連。	講師謝金
B-1	6/16	南三陸事前研修ツアー(アンバサダー学外研修)	課外・ボラ、GLC、SCRUM 国際部が、佐藤誠悦氏の案内で南三陸の現状を学んだ。一般学生も公募。	マイクロバス代
C-2	6/30-7/1	いっぽこ合宿(ボランティア団体合同学外研修)	東北大学内ボランティア団体のメンバーが一堂に会しワークショップ・交流・コラボ企画の発案等を行った。	中型バス代
	7/3	Gakuvo との打合せ	Skype 会議	
C-3	7/3	八幡悦子氏講演会「課外活動におけるセクハラ防止のために」(第2回学内研修)	プロジェクト全体に関わるハラスメント防止の意識涵養のための講演会。	講師謝金
	7/20	Gakuvo との打合せ	Skype 会議	
B-2	7/28-29	ベイラー大学との協働プロジェクト“Human of Minami-sanriku”(留学生被災地ツアー)	GLC が企画し、佐藤誠悦氏の協力を得て、米国ベイラー大学生と共に南三陸の復興過程等を学んだ。	マイクロバス代
B-4	8/10	福島事前研修ツアー(アンバサダー学外研修)	SCRUM 国際部を中心に、福島県富岡町・いわき市を視察した。	マイクロバス代、3・11 富岡町を語る会謝金
A-3	9/23-24	学校防災スタディツアー(震災伝承の課題を学ぶ学外研修)	SCRUM 震災伝承部を中心に、宮城県内で被災した学校等を視察した。	マイクロバス代、TTT&大川伝承の会謝金
A-2	9/30	子どもの貧困問題解決に向けた取組に学ぶボランティア体験プログラム報告会(夏の福祉・人権ボランティア体験)	NPO 法人 TEDIC 理事の鈴木平氏をお招きし、夏休みにこども食堂等で活動した学生の振り返りワークショップを行った。	講師謝金・交通費
	9/28	Gakuvo との打合せ	Skype 会議	
C-4	10/14	頼政良太氏講演「私にとってのボランティア」(SCRUM 学内研修)	神戸大学時代から災害ボランティアを始め、NGO に就職した頼政氏の講演。	講師謝金・交通費・宿泊費

B-6	11/18	Fukushima Study Tour (留学生被災地ツアー)	富岡町 3・11 を語る会に現地をガイドして頂いた。	3・11 富岡町を語る会謝金
C-6	12/4	鈴木平氏講演「学生団体の組織運営」(第4回学内研修)	NPO 法人 TEDIC 理事の鈴木平氏に学生団体独自の組織運営の方法について講演頂いた。	講師謝金・交通費
	12/10	Gakuvo との打合せ		
B-7	1/5	南三陸事前研修ツアー (アンバサダー学外研修)	2 月の留学生対象南三陸ツアーに向けて、佐藤誠悦氏の案内で視察を行った。	レンタカー代
A-4	2/18-19	震災伝承の課題を学ぶ多科大学合同ツアー in 宮城	東日本大震災、熊本地震、西日本豪雨災害、大阪北部地震の被災地でボランティア活動する大学生を招いて東北の被災地を回った。	大型バス代

※計画していたが、Gakuvo からのご支援を受けなかった企画は除いた。

1-5. 課外・ボランティア活動研修会

昨年度に引き続き、SCRUM やボランティア登録団体の研修の機会として、課外・ボランティア活動研修会を前期に 2 回、後期に 3 回の計 5 回開催した。本来は計 4 回を予定していたが、第 5 回に関しては一般社団法人ワカツクより、東北大学での研修会開催の打診を受け、共催の形で開催することになったものである。ボランティア登録団体からは 1 名以上の参加を求め、さらにその他課外活動団体にもチラシを配布して広報した。なお、【1-4】で記した通り、第 1 回、第 2 回、第 4 回に関しては Gakuvo との協定事業の一環として実施した。実施スケジュールと概要は以下の通りである。

【表】課外・ボランティア活動の実施スケジュールと概要

回数・日時	タイトル	講師	参加人数	概要
第 1 回 5/15	震災の経験を伝えるということ—いのちを守るための震災伝承の意義	佐藤誠悦氏 (元南三陸消防署副署長、震災語り部)	32 人	南三陸町における震災当時の様子や被害に関する講演と震災伝承の意義についてのワークショップ
第 2 回 7/3	課外・ボランティア活動におけるセクハラ防止のために	八幡悦子氏 (NPO 法人ハータィ仙台代表、助産師)	16 人	地域活動や団体内でのセクハラ等を防止するための基礎知識のガイダンス
第 3 回 10/23	災害ボランティアセンター・運営サポーター養成講座	仙台市社会福祉協議会	19 人	災害ボランティアセンターに関する基礎知識のガイダンスと運営サポーターの体験ワーク

第4回 12/4	学生団体の組織運営	鈴木平氏 (NPO 法人 TEDIC 理事)	23 人	団体運営やメンバー間のやり取りについてのガイダンスとワークショップ
第5回 12/14	自分と仲間の“こころ”を大切にする方法	高橋由佳氏 (NPO 法人 Switch 理事)	7人	活動時の困りごとや悩み事に対する解決やセルフケアに関するガイダンス

【第1回 震災の経験を伝えるということ—いのちを守るための震災伝承の意義】

第1回目は、元南三陸消防署副署長で、震災語り部をしている佐藤誠悦さんをお招きしてお話を伺った。震災当時は消防士として現場の最前線で救助を行い、自身の妻を津波によって失いながらも職務を全うし、その後震災の経験を伝承しようと日本だけでなくアメリカなどでも講演を行ってきている佐藤さんのお話に、来場者は心を打たれて真剣に聴講していた。また、講演の後には震災の経験を伝承していくことの意義について少人数のグループに分かれてワークショップを行い、それぞれの意見を共有した。参加した学生からは以下のような感想があった。

- ・ 命を救う立場にあって、奥様をなくされたその悲しみと後悔は、ご本人から聞かないと全く分からないもので、聞いても完全には理解できないものですが、心にひびくものがありました。
- ・ 「世界に発信」という言葉を何度もおっしゃっていて、どうして、そんなに発信することに力を入れるのだろうかと思った。が、人に伝えることで、ムーブメントが起きていくのが素敵だと思いました。

【第2回 課外・ボランティア活動におけるセクハラ防止のために】

第2回目は、昨年度に引き続き、DV・性暴力被害者支援に取り組み、人権教育の観点から性教育の講演活動に取り組まれている八幡悦子さんをお招きしてお話を伺った。実際、ボランティア活動中にセクハラ被害にあう例があり、また課外活動の中でセクハラはじめ様々なハラスメントが生じやすい状況があり、ハラスメントを起さない／身を守るための知識と技法を身につけることを狙いとしていた。学生からは以下のような感想があった。

- ・ 性暴力に関して数え切れないほど多くの事件・事例があることにとても驚きました。私たちと同じ世代の人がそういった事件などに巻き込まれていると知って、他人事にはいけないなと思いました。
- ・ 最前線で活動される方のお話と合って、ハラスメントに関する問題の総体的な実態がよくイメージできるようになった。

【第3回 災害ボランティアセンター・運営サポーター養成講座】

第3回目は、仙台市社会福祉協議会の職員の方々をお招きしてお話を伺った。災害時におけるボランティアセンターの運営や東日本大震災当時の様子、今年度に起きた西日本豪雨災害時に職員が現地に赴いた際の様子について聴講した。講演の後には実際にどのようにボランティアセンターが運営されてボランティアを受け入れているか模擬体験した。参加した学生からは以下のような感想があった。

- ・ ボランティアを円滑に進めるためには運営側のサポートも重要だと感じた。その大切な運営側のことを知れて良かった

- ・作業系のボランティアでも被災された方に「寄り添う」気持ちを忘れずに活動していくことが大切だと改めて実感しました。機会があれば災害ボランティアセンターの運営側のボランティアにも挑戦したいと思います。

なお、このご講演は仙台社会福祉協議会の方より、「ぜひ運営サポーターとなってくれる大学生を増やしたいので大学内で講座をできないか」という打診が4月にあったことで実現した。ぜひ来年度も実施したいとお声もいただいております、仙台市社協さんとの継続的な関係構築の足掛かりにできればと考えている。

【第4回 学生団体の組織運営】

第4回は、学生団体の運営にこれまでも取り組んできており、現在もNPO法人TEDICにて活動している団体運営について詳しい鈴木平さんをお招きしてお話を伺い、グループごとにワークショップを行った。団体を運営することについて基本的なことを講習していただき、参加者のモチベーションや団体の理念についての認識について話し合った。参加した学生からは以下のような感想があった。

- ・学生団体の位置づけから悩みの共有まで抽象的なことも具体的なことも考えられてよかったです。
- ・団体に関して、今抱えている問題がここで話したこと、聴いたことを基に徐々に解消出来たらと思う。他団体の人たちの意見も聞けてよかった。

【第5回 自分と仲間の“こころ”を大切にする方法】

第5回は、ボランティア活動をする上で大切なこころのケアについて、認定NPO法人Switch理事長の高橋由佳さんを昨年に引き続きお招きしてお話を伺った。メンタルヘルスの考え方についてご講演いただき、どうやってボランティア活動をする上で自分だけでふさぎこむことなく楽しく活動できるかについて参加者同士で考えた。参加した学生からは以下のような感想があった。

- ・1年ぶりに受講したのですが、その期間のうちに経験したことが講義への新たな解釈を生んでくれた。
- ・ボランティアで傾聴活動をしているので、浄化作用や人に話すだけで悩みがすっきりすると思うことが役立つと思いました。



【写真】第1回研修会で講演する佐藤誠悦さん（左）、第4回研修会の様子（右）

1-6. ボランティア登録団体の支援

1-6-1. ボランティア団体登録の状況

2018年度は、2017年12月の高度教養教育・学生支援機構教授会議で可決された「東北大学学生ボランティア支援に関する内規」に基づく正式なボランティア団体登録を行う年となった。前年度にすでに方針を示していた通り、この内規によって、東日本大震災に限らない様々な学生ボランティア団体の登録が可能になった。登録の受付は、学生支援課ではなく直接に課外・ボランティア活動支援センターが行うことになり、活動実施届や活動報告書の提出先も課外・ボランティア活動支援センターとなった。

2018年5月末段階で登録を更新した団体が7団体、更新しなかったのがみまもり隊、献血推進サークル、こども☆ひかりプロジェクトの3団体だった。新たに登録することになったのが、SCRUM、amo、bridge、balloons+の4団体である。SCRUMは、これまで学生スタッフ組織であるため登録を行わない方針であったが、昨年度に学友会登録を独立団体として行ったため、それに倣ってボランティア団体登録も行うことになった。結果的に、登録団体数は11団体となり、過去最高となった。

【表】2018年5月にボランティア団体登録ないし更新申請を行った団体

団体名	代表者名	顧問教員名
震災復興・地域支援サークル ReRoots	高田裕希	片岡龍 先生
地域復興プロジェクト“HARU”	小林奎太	村松淳司 先生
国際ボランティア団体 AsOne	三上菜々子	森田直子 先生
東北大学ぽかぽか	富岡奈央	小田中直樹 先生
東北大学福興 youth	平野杜萌	松本行真 先生
東北大学インクストーンズ	江藤ゆうの	島田明夫 先生
東北大学 SCRUM	和久晋太郎	小田中直樹 先生
基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークル“たなぼた”	高橋遙	富田真紀 先生
フェアトレード推進サークル amo	村川美希	富田真紀 先生
高校生支援団体 bridge	石川祐也	松浦祐司 先生
薬害被害者支援サークル balloons+	杉浦弘樹	堂浦克美 先生

1-6-2. ボランティア登録団体に対する支援

ボランティア登録団体に対しては、井戸端会議（ボランティア団体の連絡会議）を開催して情報交換や助成金情報の提供等を随時行い、不定期で互いの悩みを共有しあうワークショップ等も行った。また、川内北キャンパス厚生会館内のボランティアミーティングルームの貸し出し、課外・ボランティア活動支援センターが管理する倉庫内の一部の貸し出し等も継続して行った。さらに、【1-5】で記した課外・ボランティア活動研修会には、ボランティア登録団体から1名以上参加するよう求め、ボランティア活動を行う上での知識・技術に関する研修の機会とした。

1-7. 開講した授業

本年度は、藤室特任准教授のご退職に伴い、これまで開発してきたサービス・ラーニング科目の絞り込みを行わざるを得なかった。しかし、経済学研究科西出優子教授が昨年度開講した1コマを引き継いで下さり、また4月に着任した菊池が基礎ゼミ・展開ゼミ・基幹科目引き継いだことから、一定

の授業を提供することができた。結果、今年度は下表の通り、計7コマ（14単位）の授業を提供（ないし開講協力）した。以下、各授業の概要について紹介していく。なお、担当教員の内、江口は高度教養教育・学生支援機構協教育の特任助教、菊池は同じ機構の学術研究員である。授業開発に際しては、機構の公募に「多様な他者との共生に向けた現代的教養の育成に資する人権教育プログラムの開発事業」が2016年度に採択され、2018年度も援助を受けて授業開発・実施を行った。

【表】2018年度の課外・ボランティア活動支援センター開講科目（すべて全学教育科目）

科目群	授業題目	担当教員	開講時期	受講生
基幹科目	東日本大震災からみる現代日本社会	江口怜	【2Q】 火1、木1 【2S】月4	2Q 19名
		西出優子 菊池遼		2S 17名
基礎ゼミ	被災者の生活再建・コミュニティ形成の課題とボランティア活動	小田中直樹 江口怜 菊池遼	【1S】 月3～4	14名
	共生社会に向けたボランティア活動—人権・多様性・エンパワメント	江口怜	【1S】木5	11名
	NPO 法人と行政の協働—仙台市の地域課題を解決するアイデアを考えよう	西出優子	【1Q】 月3～4	
展開ゼミ	被災者の生活再建・コミュニティ形成の課題とボランティア活動	江口怜 菊池遼	【2S】木4	4名
	福島における人権保障と共生の課題—原発事故以降を生きる人々に寄り添う	江口怜	【2S】金3	8名

1-7-1. 基幹科目・社会の構造「東日本大震災から見る現代日本社会」

■担当教員：江口怜、西出優子、菊池遼

■受講者：第2クォーター 19名、TA1名（松原久さん）
第2セメスター 17名、TA1名（松原久さん）

■授業時間帯：第2クォーター 火曜日1限、木曜日1限
第2セメスター 月曜日4限

■授業概要（シラバスより）

大きな自然災害が社会に与える被害と、そこからの復興過程においては、その時代の社会が抱える課題が浮き彫りになります。2011年に発生した東日本大震災においても地方の過疎と少子高齢化の進展、人口減少社会への突入という課題が、復興を困難にしています。また福島第一原子力発電所の事故は、広域避難という課題だけでなく、原子力発電とエネルギー政策について大きな課題を提起しました。その他、避難や防災のあり方、震災遺構の保存や震災伝承、NPOやボランティアの役割、震災時のマイノリティ支援の課題なども問われています。こうした東日本大震災が提起した様々な課題を学び、そこから現代日本社会の課題と構造について学ぶことが、本講義の目的です。

■学習の達成目標（シラバスより）

・東日本大震災が明らかにした課題の特殊性と普遍性についての理解。大震災によって明らかになった多様な課題について、具体的な事例にそって理解するとともに、その課題が被災地のみならず、現

代日本社会全体の課題につながる普遍的な側面を持つことを、講義の聴講やグループディスカッション等で理解します。

- ・課題の学際性についての理解。大震災によって明らかになった多様な課題は、例えば原発問題を取り上げても、単独の学問分野のみによるアプローチでは十分な理解は難しく、学際的視点・文理融合的視点・トランスサイエンス的発想が必要なことを理解します。

- ・自らの専門性・市民性との関連による理解。講義を通じて学ぶ課題について、自らの専門性との関連について、あるいは市民性（地域社会での防災やまちづくりへの関与、生命の尊厳や人権に関する意識、市民活動・ボランティア活動への参加、自治体・国家政策への関心等）との関連について理解し、他人事としない態度を身に付けます。

■実施スケジュール

	内容	講師
第1回	オリエンテーション	西出優子・江口怜・菊池遼・松原久からガイダンス。前期のみ藤室玲治氏講義あり。
第2回	被災の実際と避難の課題	花渕みどり氏(せんだい3.11メモリアル交流館・臨時職員)
第3回	防災と伝承の課題—震災遺構と語り部①	佐藤敏郎氏(小さな命の意味を考える会代表、元女川中学校教員)
第4回	防災と伝承の課題—震災遺構と語り部②	佐藤翔輔准教授(東北大学災害科学国際研究所)
第5回	被災者の生活再建の課題とボランティアの意義①	飯塚正広氏(元つながりデザインセンター・あすと長町代表理事、元あすと長町仮設住宅自治会長)
第6回	被災者の生活再建の課題とボランティアの意義②	門脇篤氏((一社)まちとアート研究所代表理事、(一社)アート・インクルージョン理事)
第7回	復興まちづくりの課題①	島田明夫教授(東北大学公共政策大学院・災害科学国際研究所)
第8回	復興まちづくりの課題②	松原久氏(東北大学文学研究科博士課程)
第9回	フィールドワーク報告	※各自の視察をレポートにまとめ、報告し合う
第10回	原発事故と復興の課題①	江口怜特任助教(東北大学高度教養教育・学生支援機構)
第11回	原発事故と復興の課題②	松本行真准教授(東北大学災害科学国際研究所)
第12回	東日本大震災とマイノリティの課題①	菊池哲佳氏(多文化社会コーディネーター/仙台観光国際協会勤務)
第13回	東日本大震災とマイノリティの課題②	杉山裕信氏(CIL たすけっと事務局長)
第14回	東日本大震災とNPOの課題①	西出優子教授(東北大学経済学研究科)・菊池遼氏(東北大学高度教養教育・学生支援機構)
第15回	東日本大震災とNPOの課題②	吉田祐也氏(東北大学経済学研究科修士課程/前南蒲生復興部事務局長)

毎回の授業では、講義または映像資料の視聴を行なった後（60分程度）、グループディスカッションの実施と全体発表を行ない（20分程度）、ミニツツペーパーを執筆するという流れをとった（10分程度）。なお講義は基本的にオムニバス形式であり、担当教員だけでなく、テーマを専門とする教員や外部の実践家・専門家を招いている。

この授業では、合わせてフィールドワークの実施を課題とした。フィールドワーク先としては、震災遺構や記念館等、東日本大震災の被害や復興状況を示す施設などの訪問、東日本大震災に関わるボランティア活動への参加のうち、いずれか一つの実施と感想提出を行なうこととした。

■学生の感想

・「授業中のフィールドワークで得られた課題のひとつに、地域にとって未知の災害に対していかに予防し、対応していくかと言うものがありました。石巻の河川沿いの地域では、古くから内陸で地震に対する備えはできており、防災の意識もあったものの、津波に対しては想定外であり、また堤防を作ると栄えてきた漁業のさまたげになるため建設の計画が進まないまま東日本大震災で津波の被害をうけてしまったという話を聞きました。このように、古くからの慣習だけでなく、新しく命を助けるために考えられたものをどう広めていくかが課題となることがわかりました」(工学部1年・男性)

・「授業全体を通して、オムニバス形式で授業が展開され、毎週聞きごたえのあるものばかりだった。グループディスカッションで、自分の意見をアウトプットする場を設けていただいたおかげで、ぼんやりと抱いていたものを言語化し、具体性を高め、自分の中に落とし込むことができたとともに、他の受講生からのフィードバックがもらえるため、知見を広めることができた」(文学部1年・男性)

1-7-2. 基礎ゼミ「被災者の生活再建・コミュニティ形成の課題とボランティア活動」

■担当教員：小田中直樹、江口怜、菊池遼

■受講者：東北大学1年生14名、TA1名（松原久さん）

■授業時間帯：第1 Semester 月曜日 3限・4限

■授業概要（シラバスより）

東日本大震災より7年が経過しました。現在も仮設住宅等で生活されている方もいますが、多くの被災者は自力で家を再建したり復興住宅へ入居していますが、新たな生活への適応に課題を抱えている方も多くいます。高齢化も進んでいます。そのため今も、被災地でのボランティア活動は必要とされています。この授業では小グループに分かれ、復興住宅等でのボランティア活動を実際に体験します。その上で、被災者や支援者のお話などを通して、被災者の生活再建とコミュニティ形成にどのような課題が存在するのか理解を深めます。最後に特定の地域・復興住宅団地等を対象としたコミュニティ形成のためのボランティア活動を企画・実施し、その成果を自己評価します。

■学習の達成目標（シラバスより）

- ・ボランティア活動に参加し、現在の被災者の生活再建・コミュニティ形成の課題を把握できるか
- ・フィールドワーク等を通して、把握した課題の背景や被災前の生活等を理解できるか
- ・ボランティア活動の企画・実施を通して、主体的に課題解決のための行動をとることができるか
- ・グループ活動を通して、他者と役割を分担しながら、協調して活動できるか

■実施スケジュール

今年度は、災害公営住宅（復興住宅）におけるコミュニティ形成の課題に焦点をあてることとし、①仙台市若林区大和町、②石巻市新蛇田（のぞみ野、あゆみ野）の2地区で実践活動を行なった。

授業の流れとして、まずはゴールデンウィークを利用してボランティア活動への参加を課し、活動終了後は振り返りのグループディスカッションを行なった。つづいて活動現場に関わる実践者の講演とフィールドワークを実施し、各地域の現状と課題に関する理解を深める機会とした。その後は、班ごとに具体的な実践活動を企画し、受講生は認で活動を行なった。なお企画にあたっては、連携先と企画案の打ち合わせを行なうこととし（1回以上）、より活動現場の課題に即した実践となるように促した。

■連携先と、活動現場・活動内容

対象地域	連携先	活動内容（活動現場）
仙台市若林区 大和町	・若林区社会福祉協議会 ・若林区大和地区社会福祉協議会	・午前：流しそうめん縁日（卸町市営住宅） お好み焼き作り（中倉市営住宅） ・午後：ホットケーキ作り（大和町市営住宅）
石巻市 のぞみ野	・石巻じちれん	・午前、午後：流しそうめん（新西前沼第二復興住宅） たこ焼き作り（新沼田第二復興住宅）

■学生の感想

・「コミュニティ形成のために必要だと考えられることは、学生が復興住宅や戸建て住宅に住んでいる人達に対して交流の場を設けることである。はじめの目標でも交流の場を設けるということを述べたが今回のボランティアを経験して改めて重要だと感じた。また、学生が行うメリットとしては、様々な年齢の人達が集まるという点である。学生は子ども達からすれば年の近い存在であり、高齢者の方からすれば孫の世代であるため話のしやすい対象なのではないかと考えられる。」（農学部1年・女性）

・「世代間ギャップは短期では改善できないと感じた。しかし、このギャップを埋めることが、コミュニティの形成に進展すると考える。だからこそ、第三者かが介入し、長期的に訪れることで関係の修復を目指す必要がある。」（工学部1年・男性）

・「積極的に子どもたちを集めるイベントを開催することでその親同士のコミュニティが生まれるうえ、子どもたちを復興住宅の入居者も含めた地域全体で見守る雰囲気が出てくる。そしてこのことはコミュニティの形成のみならず、地域自体のアイデンティティや誇りを生み出すきっかけともなり得る。」（文学部1年・女性）

1-7-3. 基礎ゼミ「共生社会に向けたボランティア活動—人権・多様性・エンパワメント」

■担当教員：江口怜

■受講者：東北大学 1年生 11名、TA 1名（斎藤雅史さん）

■授業時間帯：第1 Semester 木曜日 5限 ※ボランティア実習は別途設定

■授業概要（シラバスより）

本ゼミでは、ボランティア活動に参加し、支援者や支援対象者（当事者）の話を聴きながら、様々な社会的課題を学び、その解決方法を考えます。ボランティア実習では、仙台市内で取り組まれている、貧困者や中国帰国者（中国残留邦人とその家族）、障害のある方や基礎教育の学び直しを求める方たち等を支援する団体の活動に参加します。また、授業全体を通して、ボランティア活動を行う上

で大切な考え方である「人権」「多様性」「エンパワメント」等の概念について学び、すべての人が人権と多様性を尊重し合いながら生きることのできる「共生社会」のあり方を考えます。

■学習の達成目標（シラバスより）

- (1) ボランティア活動への参加や文献調査等を通じて、様々な支援活動の社会的意義を理解する。
- (2) 「人権」や「多様性」「エンパワメント」等の基本的な概念について理解し、自他の権利や尊厳を尊重する意欲と態度を身につける。
- (3) 支援対象者（当事者）や支援者の方たちと積極的にコミュニケーションをとりながら、「当事者視点」で課題を理解し、課題解決に向けて必要なことを考察することができる。
- (4) 「共生社会」の実現という課題に対して、自分の意見を持ち、他者に向けて表現することができる。

■ボランティア実習受入れ団体

- ①CIL たすけっと（障害者の自立生活支援）
- ②中国帰国者支援・交流センター（東北センター）（中国帰国者の日本語学習・交流等の支援）
- ③仙台自主夜間中学（義務教育段階の学び直し、基礎教育保障）
- ④NPO 法人仙台夜まわりグループ（ホームレス支援、生活困窮者支援）

■実施スケジュール

回	日程	概要
1	4月19日	オリエンテーション
2	4月26日	講義（実習受け入れ団体の概要・抱える課題、ハンセン病）
3	4月30日	フィールドワーク（国立ハンセン病療養所東北新生園@登米市）
4	5月10日	実践者講義（仙台自主夜間中学、中国帰国者支援・交流センター）
5	5月17日	実践者講義（仙台夜まわりグループ、CIL たすけっと）
6	5月24日	ボランティア実習ガイダンス、講義（エンパワメント）
7	5月31日	講義（共生社会について）、TA 報告（ヘイトスピーチ問題）
8	6月7日	休み ※ボランティア実習振替
9	6月14日	休み ※ボランティア実習振替
10	6月21日	インタビュー調査ガイダンス、グループ別話合い
11	6月28日	ドキュメンタリー視聴（中国帰国者）、グループ別話合い
12	7月5日	ドキュメンタリー視聴（生活保護制度）、TA 報告、グループ別話合い
13	7月12日	ドキュメンタリー視聴（若者の「学びの貧困」）、グループ別話合い
14	7月19日	ボランティア体験報告会・まとめ

■学生の感想

・「正直なところわたしも本講義を受講する前は多少偏見を抱いていた。しかし講義やボランティア活動で知り、経験したことで今までの考えが本当に偏見であったことに気づかされた。だからまずは身近な友人からでもいいので自分が経験したことを発信することで、様々な境遇の人を知る機会が与えられるのではないかと思う」（文学部1年・女性）

・「たとえ社会全体に溶け込めなくても、一部の人が受け入れてくれるだけで心持ちというのは異なってくると思うし、支援する側も、奉仕するという義務感とはまた別に、同じ人間として当たり前を受け入れる、という感覚が芽生えているのだと思う。私は、そこに小さな共生の意識が生まれるのかなと感じた」（法学部1年・女性）

1-7-4. 展開ゼミ「ボランティア活動を通して、被災者の生活再建・コミュニティ形成の課題を学ぶ」

■担当教員：江口怜、菊池遼

■受講者：東北大学 1 年生 3 名、2 年 1 生名、TA1 名（松原久さん）

■授業時間帯：第 2・4・6・8 セメスター 木曜日 4 限

■授業概要（シラバスより）

東日本大震災より 7 年が経過しました。多くの被災者は自力で家を再建し、また復興住宅等へ入居していますが、新たな生活への適応に課題を抱えている方も多くおられます。高齢化も進んでいます。そのため今も、被災地でのボランティア活動は必要とされています。

この授業では小グループに分かれ、復興住宅等でのボランティア活動を実際に体験します。その上で、被災者や支援者のお話などを通して、被災者の生活再建とコミュニティ形成にどのような課題が存在するのか理解を深めます。最後に特定の地域・復興住宅団地等を対象としたコミュニティ形成のためのボランティア活動を企画・実施し、その成果を自己評価します。

■学習の達成目標（シラバスより）

(1) グループでの課題設定・解決：仮設住宅や復興住宅等をフィールドとして、グループ内のディスカッションで課題設定を適切に行い、適切な役割分担を行い、コミュニケーションを取りながら、その解決を図れるようになります。

(2) ボランティア活動への理解：仮設住宅や復興住宅等で活動するボランティアの意義と役割について、被災者や支援団体の方のレクチャーや、実際の活動への参加から、理解できるようになります。

(3) 地域課題の把握：被災の実情と復興の現状についての理解を深め、特に被災者が奪われたコミュニティを再形成することの困難さを把握するとともに、課題解決のための行政や民間支援団体、被災者自身の取り組みについても理解できるようになります。また被災程度や生活再建方法毎に複雑に異なる個別の課題があることについても学びます。

(4) 自分の専門や市民生活との関連性の把握：ボランティア活動を通して学んだ課題を「自分事」として考え、今後の専門での学習に生かせる点や、今後の市民生活との関連について把握できるようになります。

■ボランティア受け入れ団体

女川北区

■実施スケジュール

回	日程	概要
1	10 月 15 日	ガイダンス、日程決め
2	11 月 1 日	授業初回レポート発表、フィールドワークの行き先決め
3	11 月 8 日	フィールドワーク先のレクチャー
4	11 月 15 日	フィールドワークの行程決め

5	11月22日	フィールドワークの事前準備
6・7	11月25日	フィールドワークの実施（女川町）
8	12月3日	フィールドワークおよびレポート振り返り
9	12月13日	フィールドワークの企画案作成
10	12月20日	フィールドワークの行程決めと企画準備
11	1月10日	企画準備、しおり作成担当決め
12	1月17日	企画準備、しおり内容確認
13・14	1月19・20日	フィールドワークの実施（陸前高田市気仙沼市・南三陸町・女川町）
15	1月24日	ワークショップ、全体の振り返り

■授業と実施企画の概要

今回の履修者は前期セメスターの同名科目である基礎ゼミ受講経験がある学生で構成されていたことから当初の授業計画を大幅に変更し、受講生の被災地に関する興味関心に合わせが授業内容とすることにした。基礎ゼミでは仙台市と石巻市などの復興公営住宅でのボランティア活動をしてきたため、展開ゼミでは石巻市以北の三陸沿岸部を中心にフィールドワークをすることになった。

11月25日には女川町でのフィールドワーク、1月19・20日には気仙沼市や南三陸町のフィールドワークおよび女川北区でのボランティア活動をすることになった。

■フィールドワーク概要

日程	活動内容・訪問場所
11月25日	女川観光協会の語り部ガイド、シーバルピア・女川町地域医療センターの見学、（一社）コミュニティスペースうみねこのお話、女川原発視察、復興公営住宅・仮設住宅・町役場の見学
1月19日	（一社）まるオフィスのお話、陸前高田市内の視察、かさ上げ地と防潮堤の見学、馬場国昭氏のお話、唐桑御殿つなかんに宿泊
1月20日	南三陸町内の視察、女川北区でのボランティア活動（くずかけ、お茶っこ、ティッシュ箱獅子舞づくり、記念日カレンダーづくり）

■学生の感想

・「基礎ゼミにおいても感じていたが、「ボランティア活動」は相手に何かしてあげるものではないということを展開ゼミでも改めて感じた。ボランティアをする側もされる側も対等な関係であるので、女川北区でのボランティア活動のように住民さんに頼ることも必要だと思う。また、ボランティア活動は一過性のもものというイメージが強かったが、何回かボランティア活動をしていく中でやはりボランティア活動は続けていくことに意義があると感じた。」（医学部1年・女性）

・「まちをつくる、その点においてコミュニティをどう形成するかはすごく大きな問題である。地域ごとだけでなく集合住宅のコミュニティなど地方ではないコミュニティの在り方もある。どこまで建築がその面について貢献できるのか私は正直知ることができなかった。デザイン次第なのか暮らしやすさなのか、公共施設の充実なのか。どれも影響すると思うのでこれはより建築を学び研究していくこととした。」（工学部1年・女性）

1-7-5. 展開ゼミ「福島における人権保障と共生の課題—原発事故後を生きる人々に寄り添う」

■担当教員：江口怜

■受講者：8名、TA 1名（山田修司さん）、聴講生 1名

■授業時間帯：第 2・4・6・8 セメスター 金曜日 3 限

※事前フィールドワークに 1 回参加（福興 youth の活動）。本番のフィールドワークは 2 月 8 日（金）～10 日（日）に行い、ボランティア団体「東北大学福興 youth」と共催の「福島県川内村ボランティアツアー」として実施し、17 名が参加した。

■授業概要（シラバスより）

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所事故は、多くの人びとの暮らしを破壊し、社会に亀裂を生んだ。社会全体として風化が進む中で、未だ 5 万人を超える避難者が存在し、避難指示解除後に帰還した人々も新たな暮らしの課題に直面している。福島県では事故 4 年を経て自殺者が急増し、その背後には「曖昧な喪失感」があるとの指摘もある。さらに今回の原発事故は、原子力政策や被曝、帰還等に関する見解の相違が、地域社会や家族内に分断を生じさせ、事故以前と同様の暮らしを営むことやコミュニティを維持することを困難にしてしまった側面があり、課題の複雑さを現場で学ぶことの意義は大きい。

本授業では、こうした原発事故後の福島が抱える様々な課題について学び、具体的な現場で事故後を生きる人々に寄り添いながら、課題を解決する方法を考え合う。また、既に課題解決に向けて取り組んでいる行政や NPO 法人、学生ボランティア等の取組についても学ぶ。授業の最後には、福島県内の仮設住宅や復興公営住宅等を訪問してのボランティア活動、NPO 法人・社会福祉協議会・学校等への視察やヒアリングを行う 2 泊 3 日程度のフィールドワークを実施し、集中的に福島の抱える課題を学ぶ。

■学習の達成目標（シラバスより）

（1）福島第一原子力発電所事故によって生じた被害や課題について、具体的な事例に即して理解する。

（2）福島第一原子力発電所事故のもたらした課題を解決するための様々な取り組みについて、その意義と課題を具体的な事例に即して理解する。

（3）福島の抱える課題の解決に向けて必要なことについて、フィールドワークでの経験や調査に即して具体的に考え、自分自身に関わる問題として考察することができる。

（4）専門性や関心の異なる学生間や地域住民・行政職員・NPO 職員等と対話し、協働しながら、ボランティア活動やフィールドワークを企画立案し、実行することができる。

■協力団体

- ・ NPO 法人コースター（全般的なコーディネート、講義、資金面での援助等）
- ・ NPO 法人カタリバ（ふたば未来学園高校付設の双葉みらいラボ視察の受入れ）
- ・ NPO 法人昭和横丁（フィールドワーク内の川内村でのイベントで連携協力等）

■実施スケジュール

回	日程	概要
1	10月5日	オリエンテーション
2	10月12日	NHK明日へつなげよう証言記録・東日本大震災「福島県川内村～隣人との原発避難」視聴、今後の授業計画の確認
3	10月19日	東北大学福興youthの報告（齋藤美久、赤田丞）とディスカッション 事前学習会の日程決め
4	10月26日	川内村の現状と課題に関する講義（NPO法人コースター代表理事・坂上英和氏）
5	11月9日	TAの山田修司氏講義、足湯ボランティア講習会
6	11月16日	事前FWの振り返り、調べ学習の報告①（10分報告+10分議論×3人）
7	12月7日	事前FWの振り返り、調べ学習の報告②
8	12月14日	事前FWの振り返り、調べ学習の報告③
9	12月21日	フィールドワーク中の視察先および企画の検討
10	1月4日	ふたば未来学園高校出身の日下雄太さん（東北大1年）の講演、企画検討
11	1月11日	フィールドワーク企画検討
12	1月25日	フィールドワーク企画検討
13	2月1日	フィールドワーク最終調整
14	2月8日～10日	福島県川内村ボランティアツアー（フィールドワーク）、最終日に全体振り返り

■ボランティアツアー概要

2月8日（金）NPO法人カタリバの「双葉みらいラボ」視察（広野町）、富岡町・川内村視察

2月9日（土）川内村にて住民との交流イベントを実施

2月10日（日）川内村にてNPO法人昭和横丁の物資整理ボランティア、浪江町視察

■学生の感想

・「福島の課題を解決するためには、ボランティアやNPOがコミュニティ支援など行政が介入できない問題をサポートしていくことに加え、信頼しあえる関係性を生み出すことができる第三者の存在を増やしていくことが必要になると考える。そのために「現状とニーズ」を汲み取った第三者が積極的にこれを他者に発信していかなければならない。また、コミュニティ支援などの第三者が行う活動そのものが非常に大きな意味を持つものであるが、そのような活動を行う中で継続して住民の声に耳を傾けていくことが第三者の私たちに本当に求められていることではないだろうか」（教育学部1年・女性）

・「被災して多くのものを喪失した方は、誰にも理解されることのない状況に置かれていることを理解する人を一人でも増やしていくこと。また、その活動を続けていくことが自分にできることだと考える」（工学部1年・男性）

1-8. 国内外の高校・大学との交流

2017年12月よりSCRUM内に企画担当が誕生し、高校生や他大学からの被災地視察の受け入れを学生中心に請け負うようになった。2018年度の国内の高校・大学の受け入れについては「II2-6」の「SCRUM企画担当からの報告」に詳しい。

課外・ボランティア活動支援センターからの報告として、国外のアメリカ・テキサス州のペイラー大学との交流について紹介する。

ベイラー大学との交流

ベイラー大学は2012年から被災地訪問を続けてきた。2015年から東北大学との交流も始まり、2017年からは Humans of Minamisanriku という南三陸町とそこに暮らす人々の声を動画に英訳付きで紹介するプロジェクトを始めている。2018年も南三陸町で語り部をしている佐藤誠悦氏の協力も得ながら、東北大生も Humans of Minamisanriku のプロジェクトに参加した。7月10日にはオンラインでの打ち合わせ、7月25日には東北大学での打ち合わせなども経て、7月28・29日の1泊2日の行程で南三陸町の人々へのインタビューや翻訳の作業をした。

【表】 国外の大学に関するプロジェクトの概要

日時	活動場所	活動内容	東北大生参加人数	相手参加人数	解説・背景
7/28-29	ベイラー大学との合同プロジェクト	南三陸町の4氏へのインタビューとベイラー大学学生との共同の翻訳作業	7名	7名	2017年に引き続き、ベイラー大学の Humans of Minamisanriku のプロジェクトに東北大生も参加した。また、法政大学の学生も3名参加していた。

1-9. 緊急災害時の学生ボランティア派遣

2018年の夏季は日本全国各地で大規模な自然災害が立て続けに起こった時期であった。2018年6月18日発生の大阪北部地震（最大震度6弱）、2018年7月上旬発生の中日本豪雨災害、2018年9月6日発生 of 北海道胆振東部地震（最大震度7）などが挙げられる。

課外・ボランティア活動支援センターでは、以上3つの災害に対して学生ボランティアを派遣した。とりわけ西日本豪雨災害は第6次派遣まで至る中長期的な活動となった。広島大学の学生ボランティア担当部署とも情報共有や意見交換をしつつ、広島大学の学生ボランティア団体に対しては伴走型支援の形で災害後のフェーズ変化に伴うボランティア活動の変容を共に考えながら活動した。

2018年度は全国各地の被災地に学生ボランティアを派遣してきたわけだが、大学のボランティアセンターとしての立ち位置なども踏まえつつ、それぞれの災害についてどのように対応していったのかを時系列で記述していく。

1-9-1. 大阪北部地震

課外・ボランティア活動支援センターとしては当初は情報収集のみ行っており、実際のボランティア派遣には慎重であった。しかしながら、学生スタッフ組織 SCRUM の松田敦之が現地のボランティアに行きたいという意志を示した。松田は単身で現地に向かうことになったが、ボランティア活動実施届を提出してもらい、大学としても公認の活動として被災地に派遣することになった。その後、新たに時期をずらして現地に行きたいという学生が3名ほど現れ、教員の江口怜が引率して大阪府高槻市での活動をするに至った。当初は神戸市灘区篠原台における活動も検討したが、安全面を考慮して、高槻市のみでの活動になった。この際、関西大学の菅磨志保准教授とも関係を構築できた。

この派遣では、遠方の被災地であるためセンターとしては情報収集をする作業から始まった。センター教員から被災地 NGO 協働センターの頼政良太氏や神戸大学学生震災救援隊の学生・OBなどに連絡を取り、どのようなボランティアなら可能かをヒアリングしたのである。その結果、松田は NPO 法人国際ボランティア学生協会 (IVUSA) がコーディネートするボランティア活動に参加し、またその後の派遣では高槻市の社会福祉施設及び高槻市災害ボランティアセンター内での足湯ボランティアの活動をすることができた。

次に資金面である。SCRUM は 2017 年度より Yahoo!基金から支援を受けていた。Yahoo!基金との相談の上、「夏休み《学生ボランティア》被災地復興支援活動助成プログラム」に申し込むことになった。助成決定は活動後であり、資金が獲得できるかどうかは不明瞭な中での派遣となった。

また、高槻市での活動に東北大学と共に参加していた関西大学社会安全学部 1 年生の学生は、この活動に刺激を受けて、その後学生ボランティア団体を設立することになった。

1-9-2. 西日本豪雨災害

西日本豪雨災害は発生当初、各地で土砂災害や河川の氾濫が報道されるものの、どの地域でどれほどの被害が起こっているのか全容を把握できなかった。時間が経つにつれて、特に岡山県倉敷市真備町が甚大な被害を受けているとの報道があった。他には広島県や愛媛県などで大きな被害が報告されるようになる。

1 週間ほど経って被害概要が次第に明確になっていった。西日本豪雨災害の被害規模の大きさからも支援を行うべきではないかと教員の菊池遼から提案した。どの地域に入るかについては議論になったが、東日本大震災以降に東北支援をしていた広島大学の学生ボランティア団体 OPERATION つながりと連携して活動するのが良いのではないかということになった。インターネット上で情報収集をしたところ OPERATION つながりも災害直後からボランティア活動をしていることを知り、つながりの OBOG を中心に結成された NPO 法人 IMAGINUS にも協力を仰ぎつつ、連絡を取って一緒に活動できないか模索することになった。その後、広島大学の学生ボランティアの担当部署である学生生活支援グループの職員とも連絡を取り合い、意見交換をすることになった。

7 月末に 2 週に渡って先遣隊 (いずれも教員 1 名+学生 2 名) が現地に入ったが、やはり被害規模の大きさから見ても応急仮設住宅団地の建設も始まるだろうし、センターとしても中長期的な支援を継続していこうということになった。現地の団体である OPERATION つながりとパートナーの関係を結ぶことができたこともあり、継続して派遣をすることができたのである。

西日本豪雨災害派遣の資金として、まず高度教養教育・学生支援機構の機構長裁量経費を活用した。裁量経費の捻出に当って滝澤理事からのご理解が大きく、適宜ボランティア派遣の報告を行った。その後、赤い羽根共同募金や日本財団の助成金を獲得し、活動資金に充てることができた。大規模な自然災害後には民間助成金が出ることが大方想像しやすい。しかしながら採択される可能性は保証されないわけであり、今回の西日本豪雨災害の際にも助成決定前に活動することがあった。

西日本豪雨災害のような災害が発生した際に大学として第一にするのは安否確認である。広島大学の学生支援担当の教職員との話し合いの間で、双方の大学で安否確認システムがどのように活用されているか情報交換を行った。さらに、学生の心のケアに関しても話題になった。災害直後の様子を目の当たりにすることは精神的に辛いものがあり、どのように心のケアをしていくかも議論の対象となった。9 月には、広島大学宛に 3 回のボランティア派遣の経過報告と提言をお送りした。

1-9-3. 北海道胆振東部地震への対応

立て続けに災害が発生したことや、西日本豪雨災害の派遣活動が中長期的なものになるうとしていたため、北海道胆振東部地震のボランティア派遣に関してはより一層慎重であった。そのような状況のなか、北海道出身で大学院生の名古屋円花がボランティア活動に向かいたいとの意向を示したため、千葉隆司を加え、現地で名古屋の友人1名と一緒にボランティア活動をすることになった。この際はYahoo!基金の資金を特別な配慮をいただき活用させて頂いた。なお、ボランティア活動先の選定に際しては被災地NGO協働センターの頼政良太氏から助言を得ることができた。

北海道胆振東部地震に関しては、その他の資金が充当されれば支援活動を継続する構想もあったが、うまく資金調達もできなかったことや実際にボランティア活動に従事する学生の余力もなかったことから断念した。ボランティア派遣の成果としては、現地で名古屋をはじめ千葉などが足湯ボランティアを講習し、現地のボランティア団体も足湯ボランティアを継続してくれたことがあった。

1-9-4. 小括

課外・ボランティア活動支援センターでの緊急災害支援としてこれまで代表的な活動としては2016年熊本地震発生以降の熊本大学・熊本県立大学と連携したボランティア活動が挙げられる。2016年度からこれまでの3年間で第12次派遣まで実施している。この時期から東北大学課外・ボランティア活動支援センターの緊急災害支援の方法が確立していった。

課外・ボランティア活動支援センターでは2018年夏季に発生した3つの自然災害にして学生ボランティアを派遣したわけだが、センターの果たした役割としては、①情報収集、②安全確認・心のケア、③資金の確保が挙げられる。

東北大学の立場からするとマンパワーとして人員を派遣するには費用対効果から考えても難しい。そのため、東日本大震災から8年間のボランティア経験を被災地に伝え、大学としてどのような支援が被災地に求められるのかノウハウ提供していくことを重視し、その中で大学間連携の重要性が認識されていった。いかに学生を巻き込みながら災害ボランティアに取り組んでもらうことができるか、今後も議論していくことが必要である。

3つの災害のうち、西日本豪雨災害に関しては長期的に継続してボランティア派遣を行ったが、課外・ボランティア活動支援センターとしてどのような／どれくらいの規模の災害であれば緊急災害支援をするのか明確な基準はない。災害時に学生からの声があれば派遣できるような体制を整えたいし、必要に応じて東北大学の経験を未災地へと伝えていきたい。

1-10. 課外活動団体合同研修会および滝澤理事への要望

今年度も課外活動団体のリーダー層を対象とした課外活動団体合同研修会を開催した。そこで出された要望と、ボランティア団体がとりまとめた要望をまとめて、滝澤博胤（教育・学生支援担当）理事との意見交換会を行った。

2018年度に課外活動団体合同研修会に参加したのは、大学祭実行委員会事務局、新歓祭実行委員会事務局、生協学生委員会（通称：おおわん）、SCRUM、学友会報道部、@homeであった。これらの団体は大学の一部業務を大学から学生に移管して行なっている向きが強い。課外活動団体を代表して、普段の活動における不都合や新たな要望などを学生の声として理事に届け、直接話し合う場を設けた。なお、学友会文化部と体育部の常任委員会にも研修会の呼びかけを行ったが、今年度は参加がなかった。

課外活動団体からの要望はすぐに実現したものもあれば、実現が難しいものなど様々であった。その中でも 2018 年度の課外活動団体合同研修会ならびに滝澤理事への要望で特筆すべきは、新歓祭実行委員会の Spring Festival と学友会生活部の時間割決め大会（共催：おおわん）の 4 月第一週土曜日の同日開催である。Spring Festival は以前、平日午後で開催されていたが、クォーター制導入のために学年暦の都合で 4 月第二週土曜日に移されていた。しかし、4 月第二週土曜日に参加する新入生が少ないことが課題となっていた。そこで課外活動団体全体の取り組みとして、より多くの新入生が様々な課外活動に触れる機会を増やそうということになり、同日開催を行うことになった。

課外・ボランティア活動支援センターとしては、同日開催に当たっての団体間の調整を支援するため、定期的に話し合いの場を設けた。

【表】課外活動団体合同研修会および滝澤理事との意見交換会の概要

日時	内容	参加団体	参加人数	備考
6/25	第 1 回 課外活動団体合同研修会	SCRUM、生協学生委員会（おおわん）、大学祭実行委員会	5 人	課外・ボランティア活動支援センターから小田中直樹、江口怜、菊池遼が参加した。
7/6	第 1 回 滝澤博胤理事との意見交換会	SCRUM、生協学生委員会（おおわん）、大学祭実行委員会	5 人	課外・ボランティア活動支援センターから小田中直樹、菊池遼が参加した。
9/26	第 2 回 課外活動団体合同研修会	SCRUM、生協学生委員会（おおわん）、大学祭実行委員会、学友会報道部、@home	10 人	課外・ボランティア活動支援センターから小田中直樹、江口怜、菊池遼が参加した。
10/4	第 2 回 滝澤博胤理事との意見交換会	SCRUM、生協学生委員会（おおわん）、大学祭実行委員会、学友会報道部、@home	5 人	課外・ボランティア活動支援センターから江口怜、菊池遼が参加した。
11/21	第 3 回 課外活動団体合同研修会	SCRUM、生協学生委員会（おおわん）、新歓祭実行委員会、@home	11 人	課外・ボランティア活動支援センターから小田中直樹、江口怜、菊池遼が参加した。

11/29	第3回 滝澤博胤理事との意見交換会	SCRUM、生協学生委員会（おおわん）、新関西実行委員会、大学祭実行委員会、@home	4人	課外・ボランティア活動支援センターから小田中直樹、菊池遼が参加した。
-------	-------------------	---	----	------------------------------------

今年度は滝澤理事との意見交換会は3回にわたって開催された。「第1回 滝澤博胤理事との意見交換会」においては、以下の【資料1】が当センターから提出された。

【資料1】

2018年7月6日
<p>理事（教育・学生支援担当） 滝澤 博胤さま</p> <p style="text-align: center;">課外・ボランティア活動に関する学生団体からの要望</p> <p style="text-align: right;">課外・ボランティア活動支援センター センター長 小田中直樹</p> <p>このたびボランティア系団体（SCRUM、その他ボランティア登録団体）および課外活動団体（大学生協学生委員会、大学祭実行委員会）との意見交換をおこない、課外・ボランティア活動に関する学生団体からの要望を聴取いたしました。ご検討いただきたく、ここに取りまとめてご高覧に供する次第です。</p> <p>参考：意見交換の対象団体と日時 2018年6月22日 SCRUM、amo、たなぼた、bridge、AsOne、HARU、ReRoots 2018年6月25日 SCRUM、大学生協学生委員会、大学祭実行委員会</p> <p><大学祭実行委員会> 1. <u>東北大学祭予算の拡大</u></p> <p>【背景】 東北大学祭は例年1200万円程度の運営費を持って運営されている。昨年度の内訳は、学友会費13%（1,560,000円）、広告収入42%（5,089,460円）、その他の収入（参加団体からの収入、来場者へのグッズ販売による収入等）45%（5,489,600円）となっている。上記のように東北大学祭は広告収入にその予算の多くを頼っていることがわかる。広告収入は学生スタッフが広告を掲載してくれる企業に一件ずつ電話掛けをおこなって得ているものである。より良い大学祭を運営するため事務局員はこの電話掛けを行うが、その結果、学生の本分となる学業に割くことのできる時間が減っているのが現状である。また、広告協賛のために東北大学祭のパンフレットのおよそ4分の1以上を割いていることも、来場者の観点、および学生が主体となって運営する大学祭という観点からすると望ましくないことである。これらの問題は予算の拡大という方策を取ることで改善されると考えられる。</p>

【要望】東北大学祭予算の拡大

2. 実験棟前（講義棟裏）芝生での提供食品規制の撤廃

【背景】

東北大学祭は、厚生会館前のエリア（以下、北・南エリア）と実験棟前エリア（以下、エントランスエリア）、Beeアリーナカフェ横エリア（以下、広場エリア）の4エリアで模擬店の出店を行っている。現状、エントランスエリアでは、調理にガスボンベを使った食品の提供などの規制がある。

その理由は施設管理に関わる問題で、①当該エリアの芝生は新しく汚損の心配がある、②アスファルトへの油染みが起こる可能性がある、の2点である。①に関し、事務局員で当該エリアの芝生と他のエリアの芝生を比較したところ、芝の状態に大差は見られなかった。そのためエントランスエリアだけに厳しい規制を設けるのは理に適っていない。②に関し、今年度、東北大学祭事務局は昨年以上の油染み対策を行うため、問題の発生を防ぐことができると考えている。以上2点より、エントランスエリアを他の3エリアと同様の扱いとし、提供食品の種類拡大と当該エリアの活性化を図りたい。

【要望】エントランスゾーンにおける芝生・アスファルト使用規制の撤廃

3. マルチメディア棟前の企画実施規制の緩和・撤廃

【背景】

東北大学祭の主な来場手段の一つとして地下鉄がある。川内駅から出てきた来場者がマルチメディア棟（以下、M棟）の前を通る際、模擬店の出店・装飾物の掲示が一切できなくなっており、閑散とした雰囲気になってしまう。その理由は、M棟を管理している教授が大学祭当日の騒音問題のために、M棟前での企画実施を認めていないことがあげられる。学生支援課にも複数回相談したが、学生支援課とM棟の管理は別となっているため、手が打てないとのことだった。大学祭当日M棟前だけ閑散としてしまうため、是非、滝澤理事から直接相談していただけると、キャンパス全体を使った東北大学祭がより良い形で達成されることが考えられる。

【要望】マルチメディア棟前の企画実施規制の撤廃・緩和

<大学生協学生委員会>

1. 活動への「偏り無きご理解」

.....生協学生委員会活動が一般の部活・サークル活動とは趣旨を異にする、生協による大学生への「福利厚生活動」を行っている団体であるという認識をお持ちいただきたい。

【背景】

現状、生協学生委員会は「おおわん」として知名度をある程度保っているが、その活動内容と実態についてはほとんど知られていない。つまり、「赤いブルゾンを着た集団が新学期や授業時間帯に何かやっている」程度の認識であり、生協の一組織であるという事実や活動が「**東北大生のより豊かな学生生活**」を目的とした福利厚生・生協公式の事業活動だと知られていない。一企画サークルや、あるいは同じ生協の組織である「新生活サポートセンター」と勘違いされてしまうことが多い。

また、団体の知名度に比べ活動内容の知名度が高くない。「新入生応援冊子『ぼてと』」や「東北大生協情報冊子『TCC』」の執筆出版・生協の総代に生協運営の一部を担ってもらった総代活動、購買食堂の割引企画・店舗活発化企画の運営、各種新学期企画（駅前案内所・WelcomeParty!!等）の運営等々、生協学生委員会の活動は多岐にわたる。それぞれ一定の参加者は得ているが、これらの活動が「生協学生委員会によって行われている」と知っている人は身の回りに決して多くない。よって、各活動の参加者数（＝利用する組合員数）は伸び悩んでいる。

このことが、活動に対するマイナスイメージやネガティブキャンペーンという形で現れ、参加促進や影響力拡大に支障を来している。具体的には東北大生協の「総代会」や「大学生活オリエンテーション」や、「時間割決め大会」などである。

生協学生委員会及び大学生協の事業資金源は組合員（≒学生）が生協加入時に預けた出資金であり、生協学生委員会の活動は生協組合員への還元である、つまり学生のための活動なのだという事実が認知されていないことに起因する問題である。

【要望】

学生に先立ち教育・学生支援担当理事の滝澤先生に、生協学生委員会の活動内容とその実態、目指していることを正しくご理解いただきたい。上記の背景にある通り、生協学生委員会の「よりよい学生生活の実現」を目指す活動は大学側としても目指すところと大きく違わないと考えている。

これは「他の部活・サークルよりも具体的にこの程度優遇してほしい」と強くお願いしたいわけではない。ただし、学生団体の活動に対する規制や援助を生協学生委員会にも同様に適用しようとするとき、生協学生委員会活動の福利厚生的側面を鑑みてご判断いただければと思う次第である。

具体例としては、例年オープンキャンパス期間に行っている「お話コーナー」企画が挙げられる。現在この企画では、勧誘活動を行っている他の部活・サークルと同じ規制（宣伝活動の距離制限、企画催行の場所制限等）の下で活動している。だが生協学生委員会が行っていることは、他団体の勧誘活動とは目的を異にしている。オープンキャンパス参加者に受験のアドバイスを行ったり大学での体験を話したりすることによって参加者の東北大学への興味をかき立て、受験や大学生活（一人暮らし、バイト、学業等）に関する不安を現役東北大生ならではの視点から解消するといった、東北大学のオープンキャンパスとその参加者の援助行為である。もしそのようなご理解の無い状態や、別に「学生団体の活動を規制する理由」が無い状態での規制であれば、活動実態を衡量した上で寛容なご判断をいただきたい。

以上の通り、他の部活・サークルとの活動の違いを理解した上で生協学生委員会活動への規制や援助規定を判断していただきたい、正しく偏りの無いご理解をいただきたいということが今回の要望の趣旨である。他の大学（例えば、山形大学や福島大学）では、オープンキャンパスの際に大学側と生協学生委員会とが協力してオープンキャンパスを作っていたり、新歓期の各種イベントを協力して盛り上げたりする事例が多く存在する。

前述の通り生協学生委員会の活動は大学側にとってもメリットとなる要素が少なからずあると考えているので、この機会にぜひ生協学生委員会活動の存在と実態を偏り無く理解していただければと思っている。

<SCRUM（課外・ボランティア活動支援センターボランティア支援学生スタッフ）>

1. 交通費の補助を出して欲しい。

【背景】

ボランティア活動、特に震災復興関連の活動に対する助成金は年々減少・減額している。そのような中で、現地でのボランティア活動とは直接関係のない交通費によって、現地のニーズに答えることができなくなるということは非常に残念である。

【要望】

- ①交通費の補助制度を設ける。
- ②東北大学の教員と交流のある団体からの助成募集情報を収集し、共有して欲しい。
- ③東北大学OB・OGに寄付を募ることのできるような紹介の仕組みを作って欲しい。

2. ボランティア活動に利用できる車両等を充実させて欲しい。

【背景】

ボランティア活動では、現地までの移動や多くの荷物の運搬のため、大きな車両を借りることが多い。そのため交通費の出費が多く、現地での活動が制限されてしまうことが多い。

【要望】

- ①大学で所有している車両（キャンパス・バス等）をボランティア活動に使用できるようにして欲しい。
- ②ハイエース等の荷物を多く運搬できる車両を公用車として設置して欲しい。
- ③課外活動・ボランティア活動に学生が利用できる車両が欲しい。
- ④レンタカーの法人カードを東北大学名義で作成する等により、低額でレンタカーを借りられる仕組みを作って欲しい。

3. ボランティア募集や活動報告等について情報発信の手段や周知の機会を提供して欲しい。

【背景】

- ・学生団体が有するツールでの情報発信の範囲には限界があり、活動の募集情報などの周知を徹底することは難しく、学生の間で共有されている情報があまりにも少ない。
- ・一方的に情報を発信するのではなく、これまでの活動報告やその意義・学びなどを伝える機会を設けることで学内の理解を得ながら活動を進めることができるのではないか。

【要望】

- ①大学が使える情報発信ツール（電光掲示板やツイッター等）を学生も使えるようにする。または、大学が用いる発信ツールと学生が用いる発信ツールの連携を強める。
- ②学生のボランティア活動による地域への貢献成果を大学全体（教職員・学生）に知ってもらえる機会を設ける。
- ③入学式等の学校行事においてガイダンスの際に、ボランティアの紹介や呼びかけを行ったり、配布資料に募集のチラシを同封したりする。

4. 震災復興や地域貢献活動を専門とする教員のこれまでの研究や資料をまとめたデータベースを作って欲しい。

【背景】

- ・ボランティア活動で地域と関係を作る時に、事前にその地域に関する情報を入手したり、詳しい研究者に助言を頂くことが出来ればより良い活動ができる。
- ・活動の中で得た発見や学びを研究等によって発展させることが出来れば、学生が自身の将来や専門を見つめる機会となる。
- ・研究者にとっても、被災地と関わりのある学生ボランティアと連携することが出来ればメリットがあるのではないかな。

【要望】

- ①電子上の登録システムとして、教員に登録を呼びかける。
- ②図書館の検索システムのように、キーワードを入力することで関連する研究データ等を閲覧できるようなデータベースの作成。

5. スプリングフェスバルや東北大学祭等のイベント時において、交流のある学外団体・NPOの参加を認めて欲しい。

【背景】

- ・ボランティア活動で得た学びを学内での発信の機会に還元するには、活動先の現地の方々に参加いただくのがもっとも効果的であるという実感があるから。
- ・東北大学生が参加する学外のボランティア団体が学内向けに広報・活動報告できる機会が限られているから。

【要望】

- ①学外団体に関する判断基準や審査機関を設け、それに適した団体や個人に参加の許可を与える。
- ②参加希望団体や個人について、交流のある学内の教員や課外・ボランティア活動支援センターがその企画参加への安全性を担保した上で参加を許可する。

6. コーディネーターとなる教員を増やして欲しい。

【背景】

- ・学生だけでは解決が難しい問題に対して、その解決に向けたアドバイスを得ることは学生の活動の幅や可能性を広げたり、自主的・主体的活動が促進されるから。
- ・東北大と活動先との距離がある団体は、現地の状況や変化を把握することが難しいから。

【要望】

- ①課外・ボランティア活動支援センターに被災地の現状に明るい人を増やして欲しい。
- ②これまで東北大学の教員が研究等の中で関わりを持った、現地に詳しく、かつ学生の活動を後押しできる人を紹介していただく。

7. 警務員や学生支援課窓口における対応を改善して欲しい。

【背景】

- ・警務員室では学生対応がおろそかになっている。
- ・学生支援課では対応する職員によって説明が一貫していないことがあり、対応に困ることがある。

8. 川内北キャンパスに夜間学生が使えるトイレの数を増やして欲しい。

【背景】

平日のミーティングや土日の活動後の振り返りなどは午後8～9時といった夜間となることが多く、教室棟や管理棟が空いていないため利用できるトイレの数が少なく不自由している。

9. 厚生会館ミーティングルームの設備を改善して欲しい。

【背景】

厚生会館のミーティングルームは主にボランティア活動団体に貸し出され、今年度に入り使用回数・団体が増加してきた。しかしながら冷暖房設備が整っておらず、夏や冬の使用が大変厳しいものとなっているため。

その他、第2回以降の滝澤博胤理事との意見交換会では他に学友会報道部や、@homeからも要望書が提出された。【資料2】は、第2回意見交換会における各団体の要望における議論の内容を記した記録メモである。

【資料2】

2018年度第2回滝澤理事との意見交換会メモ

- 日 時：2018年10月4日（木）13：30～14：30
- 場 所：教育・学生支援センター西棟3階小会議室
- 主 催：課外・ボランティア活動支援センター

<スプリングフェスティバルについて>

- 10月もしくは11月の学生生活審議会で4月1週目の土曜日に変更するように動く。
- 学部学科によってオリエンテーション等があって参加できない学生がいるのはやむを得ないという判断。現在のスプリングフェスティバルの新入生の少なさを解決したい。
- 生協学生委員会の時間割決め大会はC棟を貸し切って、スプリングフェスティバルはA・B・C棟を貸し切ってやるため、教室の数が足りなくなることが予想される。今後の検討課題として、野外にテントを用いるなどを考えていきたい。
- 新歓実行委員会は12月に発足予定。
- 同日開催が決定した場合には新歓実行委員会と生協学生委員会がWin-Winになるような形を模索していく。

(1) 大学祭実行委員会事務局

パンフレットの支援課入稿提出期限

- 調整は可能であろう。おそらくお盆明けでも可能であると思うが、確認をする。
- パンフレットの内容の確認は9月の委員会までにできていれば大丈夫である。

長期休業中の教室貸出

- 常に解放は容易ではない。おそらく、省エネ、光熱水料、防犯の理由が挙げられる。
- セメスター期間中のC棟利用は支援課が教務課に借りていることになっている。夏休みの解放については教務課が必要。

施設使用申請の簡略化

- 窓口は支援課になっている。二度手間なので係に確認して要検討
- 学術的な企画を増やしていることの周知

- 月 1 回の部局長連絡会議で滝澤理事より発言していただく。部局にはパンフレットが配られているはず。
- 大学祭実行委員会のイメージを用意してもらえると 1 枚用紙でまとめてもらえると説明しやすい。ホームカミングデーではやぶさの講演会をやったが、学びにつく人への発信、市民へ知的活動を広めるとか、そういった目的・狙いを含めてもらいたい。

(2) 生協学生委員会

新入生向け資料

- 入学案内の担当はおそらく教務課
- 現在の生協からの案内は、入学案内の手続きに『ぼてと』という冊子を入れてもらっている。
- 新入生に向けた資料は何段階かある。合格時に送る資料、合格者向け説明会、入学式で配る資料など。学友会の場合には体育館の上にサークル紹介資料が入った封筒を載せている。
- 東北大学生協の本体が動いてもらった方がいいかもしれない。しかし、東北大学は東北大学本体と生協学生委員会との距離が遠いという課題がある。

活動の相談相手

- もし、必要な場合には滝澤理事にも応じていただけるし、基本的には課外・ボランティア活動支援センターはいつでも対応する。

(3) SCRUM

ボランティアフェアへの外部団体出展

- スプリングフェスティバルの実行委員会と議論してもらう必要がある。
- 外部団体（NPO 法人、一般社団法人等）についても東北大学の学生組織という位置付けなら可能だろう。
- 東北大学のボランティア団体が外部団体と連携して活動をしていると、新入生に向けて紹介するなら可能だろう。

ボランティア広報

- 電光掲示板は支援企画係が管轄
- 入学式については新入生オリエンテーションの封筒にもう一度入れられるか調べる。そこは課外・ボランティア活動支援センターとして食い込むのがいいだろう。

東北大学基金

- ボランティアの文言も特定基金に入れていく方向で動いている。
- 基金に入れる場合は、東北大学のボランティア組織の活動を発信していかなければならない。それをお金もらった義務として社会に発信する義務を負う。
- 基金感謝の集いが今度あるので、広報課に伝えておく。

(4) 学友会報道部

電話回線の設置

- 体育部・文化部に電話があるので、回線を報道部にもつなぐ予定。電話料金は取らない。ただし、新サークル棟の改修工事が終わるまで待つほしい。
- Wi-Fi については難しい。施設の維持管理費でいっぱいいっぱい eduroam 導入も厳しい。サークル全体で安く加入できる民間のものを活用なら考えられるかもしれない。

大学主催のイベントでの「東北大学新聞」の活用

- ホームカミングデーで学友会の広報をしてもらうのは嬉しい。
- 全国4ヶ所で大学説明会を開催しており、計1,400～1,500人がやってくる。そこは入試課が担当なので、滝澤理事にご相談していただく。その場合には部数は足りるのかを確認してほしい。

広報紙「学友会」の報酬

- 総務部の小田中先生に相談してほしい。

(5) @home

東北大学の公式ホームページに国際交流団体の掲載

- 国際交流は種類があり、留学生向けのイベント開催、特定の日本人学生と留学生の関係性を作るなどある。様々な活動をしている国際交流団体を掲載してほしい。国際交流の具体例を広めたい。
- 現在、@homeは学友会には入っていないため公式ホームページに名前がない。
- 東北大学として国際交流のページがあればいいが、現状だと学生の国際交流団体は掲載されていない。
- 国際交流課が「国際交流」のページの担当かもしれないので、滝澤先生よりご相談いただく。

1-11. 東北大学学友会の支援・連携

ここでは主に、学生支援課活動支援係が行った、東北大学学友会への支援、学友会との連携活動について報告する。

1-11-1. 学生団体の登録ならびに説明会の開催

今年度の学友会団体は、全189団体、約10,000名の総数の学生から、学生団体登録継続届・登録申請書を受け付け、これらの団体の自主的な活動支援を行った。また、10月22日には、全ての届け出のなされた団体の代表者に対する説明会を開催し、当日、176団体の代表者ならびに顧問教員が参加し、課外活動時における様々な注意喚起を行った。

1-11-2. 新入生歓迎会および大学祭の支援

平成30年度の新入生歓迎行事ならびに大学祭においては、それぞれ学生の自主的な実行委員会が組織され運営は全て学生に任されているが、それら運営を指導・サポートする教職員による体制を構築し支援を行ってきた。

【表】新入生歓迎会行事

日時	行 事 名	場 所	主 催
4/14	Spring Festival	川内北キャンパス	新入生歓迎会実行委員会
4/15	新入生歓迎合同演奏会	百周年記念会館 川内萩ホール	新入生歓迎会実行委員会
4/22	春のスポーツ大会	川内北キャンパス	学友会体育部

また、大学祭は11月2日から11月4日の3日間にわたり、川内北キャンパスを主会場として開催され、約33,000名の来場者（大学祭実行委員会報告）で賑わった。今年のテーマ「笑う祭（フェス）には福来たる」のもと、日頃の活動成果がパフォーマンスとして、教室や野外ステージ等に作品展示や野外ステージ等が繰り広げられた。



【写真】 大学祭の様子（左）、大学祭 サイエンスワークショップの様子（右）



【写真】 大学祭 企画「ペットボトルロケットを飛ばそう」の様子（左）、大学祭 混声合唱部（右）

2. 学生スタッフチーム SCRUM の活動報告

課外・ボランティア活動支援センターでは、教職員主体の事業に加えて、教職員・学生の共同企画事業や、学生の主体となった事業・活動が展開されている。とりわけ学生スタッフチーム SCRUM では、直轄部、参加団体、それらを統合する本体組織がそれぞれ基盤となり、多彩な活動が行われてきた。以下では、本年度における SCRUM 本体組織の運営と、本体組織における主な活動について報告する。

2-1. 2018 年度学生スタッフチーム SCRUM の概要

課外・ボランティア活動支援センターの活動は、教員と学生スタッフチームが一体となって企画・実施している。学生スタッフチームは、2015 年度よりスクラム (SCRUM) という愛称が定まり、メンバーのアイデンティティを形成してきた。さらに 2016 年度からはメンバーの安定的な増加や上級生のコミットにより、幅広い活動を行ってきた。現地でのボランティア活動は 2017 年度から引き続き、岩手・宮城・福島のそれぞれで SCRUM の参加団体 (詳細は後述) が担当して継続した。

震災から 7 年目を迎え、一概に「被災地支援」と言えなくなった支援活動。ポスト震災期にあたり、SCRUM 及び各参加団体の現地での活動も、活動の在り方について考え直す時期になった。テーマ型の活動主体である直轄部も「地方活性化」や「防災」といった、より一般的なトピックを取り上げたグループが増加し、東日本大震災の復興の過程から見える様々な側面を切り取った。

また今年度は、SCRUM 内部の組織的課題がより鮮明になった。それは、参加団体や直轄部をはじめとする各活動主体の独立性の高まりと SCRUM の位置付けの兼ね合いの難しさである。ボランティアコーディネートの充実を図るため、各県・地域での支援活動を継続して来たが、それらの活動が活性化し、幅も広がったことにより、活動の軸が現地での活動に移るメンバーが増加し、学内で主に行われる SCRUM 本体との関連性が薄くなって来たのである。現地での活動は住民の方々や被災地の現状を五感で感じることができ、得るものが多い活動ではある。しかしながら、被災三県につながりを持つことで「東北」支援を考えることができ、学内のボランティアの充実を図る SCRUM 本体の活動を疎かにすることは非常に残念である。早期の解決は難しいことではあるが、皆が同じ問題意識を持ち、その都度の議論を大切にしながら、徐々に各主体の連携を変えていくことが来年度以降も必要になるだろう。

以下、2018 年度における SCRUM の特筆した変化や活動を紹介していく。

2-1-1. 変化① Gakuvo との協定事業の始動

2017 年度に機構が協定を結んだ Gakuvo (日本財団学生ボランティアセンター) との事業「東日本大震災の経験を世界と未来につなぐプロジェクト」が始動した。事業を担当するのは、各直轄部であるので詳細はそちらを参考にされたい。

全体として、各直轄部の活動は充実した。担当の宮腰氏の企画内容に対する的確な指摘やアドバイスにより、学生のみで実施するものより完成度の高いものを提供できた。

しかし一方で、当初の企画予定へのコミット具合に難しい点があった。追われ気味な進行になってしまった点があった。2019 年度の事業予定は学生から開催時期を提案する形となり改善されたが、今後も全体を見ながら、学生と Gakuvo との双方にとって得るものが多いプロジェクトのあり方を探ることを忘れないようにしたい。

2-1-2. 変化② 新たな直轄部の設置

冒頭でも触れたが今年度は直轄部が新たに2つ増えた。どちらも東日本大震災の被災地を支援する中で学び・得たものを元に、自らが必要性を感じて活動を開始した。(詳細は後述)

2017年度から設置された直轄部。それぞれテーマを設定し、各トピックに特化した活動を行うことで、SCRUMとしての蓄積も増え、活躍の場も広がった。

しかし、そのような活動に必要性を感じ取り組むメンバーは重複することが多い。様々な形で被災地と関わりを持つことで見えてくる課題・ニーズも多くなるからなのだろうが、そのようなメンバーに負担が集中するのもまた事実である。ボラフェアや各種企画でメンバー増加を図るのも一つの解決策となるが、解散という道もある。SCRUMではこれまでにその例がないことから、解散という選択肢やその手続きが明確でない。直轄部のメンバーの意見を尊重しながら、解散に対して寛容な制度・雰囲気を作ることもSCRUMの持続性を考える上では重要である。

2-1-3. 変化③ 緊急災害への対応

2018年度は地震や台風、豪雨など大きな災害が多い年であった。センター・SCRUMとしては6月の大阪北部地震・7月の西日本豪雨災害(平成30年7月豪雨)・9月の北海道胆振東部地震に関して派遣活動を実施した。(詳細は後述。)

どの災害派遣も現地の大学と連携を図り、東北での活動のノウハウをもとにハード系支援と並行して、できる場所を探りながら住民に寄り添うソフト系支援を行った。土砂かきや片付けのボランティアで落ち着かない雰囲気の避難所等にも、「話したい」「聞いてほしい」という住民の方々の思いは隠れていた。

2016年度から継続してきた熊本地震への支援事業に加え、新たな蓄積を獲得できた今年度。これまでに行った様々な緊急災害支援を記録し、参考にすることで、それぞれの被災地への思いを忘れず、さらに今後の充実した活動につなげて行きたい。

2-1-4. 変化④ 部室分配の実施

川内北キャンパスの新サークル棟の改修工事によるサークルへの部室の再分配が今年度実施された。対象団体は学友会に加盟している団体であったが、SCRUMは各参加団体等と共に団体登録を行い、準加盟団体として承認されたために対象となった。(当初、SCRUMはボランティア支援室を部室として有する団体としてグループ分けされたため新たな部室分配の対象からは外された。しかしながら、ボランティア支援室はSCRUMの部室ではないことを作業部会に伝え、配分の権限を得た。)

7月上旬に部室分配に関する説明会があり、そこで部室分配の希望や要望を記入するアンケートが配布された。井戸端会議に参加するボランティア団体は9団体が希望した。説明会から二週間後、7月中旬の井戸端会議にて、ボランティア団体間で情報交換や交流を図るために同じフロアを共有したいという旨をどの団体もアンケートに記入することとした。

アンケートの結果を受けて8月頃に仮の配分案が決定。仮配分案を受け、SCRUM及び各参加団体が隣接するよう他団体と調整し、部屋の交換を実施した。また仮配分案の案内後、今後の継続的な物品管理のためにボランティア団体がつどうフロアの倉庫の配分をSCRUM名義で要望した。

これらの仮配分案後の微調整やボランティア団体合同での倉庫の要望は10月下旬に行われた「学生団体に対する説明会」にて承認され、部室の配分が決定した。

工事の進捗が遅れ、新部室の使用が可能となるのは3月からということである。19年度の新歓は新部室を使いつつ行うことになるだろうが、すでに述べたような参加団体の独立性やSCRUMの位置付けを考慮しつつ、ボランティア支援室とのうまい使い分けができるよう折り合いをつけて行きたい。

2-2. 総務

総務は、新歓イベントの企画、事務局会議や全体会議、集中会議の運営などを行なっている。

2-2-1. 新歓イベントについて

本年度の新歓イベントも、昨年に引き続き幹部学年を中心にプロジェクトチームを作り企画した。運営兼参加の「ボランティア・フェア」に加え、スクラムの独自の新歓イベントとしては、「スタッフ説明会」と「晩餐会」の2つを、それぞれに担当を立てて実施した。これらのイベントの費用は、スクラムメンバーからの集金によって賄い、「会計」担当が管理を行った。また、これらのイベントを周知させるために「広報」の担当を設け、チラシやSNSなどを用いて広報活動を行った。今年度は特にSNSでの広報に力を入れ、新たにLINE@を取り入れるなどの工夫を凝らした。成果としては、20名程度の新生を獲得することができた。

2-2-2. 火曜会議について

本年度も火曜日を「スクラムの日」として放課後にミーティングなどを実施し、「全体会議」では全体決定を行いつつも主には共有・親交の場とし、込み入った議論は「事務局会議」で行うこととした。今年度後期からは、「全体会議」において活発に意見交換をし、メンバー同士の親睦を深めるという目的で、グループに分かれて議論を行うという形にした。また、センター主催の課外・ボランティア活動に関わる研修会として「研修会議」も行った。本年度実施テーマは「震災の経験を伝えるということ いのちを守るための震災伝承の意義」、「課外活動におけるセクハラ防止のために」、「仙台市災害ボランティアセンター 運営サポーター養成講座」、「学生団体の組織運営」、「自分と仲間の『こころ』を大切にする方法」の5つであり、これらの企画は教員によって行われた。なお、このうち「震災の経験を伝えるということ いのちを守るための震災伝承の意義」はGakuvoとの、「仙台市災害ボランティアセンター 運営サポーター養成講座」は仙台市災害ボランティアセンターとの共催であった。全体としては、月に1回「全体会議」、月に2回「事務局会議」、不定期に「研修会議」を行った。これらの日程は「事務局会議」により決定された。

2-2-3. 集中会議について

本年度も、春・夏の長期休みにおいて「集中会議」を実施した。「集中会議」の内容は「全体会議」や「事務局会議」によって議論し、主にプロジェクトチームとして募ったメンバーのみの「集中会議ミーティング」にて企画をした。「春の集中会議」(3月)では、参加団体や直轄部、各担当からの報告や会計報告に加え、活動理念や体制を確認し、今後につながる内容となった。また、2018年3月にご退職された藤室先生の講演会に加え、ほかのボランティア団体との交流会も新たな試みとして実施し、東北大学のボランティア活動の歩みについて振り返るとともに、他団体との親交を深める良い機会となった。「秋の集中会議」(10月)では、各報告に加えて、「SCRUMの理念」「災害救援」「直轄部」という3つのテーマについて、各30分グループに分かれて議論するというワークショップ

プをおこなった。このワークショップでは各テーマに担当者をつけ、担当者は出た意見を取りまとめ、集中会議後の全体ミーティングにて再び議題に挙げるという試みを行った。また2日目には、被災地 NGO 協働センターのスタッフをされている頼政良太さんの講演会も行い、午後には広瀬川の河川敷で芋煮会を行った。

2-2-4. 卒業生との関係（友の会）について

2017年3月より、「”SCRUM”友の会」と名付けられた LINE グループによって卒業生同士・現役生との連絡や情報共有がなされるようになった。本年度は、納涼会、大学祭、芋煮、忘年会や卒業生の追いコンなどが呼びかけられた。「”SCRUM”友の会」には、主にこれまでスクラムに関わりがあり、現在はスクラムを離れている人が多く参加している。

2-2-5. その他総務の活動について

セメスター終わりの8月と2月に倉庫・ボラ室の掃除・整理を行った。8月の整理の際には、倉庫とボラ室にある各備品について、それぞれ収納場所と個数を明記した「倉庫物品リスト」を作成した。また、SCRUM名義のグーグルアカウントを用いて使用していたグーグルドライブについて、個人のアカウントで共有して使用することとし、それに伴ってドライブ内の整理と管理方法の制定を行った。来年度からはこの管理方法に準じて管理していくこととなる。さらに今年度からは、月一回ボラ室の掃除を各参加団体が交代で行うという仕組みを作り、その指示を総務が行った。

【表】 主な会議・イベント一覧

イベント名	開催日	内容
春の集中会議	2018.3/26-27	参加団体・直轄部の活動報告、会計報告、担当制の振り返り、活動理念と体制の確認、新歓の最終確認、藤室先生の講演、ボランティア団体との交流会
スタッフ説明会 晩餐会	4/13, 4/19, 4/25	大学と SCRUM の関係紹介、SCRUM と参加団体・直轄部の活動紹介等・新入生との交流
新歓合宿	5/12-13	花山サンゼットさんの講演（栗原市）、WS（新入生の目標設定）、上回生のロールモデル発表、レク等
秋の集中会議	10/13-14	参加団体・直轄部の活動報告、「SCRUM の理念」「災害救援」「直轄部」についてワークショップ、頼政良太さん講演会、芋煮

【表】 SCRUM の運営会議一覧（2018年12月まで）

会議名	開催日
全体会議	4/3, 4/17, 4/24, 5/8, 5/29, 6/12, 6/19, 6/26, 7/10, 7/31, 10/2, 10/16, 10/30, 11/13, 11/20, 11/27
事務局会議	4/10, 5/1, 5/22, 6/5, 6/26, 7/17, 9/25, 10/9, 11/6, 12/11

(研修会)	5/15, 7/3, 10/23, 12/4, 12/14
-------	-------------------------------



【写真】秋の集中会議2日目の集合写真 10/14 (左)、新歓合宿での集合写真 5/13 (右)

2-3. 渉外

渉外は、前年度に引き続き、主にボランティアフェア（以前のスタートアップフェア）、井戸端会議の企画・運営に携わってきた。

2-3-1 ボランティアフェア

ボランティアフェアとは、東北大学内外のボランティア団体や NPO 法人などがブース形式で出展をし、新メンバー・ボランティアの募集や団体の活動紹介などを行う企画であり、各団体における新メンバーの発掘や活動の広報、団体間の交流促進の場となっている。

昨年度はセンターの体制の変化に伴い、東日本大震災関連以外のボランティア団体も出展が始まったが、今年度は昨年度より多くの様々な団体に出展いただいた。特に今年度の特徴としては、国際交流系の団体の出展が増加したことが挙げられる。それにより、ボランティアフェア来場者はより多くの選択肢の中から自身の興味関心に合ったボランティアを見つけることができたことと思う。今年度 3 シーズン 12 日間実施したボランティアフェアの参加者延べ人数は、344 名と昨年度（282 名）を大きく上回る結果となった。詳細については【表】にまとめた。今年度は4月の来場者数がとても多く、また、例年よりも国際交流系の活動に興味を示す来場者が多くいたのも特徴である。来年度以降も、ボランティアに興味がある学生・ボランティアをしたい学生と学内外のボランティア団体とが繋がることの出来る貴重な場所として、重要な役割を果たしていくと考えられる。

【表】4月ボランティアフェアの概要

日程	時間	会場	人数	参加団体
4/9 (月)	13:00-17:00	図書館多目的室	84	bridge、HARU、AsOne、 こども☆ひかりプロジェクト、 SCRUM、balloons+、 ReRoots、たなぼた、ワカ ツク、STORIA、復興応援 団、キッズドア、
4/11 (水)	16:00-18:30	図書館多目的室	29	
4/12 (木)	16:00-18:30	図書館多目的室	31	
4/14 (土)	11:00-15:30	図書館多目的室	21	

4/18 (水)	16:00-18:30	図書館多目的室	36	チャンス・フォー・チルドレン、TEDIC、青年赤十字奉仕団、amo、アスイク
4/20 (金)	16:00-18:30	図書館多目的室	34	
4/24 (火)	16:00-18:30	図書館多目的室	61	

(296)

※14日：スプリングフェスティバルと同日開催

【表】7月ボランティアフェアの概要

日程	時間	会場	人数	参加団体
7/4 (水)	16:00-18:30	厚生会館多目的室	12	NICE、復興応援団、アスイク、たなぼた、青年赤十字奉仕団、ワカツク、
7/5 (木)	16:00-18:30	厚生会館目的室	12	bridge、仙台自主夜間中学、SCRUM、光の教室、グッド!、CFF 東北

(24)

【表】11月ボランティアフェアの概要

日程	時間	会場	人数	参加団体
11/20 (火)	16:00-18:30	厚生会館多目的室	5	仙台自主夜間中学、SCRUM、ワカツク、アスイク、復興応援団、たなぼた、亙理いちごっこ、CFF 東北、キッズドア、
11/21 (水)	16:00-18:30	厚生会館目的室	9	bridge、もしとさ、TSALL 東北、HARU、
11/22 (木)	16:00～18:30	厚生会館多目的室	10	

(24)

2-3-2 井戸端会議

井戸端会議は、東北大学内外のボランティア団体などが集まって行う会議のことで、各団体の近況共有やスタートアップフェアの日程、開催概要、その他イベントの調整を行っている。2013年9月よりスタートし、今までに計42回開催された。会議には毎回5～10ほどの団体が参加し、合同の企画の検討や団体間の垣根を超えた数少ない情報共有の場として機能している。

昨年度から始まった井戸端会議参加団体での団体間交流イベントを今年も引き続き行い、ボランティア団体同士の親交が深まり、東北大学のボランティア団体としての連帯感を共有することができた。2018年3月～2019年2月までの概要を以下の【表】にまとめた。

【表】2018年度井戸端会議の概要

回数	日程	主な議題	参加団体
34	3/27	4月ボランティアフェアについて	HARU、AsOne、たなぼた、復興応援団、SCRUM、bridge
35	5/17	4月ボランティアフェアの振り返り 7月ボランティアフェアについて いっぽこ合宿について	ReRoots、たなぼた、AsOne、amo、HARU、ワカツク、キッズドア、復興応援団、SCRUM
36	6/22	7月ボランティアフェアについて 課外活動団体合同研修会について オープンキャンパスについて いっぽこ合宿について	たなぼた、復興応援団、ReRoots、HARU、キッズドア、ワカツク、amo、SCRUM、bridge、AsOne、CFF 東北
37	7/20	7月ボランティアフェアの振り返り 11月ボランティアフェアについて オープンキャンパス・学祭について	復興応援団、ワカツク、ReRoots、amo、bridge、キッズドア、宮城県青年赤十字奉仕団、SCRUM
38	10/5	11月ボランティアフェアについて いっぽこ合宿発案の合同企画について 学祭パネル出展について	復興応援団、CFF 東北、ReRoots、AsOne、amo、TSALL 東北、キッズドア、HARU、bridge、SCRUM
39	11/9	11月ボランティアフェアについて センター紀要・ジャーナルについて	たなぼた、ReRoots、ワカツク、TSALL 東北、復興応援団、bridge、AsOne、仙台自主夜間中学、HARU、亙理いちごっこ、SCRUM
40	12/7	11月ボランティアフェアの振り返り 4月ボランティアフェアについて 3月ボランティア団体交流会について いっぽこ合宿について	たなぼた、ワカツク、SCRUM、TSALL 東北、bridge、海辺のたからもの、亙理いちごっこ
41	1/11	4月ボランティアフェアについて 3月ボランティア団体交流会について	
42	2/8	4月ボランティアフェアについて 3月ボランティア団体交流会について いっぽこ合宿について	

2-4. 広報

広報は、前年度に引きつづき、ボランティアセミナージャーナルの発行や三角柱の設置を行ってきた。SCRUM のホームページの更新やボランティア情報メール配信サービスでの情報提供は、課外・ボランティア活動支援センターの学生アルバイトが主に担当した。その他、Facebook や Twitter は、各イベントや活動の担当者を中心に更新した。

2-4-1. ボランティアセミナージャーナルの発行

センターでは、2014年度より、年1~4回ほど「ボランティアセミナージャーナル」を発行してきた。ジャーナルとは、東日本大震災学生ボランティア支援室として、2012年度より発行してきたものであり、2014年度以降はセンター名義で発行を続けている。内容としては、支援室のイベントの報告や、ボランティア団体の紹介などを行ってきた。2018年度は、4月に13号を発行した。

13号では、より多くの新生に興味を持ってもらうため、現在実際にボランティア活動をしている学生へのインタビューや座談会の様子を写真やイラストを用いながら載せたりした。また、12号と同様に、「新生特別セミナー 東北大学におけるキャンパスライフについて」の会場で配布した。

2-4-2. 三角柱の発行

2018年は13本の三角柱を設置した。三角柱とは、ボランティアツアーの情報やイベントのお知らせなどを掲載した広報物であり、川内キャンパスと星稜キャンパスの食堂に2週間設置させていただくものである。実際に、ボランティアフェアや、ボランティアツアーなどに来た人の中にも、少なからず三角柱を情報源としている人達がいるため、大変意味のある広報活動であると考えられる。

新歓時期や、ボランティアフェアの際は、三角柱の作成に加え、宣伝用チラシも作成した。

【表】三角柱一覧

掲載時期	掲載内容（ツアー名、掲載団体など）
4月①	たなぼた石巻/仙台ボランティアツアー、山元町の未来を作る植樹祭、千賀ノ浦探検、被災地若林区を巡るツアー、フェアトレードって何？-映画で世界を知ろう-、はてなGV報告会
4月②	震災スタディ&ボランティアツアーin石巻、3団体集結！石巻ボランティアツアー、春の陸前高田新歓ボランティアツアー、川内かえるマラソン沿道ボランティアツアーin福島、福島県富岡町スタディツアー、福島県いわき市薄磯地区ボランティアツアー ※各団体の新歓ツアーをまとめたチラシを併せて作成した。
4月③	東北学生合同新歓2018、新歓講演会、石巻市のぞみ野ボランティア体験
5月①	陸前高田ボランティアツアー、福島・富岡花植えボランティアツアー、いわき市ボランティアツアー、ボランティア&国際交流ツアーin荒浜、震災語り部ツアーin南三陸
5月②	多様な性・LGBTとNPO：「俺、彼氏いるんだ」、いぐする仙台「編集会議」公開！、NPO法人グッド！海外ボランティアワークキャンプ
6月①	陸前高田ボランティアツアー、いわき市ボランティアツアー、基礎ゼミ企画ボランティアツアー、震災スタディ&ボランティアツアーin石巻、多様な性・LGBTとNPO：「俺、彼氏いるんだ」、NPO法人グッド！海外ボランティアワークキャンプ
6月②	夏ボラ in 陸前高田～うごく七夕の巻!～、復興応援団個別説明会、復興創生インターン説明会、非営利組織としての学校法人運営～商学学園が取り組むグローバル教養人の育成～、2018年度国際NPOリーダーシップ講演会

7月①	ボランティアフェア宣伝用三角柱 一般社団法人ワカツク、NPO 法人アスイク、NPO 法人グッド!、仙台自主夜間中学、復興応援団、高校生支援団体 bridge、宮城県青年赤十字奉仕団、たなぼた、光の教室、NPO 法人 NICE、NPO 法人 CFF ジャパン、東北大学 SCRUM
7月②	学校防災スタディーツアー、第2回やまもとスポーツ祭り、この夏、飛び込め!復興・創生インターン説明会、夏ボラ in 陸前高田～納涼の巻!～、石巻 あゆみ野夏祭り、仙台 若林区大和町夏祭り、3.11～いまを辿る福島スタディーツアー、子どもの貧困問題解決に向けた取り組みに学ぶボランティア体験プログラム
10月①	収穫祭 in 石巻、山元町ハロウィンイベント、「人」とふれあうふくしま秋祭りツアー、トークライブいぐるするテラス「働くことが難しい人も輝く理想の村づくり」、NPO 法人グッド!海外ボランティア
11月①	ボランティアフェア宣伝用三角柱 もしとさ、NPO 法人アスイク、仙台自主夜間中学、NPO 法人 CFF ジャパン、高校生支援団体 bridge、キッズドア、たなぼた、HARU、TSALL 東北、復興応援団、亙理いちごっこ、一般社団法人ワカツク、東北大学 SCRUM
11月②	仙台ミラソン 2018「第2回セミナー」、石巻 お茶会&おかし作り、たなぼた芋煮会のお手伝い、陸前高田ボランティアツアー、SENDAI 光のページェントボランティア募集、永崎・下神白団地クリスマス会、認定 NPO 法人 CFF 海外ボランティア説明会 in 仙台、自分発見の巣-やぶれ、-、きみの殻。-
12月	陸前高田冬こそぼかぼかツアー、陸前高田クリスマスボランティアツアー、陸前高田虎舞祭りツアー、南三陸探検、仙台若者アワード 2018「最終審査プレゼンテーション&表彰式」、「この春、変える。」、SENDAI 光のページェントボランティア募集、永崎団地・下神白団地クリスマス会、地域づくり体感ツアー in 石巻「波板」
1月	福島県川内村ボランティアツアー、石巻ボランティアツアー、学生記者 募集説明会～地元企業と若者をつなぐ WEB マガジン「いぐるする仙台」、反貧困みやぎネットワーク ボランティア説明会、福島県浜通りをみつめるボランティアツアー

イベントのご案内

夏ボラ in 陸前高田 ～うごく七夏の巻!～
8/6(月)～10(金)
今年もほかほか夏ツアーの時期がやってきました!メインイベント陸前高田市の伝統行事「うごく七夏」への参加に加え、子供企画やお祭りのお手伝いなど盛りだくさんの内容です。5日間一掃にほかほかしよう!
8:00厚生会館前集合(途中参加可)
申し込みは下のQRコードから!
【参加費】1000円
【定員】16名(締切)7/31(火)
【主催】東北大学ほかほか
【共催】課外・ボランティア活動支援センター

復興・創生インターン説明会
6/27(水),7/4(水)
夏休み中の約4週間、宮城・岩手・福島の被災地域の地元企業で、復興支援を経験してみませんか?説明会では、復興庁主催「復興・創生インターン」について、どんなプロジェクトがあるのか、参加して得られること、参加方法などを説明します。
ワカツク(仙台市青葉区北目町4-7HSビル3F)にて19時開始。申し込みは下のURLから
<http://www.internship.wakatsuku.jp/internship/seminar>
【定員】各回5名(締切)各回当日の正午まで
【主催】一般社団法人ワカツク

2018年度国際NPOリーダーシップ講演会 7/3(火)
国際NGOや国際開発など様々なフィールドで活躍され、現在ロシア在住の当ゼミOBである小林一茂氏が講師。国際市民社会における「非政府組織の政治活動」について講演いただきます!国際社会やNGO・NPO等にご関心がある方はぜひご参加ください!
東北大学川内南キャンパス文系総合講義棟2階・経済学部第2講義室にて
15:00～17:00(開場 14:40)
申し込みは西出研究室
(nposeminar2016@gmail.com)宛に件名「7/3 セミナー申し込み」、本文にお名前・ご所属(任意)をご記入の上、送信
【定員】100名
【主催】東北大学経済学部経営学科学非営利組織論演習ゼミ(西出ゼミ)
【後援】東北大学大学院経済学研究科地域イノベーション研究センター

個別説明会
7/7(土)13:00-15:00
7/9(月)18:00-20:00
7/15(日)15:00-17:00
8/4(土)13:00-15:00
復興応援団の個別説明会を実施します。「普段どんな活動しているんだろう?」「入ったサークルが合わなかった...」「何かボランティアはしてみようかな...」「アツい大人のもとで頑張りたい!」どんな方でも大歓迎!!説明自体は15分程度です。ぜひ好きな日のご都合の良い時間にお越しください!参加される方は dangakusei@gmail.com までご連絡ください。
【主催】復興応援団

非営利組織としての学校法人経営～商学学園が取り組むグローバル教育人の育成～ 7/2(月)
非営利組織、教育機関の経営と教育、人材育成の視点と教育者としての経験。経営学、教育学、経営学の知見をもつてグローバルで活躍できる教育人を育成するための講演を行います。
東北大学南キャンパス経済学部4階大会議室にて、申し込み不要
【定員】50名
【主催】東北大学経済学部 非営利組織論ゼミナール

グッド!海外・国内ボランティアワークキャンプ 8月、9月
2018年夏。また、見聞世界に飛び出してみませんか?詳しくはHPを参照してください。
<http://www.good.or.jp/>
【主催】NPO法人グッド!

お問い合わせ先
課外・ボランティア活動支援センター
022-795-4948
vol@tohoku.univ@gmail.com

【図】 6月②の三角柱

2-5. 会計

本年度も、SCRUM の会計担当及び 3 つの参加団体で会計担当者を置き、助成金の申請、通帳管理等を適宜行った。特筆すべき点として、2 点に触れておきたい。

2-5-1. 助成金の申請・取得

昨年度に引き続き、活動維持のための財政難により、SCRUM の参加団体であるぽかぽか、インクストーンズ、福興 youth でも、独自に助成金取得に向けた申請を行うようになった。その結果、これまで取得していたものも含めて、下記の助成金を取得・活用することができた。助成していた団体には深く御礼申し上げたい。また、今年度は参加団体として活動していた学生が有志で SCRUM の直轄部として「もとさ」「地域創成部」が創立された。もとさの活動費のための助成金獲得についても以下にまとめた。

【表】 2018 年度 獲得助成金の一覧

助成元	申請主体	期間	金額
麒麟福祉財団「麒麟・地域のちから応援事業」	ぽかぽか	2018/4～2019/3	30 万円
大和証券福祉財団「ボランティア活動助成」	ぽかぽか	2019/1～2019/12	30 万円
学生サポートセンター「学生ボランティア団体助成事業」	ぽかぽか	2019/1～2019/3	10 万円
麒麟福祉財団「麒麟・地域のちから応援事業」	インクストーンズ	2018/4～2019/3	30 万円
麒麟福祉財団「麒麟・地域のちから応援事業」	福興 youth	2018/4～2019/3	30 万円
世界宗教者平和会議日本委員会「フクシマ コミュニティづくり支援プロジェクト」	福興 youth	2017/9～2018/9	20 万円
世界宗教者平和会議日本委員会「フクシマ コミュニティづくり支援プロジェクト」	福興 youth	2018/12～ 2019/12	20 万円
大和証券福祉財団「ボランティア活動助成」	福興 youth	2019/1～2019/12	30 万円
全労災「2018 年全労済地域貢献助成事業」	もとさ	2019/1～2019/12	30 万円
ユニバーサル財団特定活動助成「自然災害支援プログラム」	SCRUM	2017/11～ 2018/10	40 万円
赤い羽根共同募金「平成 30 年 7 月豪雨災害 ボランティア・NPO 活動サポート募金助成事業」	SCRUM	2018/7～2018/9	50 万円
Yahoo!基金「夏休み《学生ボランティア》被災地復興支援活動助成」	SCRUM	2018/7～2018/9	20 万円
日本財団「平成 30 年 7 月豪雨災害に関わる活動支援」	SCRUM	2018/9～2019/3	100 万円

2-5-2. Yahoo!基金 被災地助成

昨年度に引き続き、Yahoo!事務局から一事業当り最大 50 万円の助成を受けることができ、下記の 19 の事業がこれまで助成を受けた。また、2018 年 9 月 6 日に起きた北海道胆振東部地震の活動資金

としても使用させていただき、学生の派遣を行うことができた。Yahoo!基金事務局の皆さま、及び本プログラムに寄付を寄せて下さった皆さまに厚くお礼申し上げたい。本プログラムで助成を受けた活動については、各団体のブログ等で活動報告を行っている。

【表】 Yahoo!基金 被災地復興支援活動「学生ボランティア」プログラム助成事業

団体名	事業名	実施期間	助成額
ぽかぽか	陸前高田市の災害公営住宅・仮設住宅でのサロン活動とみちくさハウス支援	2018/4/21～22	75,037 円
ぽかぽか	陸前高田市の災害公営住宅・仮設住宅でのサロン活動とみちくさハウス支援	2018/5/5～6	146,819 円
ぽかぽか	陸前高田市の災害公営住宅・仮設住宅でのサロン活動とみちくさハウス支援	2018/6/15～16、6/23～24	142,581 円
ぽかぽか	陸前高田市の災害公営住宅・仮設住宅でのサロン活動、地域の恒例行事のお手伝いおよび子供支援活動	2018/8/6～10	244,741 円
ぽかぽか	陸前高田市の災害公営住宅・仮設住宅でのサロン活動とみちくさハウス支援	2018/11/17～18	75,733 円
ぽかぽか	陸前高田市の災害公営住宅・仮設住宅でのサロン活動、和野地区における子供支援活動と地域のお祭り補助、「みちくさハウス」による子ども支援活動	2018/12/8～9、12/22～24 2019/1/12～13	248,892 円
ぽかぽか	陸前高田市の災害公営住宅・仮設住宅でのサロン活動、子供支援活動および地域の行事のお手伝い	2019/2/9～10、2/15～16、 3/16～17	258,130 円 (申請額)
インクス トーンズ	郷土料理伝承を通じた交流と仮設住宅内環境整備活動	2018/6/16	89,222 円
福興 youth	被災地域の「こころ」を想う福島ボランティアツアー	2018/4/15、5/3～4	163,100 円
福興 youth	福島県双葉郡富岡町小浜地区花植えボランティアツアー	2018/6/3	23,832 円
福興 youth	福島県スタディツアー	2018/9/19～21	329,200 円
福興 youth	福島県ボランティアツアー	2018/10/27～28、11/10～ 11/11	145,297 円
福興 youth	公営住宅居住者の架け橋となるクリスマスボランティアツアー	2018/12/9	139,196 円
福興 youth	福島の人とふれあう、学生ボランティア&スタディツアー	2019/2/8～10、3/14～15	409,250 円 (申請額)

国際部	福島県震災スタディツアー	2018/11/18	116,450 円
東北大学 スクラム	被災地南三陸町における留学生との震災学習及び住民交流活動	2019/2/6～2/7	155,637 円 (申請額)
東北大学 スクラム	北海道胆振東部地震被災地支援プロジェクト	2019/9/24～9/26	165,980 円
東北大学 スクラム	平成 28 年熊本地震被災地域の仮設住宅コミュニティ形成 支援及び現地大学生への活動ノウハウ提供を目的とした 東北大学生ボランティア派遣プロジェクト	2019/9/10～9/14	500,000 円
東北大学 スクラム	平成 28 年熊本地震被災地域の仮設住宅コミュニティ形成支援及び現地大学生への活動ノウハウ提供を目的とした 東北大学生ボランティア派遣プロジェクト	2019/2/23～2/27	500,000 円
計			3,929,097 円

2-6. 企画担当

企画は、SCRUM への高校や他大学からの震災学習のコーディネートや意見交換会の依頼の窓口を学生が担い教員の負担を減らすこと、例年行っている東北大学祭やオープンキャンパスへの出展のノウハウの引き継ぎの 2 点を掲げ、2017 年 12 月頃に設立された担当である。

2-6-1. 高校生や他大学の受け入れについて

まず、高校や他大学との交流の報告を行う。「2017 年度課外・ボランティア活動支援センター紀要」掲載分以降の活動を下の表に示す。

【表】高校生や他大学の受け入れについての概要

日時	活動場所	活動内容	参加人数	相手参加人数	解説・背景
3/28-29	静岡市立高校との交流	石巻市の大森第 3 仮設でのご飯会、足湯ボランティア、防災や震災伝承について考える WS	6 名	13 名	高校生 13 名参加。静岡市立高校の「次世代リーダー育成研修」の東北訪問の一環として行った。静岡市立高校との交流は今回で 3 度目となった。
6/17	中央大学生との交流	中央大学生に向けた、被災地の現状の説明	5 名	3 名	中央大学生 3 名から、授業発表の題材収集として依頼を受けた。

7/26	神戸 4 高校との交流会	震災ボランティアに携わる大学生の活動報告、クロスロードゲーム、座談会	5 名	31 名	神戸 4 高校とは、神戸高校、東灘高校、葺合高校、御影高校を指す。4 高合同の東北研修の一環として行った。
8/9	兵庫県立尼崎西高校生との交流会	大川小学校の視察、石巻じちれん山根氏の講演、クロスロードゲーム	5 名	29 名	尼崎西高校は昨年も宮城県内を中心に東北を来訪しており、当時はボランティアサークルたなぼたが対応した。
9/1	宮崎の大学生との交流会	各団体の活動報告。	6 名	6 名	前年度まで課外・ボランティア活動支援センター教員を務めていた藤室玲治先生のコーディネートのもと、宮崎県内の大学が合同で東北を訪問した。なお、本活動には、ボランティアサークルたなぼたと NPO 法人キッズドアで活動する学生も参加した。
9/15	東京大学 UTVC との交流会	活動報告・意見交換会	5 名	14 名	SCRUM の前身である東日本大震災学生ボランティア支援室の運営委員だった米村滋人先生が引率する被災地ツアーの一環として行った。
10/19	ICU（国際基督教大学）の留学生との交流会	活動報告・参加人数	6 名	9 名	国連訓練調査研究所（ユニタール）が ICU の留学生を被災地へ送るスタディツアーを開催し、その行程の一部で被災地にボランティアに関する学生同士の意見交換を行った。

高校生や他大学生との交流は、震災の風化防止に寄与すること、自分とは異なる解釈をもつ人と意見を交わすことで自分の行う活動をふりかえるきっかけになる、相互に学びのある活動だと考えている。遠方からの来訪も少なくなく、そのような貴重な機会に力添えできるよう、今後も積極的に受け入れを行っていきたい。

2-6-2. 学内イベントの引継ぎについて

次に、東北大学祭とオープンキャンパスへの出展のノウハウ引き継ぎについて述べたい。当日の詳細な様子や企画内容は本書の該当箇所に記載する。長年 SCRUM やその前身である東日本大震災学生ボランティア支援室は東北大学祭やオープンキャンパスに出展し、経験の伝授にたびたび苦心してきた。企画担当は、その解決の糸口となるべく、前年度の様子のプレゼンや企画の中心を担ってい

く1年生への早期からの呼びかけ、上回生への協力要請を行ってきた。ただ、前年度のイメージに縛られてしまうことにより、時の流れやニーズ変化への対応などに苦しむ場面も散見された。また、物品の仕入れや会計など、メンバーへの負担は来年も懸念される。これらの点に関しては企画担当としても改善に努めていきたい。



【写真】 静岡市立高校生との交流、大森第3団地でのご飯会 3月28日（左）

尼崎西高校との交流、旧大川小学校跡地の視察でご遺族の方からお話を伺う 8月9日（右）

2-7. その他学内イベント

SCRUMでは学内におけるイベント時にブース出展などを行ってきた。以下、それぞれの概要を報告する。

2-7-1. オープンキャンパス

7月31日、8月1日に開催された2018年度東北大学オープンキャンパスにおいて、東北大学課外・ボランティア活動支援センターとして出展し、自身の活動について来場者に伝える活動を行った（来場者は1日目102名、2日目55名、計157名）。SCRUMはその先頭に立ち、運営の中心として活躍した。以下、オープンキャンパスにおける活動の詳細を述べる。

本活動は「東北大学のボランティア団体を強く来場者に印象付ける」というコンセプトを掲げ運営した。オープンキャンパスの来場者の多くは東北大学に興味を持つ生徒たちである。そのため、各団体の魅力を伝えることを最終目標とし、震災についての説明等はその過程と位置付けた。また、来場者にオープンキャンパス後も私達の団体のことを記憶に留めておいてもらえるように、「強く印象付ける企画」作りに努めた。

準備は、SCRUM所属のメンバーを中心メンバーに据えて行った。これは2年生1人、1年生2人のチームであり、来場者と年齢が近く気持ち的な距離が近い1年生が中心となって企画作りをし、それを昨年度のオープンキャンパス企画を担当した2年生がバックアップする形を取った。そして、中心メンバーの提案内容をSCRUM全体で議論し、企画を完成させていった。大学祭企画と並行して準備する期間もあったが、比較的スムーズに活動を進行することができた。また、事前の広報は行わず、当日のチラシ配りや来場者への声掛けに注力した。

主な企画内容は、各団体のパネルの出展と手芸企画の二つである。パネルには各団体の活動内容を紹介するものに加え、新たにその団体のメンバー紹介も付け加えた。これにより、どんな団体でどんな学生が活躍しているのか、具体的にイメージできるようになった。手芸体験も新たな試みである。東北大学のボランティア活動の特徴として傾聴ボランティアがあり、住民とのお茶会や手芸はその代

表例である。今回のオープンキャンパスでは手芸企画を通じてそれを疑似体験してもらい、ボランティアというものの多様性や東北大のボランティアのやり方を実感してもらったのである。また、ブース内では SCRUM の活動の楽しさを伝えるためのスライドショーを上映した。このスライドショーは、これまでの私達の活動の写真を集めて作成したので、来場者のみならず SCRUM メンバー自身も自らの活動を改めて振り返ることができた。

本番を振り返っての反省点もあった。例を挙げるならば、手芸企画について、それが東北大のボランティアの一つの特徴であるとメンバーから来場者に直接伝えるというステップを踏むことがあまり徹底されていなかった、などがある。他にも、来場者を楽しませることに注力し過ぎて、ボランティアについて伝えるということを忘れかけている場面も少なからずあった。とは言っても、ブース内は以下の写真のように来場者でにぎわい、メンバーと来場者の間で大学生活の様々な話題で楽しい会話がなされていた。来場者自身も笑顔で、楽しんでいる様子だった。そのため、SCRUM メンバーと来場者の活発な交流という点から見れば、今年度のオープンキャンパス企画は無事成功したと言えるだろう。今年度のオープンキャンパス企画の良かった点及び反省点をしっかり踏まえたうえで、今回培われたノウハウを活かし、また来年、今年を超えるオープンキャンパス企画をつくっていくことが出来れば、それは私達にとって大きな成果になるはずである。



【写真】 オープンキャンパスにて高校生と交流の様子 7/31

2-7-2. 東北大学祭

東北大学 SCRUM は、平成 30 年度 11 月 2、3、4 日に行われた第 70 回東北大学祭に下記の内容で出展・出店した。

2-7-2-1. 屋内企画

SCRUM では、昨年度に引き続き、屋内にてブースを出展し、来場者と交流を図った。以下はその詳細について報告する。

テーマ：「今こそボランティアにできること」

基本方針：「SCRUM の視点からボランティアの魅力を知ってもらいたい」

企画内容：パネル展示・カフェ・物品販売・活動動画の上映

2018 年度はセンター前身の東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室時代からの通算で 7 回目の出展であった。また、2018 年度も昨年度と同様学術企画として出展した。6 月 12 日の第一回学祭ミーティングで過去の企画内容や現在の SCRUM の活動内容を再確認した上で、「SCRUM の視点

からボランティアの魅力を知ってもらいたい」という基本方針で合意した。7月3日の第二回ミーティングではテーマ名を「今こそボランティアにできること」に決定し、計6回のミーティングで企画を準備、当日に臨んだ。

本年度の企画は昨年度を踏襲し、スタッフが活動先で仕入れ・購入した被災地で作られているお菓子・飲料・工芸品等をカフェ形式で販売し、被災三県の被害の状況や現在の課題、その他の活動を紹介するパネルの展示を行った。また、様々なボランティア形態があることを知ってもらうためにHARU、たなぼた、ReRoots、Brige、amoのポスターも展示した。さらに、日々の活動を知ってもらうために岩手、宮城、福島での活動の映像を上映した。

また、東北大学インクストーンズと連携して屋内来場者に石巻焼きそば（目玉焼きあり）の50円引き券を配り、一方インクストーンズでは石巻焼きそばを買った人に屋内の飲み物無料券を配って双方に人が足を運ぶようにした。

【表】屋内企画にて販売した商品

地域	販売品
岩手	夢の木バウム、チョコレート饅頭、ソフトバウム、マスカットサイダー、窯出しポテト、ゆず丸クッキー、ゆず塩、柚子ケーキ、シフォンケーキ(ゆず)
宮城	ミサンガ、2WAY、キーホルダー、硯、箸置き、浜のおばちゃんグッズ、とろろ昆布、ふりかけ
福島	かりんとう饅頭、トマトジュース、桃ジュース、じゃんがら、ぼるぼろん、なみえ焼きそば、木戸の公民家のお米

来場者からは「ゆっくりできるスペースがあってよかった」という声のほか、「継続的に被災地に関わっていることに感動した。今後もこのような活動を続けていってほしい」など、SCRUMの活動を応援するような感想も聞かれた。

2-7-2-2. 模擬店

模擬店としては、先述の通り、11月2、3、4日の三日間、SCRUMの参加団体である東北大学インクストーンズが、石巻焼きそばを出店した。SCRUMとしては初めての試みとなり、「模擬店を通して、石巻そのものの魅力を知ってもらうと同時に、模擬店来客者にSCRUM屋内展示の宣伝も行うこと」を目的とした。以下、①企画内容、②実施への流れ、③来場者の反応とする。

①企画内容

今回の企画は「被災地応援！石巻茶色い焼きそば」と題して、石巻焼きそばを提供することを通して、石巻という地域の魅力を発信することとした。また、その売り上げについては、石巻でボランティア活動を行うインクストーンズ、HARU、たなぼたの三団体で分割した。販売商品、値段は以下のとおりである。

商品名	石巻焼きそば	石巻焼きそば(目玉焼きあり)
値段	300円	350円

②実施への流れ

また、実施に至る流れとしては、模擬店を通して石巻焼きそばを提供する、といったように、手段と目的がはっきりしていたため、話し合いを行ったり、会議を行ったりする回数は少なく、10月下旬あたりから東北大学インクストーンズ内で毎週行われるミーティングで当日の動きの確認を行い、直前期に当日のための調理練習をインクストーンズ、HARU、たなぼたの各参加者で行ったのみであった。具体的には8月下旬に当日までの動きの確認、検便提出者(=調理者)の確定、材料、調理方法の確認を行い、直前に事前調理練習を行った。そして、学祭当日を迎える、といった流れとなった。

③来場者の反応

今回の企画は、「食」という老若男女を問わないものであったため、売り上げは38万円を超え、多くの焼きそばを提供することができた。また家族連れの方などにとっては座ってゆっくり食べることができる場所として屋内展示も多くの方々に利用してもらうことができた。また、被災地としてのみならず、石巻という地域固有の魅力を発信することができたと思う。具体的には「初めて食べた。おいしい」「多くの人が来る学祭で、食を通して被災地をアピールすることができたのは良いことだと思う」といった意見を聞くことができた。



【写真】屋内企画の様子(左)、模擬店の様子(右)

2-7-3. 考えるソファ

考えるソファとは、川内北キャンパスのマルチメディア教育研究棟にある東北大学学習支援センターとその学生組織であるSLAが企画するイベントである。東北大学生全員を対象として開催されるこの企画は、設けた一つのテーマについて参加者同士で考えたことや感じたことをじっくり話し合い、考えを広げるというものである。

SCRUMとSLAが共同で企画したこの考えるソファは「ボランティア」について掘り下げていこうというものであった。以下、経緯や当日の様子などについて触れる。

【開催の経緯】

今年度は当センターと学習支援センターの教員同士の会話が契機となって企画が開始した。6月中旬ごろSCRUMとSLAの学生・教員同士でミーティングが設けられた。そこでは、お互いの活動の紹介をしながら、ボランティアに関する考えるソファの日程や詳細な各回のテーマについて話し合った。

ミーティングでは、SCRUMの活動を紹介するとともに、ボランティアを取り巻く様々なトピックについて話題とした。その中でボランティアのイメージとのギャップのあるものや、ボランティア未経験者でも話しやすいものをテーマとして選別して、詳細を詰めていき、日程とともに決定した。

【表】 開催日時・場所・テーマ等

日時	テーマ	活動場所
7/4	ボランティアって誰のため？なんのため？	SLA ラウンジ
7/10	ボランティアと仕事って何が違うの？	SLA ラウンジ
7/17	ボランティアとお金の関係って？	SLA ラウンジ

【当日の様子】

参加人数はいずれの日も数名～10名であり、SCRUMメンバーの参加はどの日も2人ずつであった。

当日参加した一般の東北大生にはボランティア経験のある人もない人もいたが、適宜SCRUMメンバーに活動や運営に関する質問をしながら考えを広げていた。ボランティア経験者が一方的に経験談を話すような雰囲気にはならず、ボランティアの本質に関わるような話題も挙がっていたため、お互いに得るものは多く、開催後にSCRUMメンバーに共有した考え・意見もあった。

SCRUMのミーティングはやるべきことが多く、思いや本質に関する話はどうしても少ない。集中会議などではワークショップなどで触れることが出来ているが、ぜひボランティア支援室や活動の最中などでもできるような雰囲気を作りたいと思うような企画であった。

2-8. 国際部

ここでは国際部が実施する、留学生向けのツアー、ワークショップならびに今年度から実施している事前研修について報告する。東北大学には数多くの留学生が在学しているが、留学生の東日本大震災に対する関心は高い。そこでSCRUMは、2015年12月に、第一回留学生向けワークショップを開催し、そのあと2016年度には、東北大学の学生ボランティア活動を支援する支援室としては、留学生も対象として対応しようという目的で、「国際部」を設置した。

今年度の特徴としては、Gakuvoとの提携(それに伴い、被災地アンバサダー育成を目標にを掲げ、ツアー前に事前研修を実施)、ミーティングの毎週実施が行われた。

【表】 2018年度の活動一覧、実施ツアー

日時	ツアー名	主な活動内容	参加者数 (内スタッフ・教員数)
6/10	荒浜ツアー	仙台市の荒浜地区で、海岸清掃や、荒浜小学校の震災遺構見学	27 (15)
6/16	南三陸研修	7月に実施したベイラー企画へ向けての、南三陸の被災地フィールドワーク	15 (10)
8/10	福島研修	11月福島ツアーへ向けての勉強ツアー	9 (9)

11/18	福島ツアー	留学生への福島の震災による被害の発信、 川内村でのボランティア	22 (10)
1/5	南三陸研修	2月実施予定の南三陸研ツアーへ向けての 打ち合わせ、被災地見学	6 (6)

① 荒浜ツアー

仙台市若林区荒浜地区において実施した、留学生対象、使用言語英語のボランティア兼スタディーツアーである。国際部の新生が入ったあと最初のツアーということもあって、スタッフの参加は多かった。荒浜小学校での視察は、通訳を自分たちで行うという試みを行ったが、うまくいかない場面もあり、今後の参考となった。

② 南三陸研修

今年度から、国際部もグローバルラーニングセンター主催のベイラー大学企画を共催として参加させていただくこととなり、本番へ向けての事前学習として、視察、語り部のお話を伺う事前研修を行った。国際部として、初めて南三陸へ行き、語り部ツアーをしていただいたことは大きな機会となり、結果2月に国際部として、南三陸ツアーを実施する運びとなった。

③ 福島研修

悲願である福島ツアーを11月に実施すべく、その前準備として事前研修を行った。福島県富岡町で東日本大震災3.11を語る会さんに語り部視察をしていただき、福島の現状、状況を学んだ。

④ 福島ツアー

8月の事前研修を経て、11月に留学生対象の英語での福島ツアーを実施した。再び語る会のご協力のもと、福島の現状を発信、午後は川内村へ移動し、現地住民を対象にカフェを行った。数少ない原発事故被災地の現状を留学生に発信できた。

⑤南三陸研修

2月実施予定の南三陸留学生ツアーに向けて、志津川青少年の家での打ち合わせ、語り部での立ち寄り先の下見を行った。



【写真】南三陸町にて語り部さんと振り返り（左）、
富岡町帰宅困難区域バリケード付近にてお話を伺う（右）

2-9. 震災伝承部

被災地現地に密着した活動を行うことが多い SCRUM だが、昨年度、そのような活動にとどまらず、震災から 8 年、被災当時からこれまでの復興の記憶を忘れず、忘れさせずに、次の災害に備えることを目的として震災伝承・災害救援部は設立された。

昨年度に引き続き、東日本大震災を様々な観点から考え、普段の活動地域に関係なく様々な震災遺構を訪ねることで、メンバーが震災を改めて考えることを大きな目的となった。

また、今年度は新たに Gakuvo との協定事業も始まり、アウトプットの大きな機会となった。以下、今年度の取り組みを紹介する。

2-9-1. 新歓ツアー「若林区スタディーツアー」(4/8)

SCRUM 最初の新歓企画である、若林区のスタディーツアーを今年度は震災伝承部が主体となってボランティアサークル“たなぼた”の協力を得つつ行った。

この企画は大学からそれほど遠くない若林区を訪れ、東北大学がある仙台にも東日本大震災の爪痕が残っていることを知ってもらうことを目的として行われた。

企画のコンテンツとしては、荒浜海岸での清掃活動・荒浜小学校及びメモリアル交流館の視察・大和町市営住宅の会長さんのお話を伺うものとした。海岸清掃では今でも荒浜を訪れる人々の想いに触れたり、自治会運営の大変さや被災からの生活の変遷などリアルなお話を大和町市営住宅の会長の方から伺うことができた。

上級生のメンバーが 14 名だったのに対し、新入生の参加が僅か 2 名で手厚く交流することができた。毎年開催時期が早いので広報に限界があるが、震災やボランティアに関心のある新入生を勧誘することができる貴重な機会であるので、今後も大切にしたい。

2-9-2. Gakuvo 協定事業「学校防災スタディーツアー」(9/23-24)

今年度から始まった Gakuvo との協定事業「東日本大震災の経験を世界と未来につなぐプロジェクト」の「ボランティアリーダー育成プロジェクト」の一環として震災伝承部が担当となり、震災伝承の課題を学ぶスタディーツアーを実施した。

第一回目のツアーのテーマは「学校防災」とした。大川小学校の第二審の判決が注目された 2018 年度であったが、被災した学校の当時の混乱や震災遺構としての議論など東日本大震災が学校教育に与えた影響を理解し、考えることが目的だった。

荒浜小学校・大曲小学校・雄勝小学校・大川小学校の当時の場所を訪れ、語り部の方々からお話を伺った。大曲小学校では同年代の学生語り部からお話を伺い、大川小では大きな衝撃とともにご遺族がこれまでに歩んだ様々な道りを伝えることができた。

また、お話を聞いて終わるだけでなく、深い理解にも繋げるために振り返りとともにワークショップを行った。各小学校から得られる教訓のまとめや仮に教員となった時の避難マニュアルの作成など難しい内容ではあったが、一般参加者も学年や興味関心が高かったこともあり、メンターとしてワークショップに参加した雄勝花物語の徳水氏からも高い評価をいただいた。

この「学校防災スタディーツアー」は震災伝承部メンバーも新たな知識を得ることが出来たことに加えて、普段の活動等で知り、感じたことを伝えるというアウトプットの機会となった。震災伝承を考えるだけでなく、自らも震災伝承の一助となることが出来たことは大変喜ばしいことであった。資金的な支援だけでなく、企画内容にもアドバイスを頂けたため、より良いツアーとすることが出来た。

2-9-3. ビデオ等を用いた学習会

昨年度に引き続き、東日本大震災を様々な観点から知るために、テレビで放映された番組などの視聴を行なった。前期はミーティングと交代で学習会を行い、5回実施することが出来た。特に新歓期の学習会は入門編としての役割を担い、広くいろいろな団体からの参加者がいた。後期は別に記述した、多大学合同ツアーのミーティングが重なりなかなか実施することが出来なかったが、1度、ハザードマップを使って被災地を比べてみたり、自分が住む地域の危険要素を読み取るワークショップを10月に行なった。

Gakuvo 協定事業のスタディーツアーのテーマに関連した学習会を実施することが出来れば、インプットとアウトプットのバランスをうまく取ることが出来たのだろうが、ツアーの企画準備やミーティングもあり回数を重ねることが出来なかったことが課題として残っている。しかしながら、体系的にまとまった番組や資料を用いて知識・関心の幅を広げる営みは、大変意義深いものである。絶やすことなく続ける必要がある。



【写真】 4月若林区スタディーツアーの荒浜での様子（左）、
9月学校防災スタディーツアーのワークショップの様子（右）

2-10. 人権共生部

SCRUM 直轄部である人権共生部、通称「ひととも」は昨年度から活動を開始し、今年度で2年目となった。SCRUM が震災にかかわらず様々なボランティア活動を支援していく位置づけへと変化した中で、「ひととも」は、スクラムにおける新たな活動をインキュベートする（孵化させる）機能をもつことを目指し構想された。「勉強会」「フィールネットワーク」「プロジェクト」などを通して、社会の様々な人権課題を座学・実地から学ぶことで、共生社会へ向けての歩みを考えることのできる人権感覚を養えるよう、様々な分野に目を向けて幅広く取り組んでいる。

夏には、昨年度も実施したプログラム「子どもの貧困問題解決に向けた取り組みに学ぶボランティア体験プログラム」（通称「夏プロ」）を実施した。今年度は、「せんだいこども食堂」、「宮城野こども食堂」、「つるがや子ども食堂」、「TEDIC」の4団体に受け入れをお願いし、14名の学生が参加した。体験前の事前説明会兼顔合わせとなる「ガイダンス」では、「せんだいこども食堂」、「つるがや子ども食堂」、「TEDIC」の3団体の方に来ていただき、それぞれの活動の背景や注意事項について説明していただいた。体験後のフォローアップとなる「体験報告会」では、「TEDIC」から講師として鈴木平さんに来ていただき、活動の振り返り・活動の意味をより深く考えるワークを実施した。

ボランティア体験・報告会を終えて「視野が広がった」などの感想が聞かれ、またプログラムをきっかけに受け入れ団体先での活動を継続する学生も現れた。参加学生にとっての気づき、受け入れ団体にとってのボランティア増などの結果も得られ、実施できてよかった。また、江口先生に補助していただきながらではあるが、受け入れ団体様との打ち合わせから学生主体で企画・運営を行うことができ、ひとともメンバーにとって、人脈・経験的に来年度へと繋がる収穫が多いプログラムとなった。

勉強会は、前期・後期を通して継続的に行った。SCRUM の OG の中澤さんにスピーカーになっていただいたり、夏プロに向けて「子どもの貧困」をテーマに実施したりと、様々に工夫して実施することができた。今年度入ってくれた1年生も積極的に勉強会の担当を務めてくれ、より幅広いテーマに取り組むことができた。

勉強会については、ひとともメンバーだけでなく、より多くの人に参加してもらえる勉強会を企画したいという意見や、よりディスカッションの時間をたくさんとった勉強会をしたいなどの意見が出ている。今年度の春休みや、来年度の新歓時期の企画を中心に、そういった勉強会に挑戦できるとよいと思う。

後期から運営を2年生に引き継ぎをした。ひとともは人数はあまり多くはないが、自由だけでも意欲的に活動するメンバーが集まっており、学びに適した空間だと思う。また、大学入学などを機に様々な社会に触れることが多くなる中で、学生にとって、(自分も含めた)社会について他者と意見を交わす場は必要とされていると思う。来年度以降も、学部学年を問わず様々な学生が参加でき、フラットに学びあえる場として、ひとともを守り育てていってほしい。

【表】 ひとともの活動一覧

活動名	開催日 (内容、担当者名)
ミーティング	4/3(火)昼、4/27(金)昼、5/11(金)放課後【新歓ミーティング】、6/1(金)放課後、10/22(月)昼、1/15(火)昼
勉強会	5/22(火)昼 (旧優生保護法、江口先生) 6/1(金)放課後 (セクシャルマイノリティ、中澤) 6/19(火)昼 (セカンドハラスメント、大友) 7/13(金)放課後 (子どもの貧困、大庭、朝賀) 11/19(月)昼 (女性専用車両、朝賀) 11/21(水)昼 (出生前診断、磯部) 11/29(木)放課後 (痴漢・痴漢冤罪、高嶋) 12/11(火)放課後 (移民から見る差別意識、赤田)
フィールドワーク	4/30(月祝) (国立ハンセン病療養所東北新生園)
夏のプログラム 「子どもの貧困問題 解決に向けた取り組みに学ぶボランティア体験プログラム」	6/15(金)昼 (ミーティング) 6/18(月) («せんだいこども食堂」打ち合わせ) 6/29(金)朝 (ミーティング) 7/6(金)朝 (ミーティング) 7/11(水)放課後 (ミーティング)

夏のプログラム	7/12(木)	(「宮城野子ども食堂」 打ち合わせ)
「子どもの貧困問題	7/14(土)	(「TEDIC」 打ち合わせ)
解決に向けた取り組	7/20(金)	(「つるがや子ども食堂」 打ち合わせ)
みに学ぶボランティア	8/2(木)放課後	(ガイダンス)
体験プログラム	8/5～9/30	(ボランティア体験期間)
	9/30(日)	(体験報告会)



【写真】 国立ハンセン病療養所東北新生園見学の様子（左）、勉強会の様子（右）

2-11. 東北大学災害伝承プロジェクト“もしとさ”

今年度より新たに発足した SCRUM 内の団体“もしとさ”について以下に報告する

2-11-1. もしとさの概要

もしとさは、「東日本大震災に向き合ってきた私たちだから高知の人たちを本気で震災から守りたい」というコンセプトのもとに SCRUM メンバーにより立ち上がった団体である。現在は、「東北での経験を高知へ伝え、地域住民 1 人 1 人が防災への意識を持ち続け、地域として防災に向け、自走できるようになる。」を目標に「未災地」高知県での防災に取り組んでいる。もしとさの活動は主に以下の 2 地域で行っており、活動に際しては、災害科学国際研究所の先生方にご指導頂いている。

2-11-2. 高知県須崎市での活動

もしとさの想定する活動規模や地域特性を基に協力者に調整をお願いし、高知県須崎市（主に吾桑地区）を活動先を選定した。9 月の第 1 次派遣では、防災に関連するニーズの把握や信頼関係の構築を目的に、視察や地域住民との懇親会を実施した。11 月に実施した第 2 次派遣では、吾桑地区の 20 世帯に聞き取り調査を行い、災害に対する意識や備えの有無を調査した。今後は吾桑地区をモデル地区として防災意識の向上を目指し、須崎市全体への波及を目指す。実施に当たり高知県南海トラフ地震対策須崎地域本部、須崎市地域おこし協力隊、(一社) 防災活動支援センターの支援を頂いている。

2-11-3. 宮城県名取市での活動

実践的な防災教育を学ぶために、名取市の市民団体「防災・減災教育のゆりあげかもめ」（以下、ゆりあげかもめ）の活動に参加させていただいている。ゆりあげかもめは、メンバーが身の回りで取り組める防災を自ら学び、名取市内で伝える活動をしている団体である。ゆりあげかもめでの学びはもしとさの活動に活かされると共に、参加学生の防災力向上にも繋がり、有意義なものとなっている。

【表】もしとさの活動概要

日時	活動名	活動場所	活動内容	参加学生
8/3	防災キャラバン (ゆりあげかもめ)	名取市那智が丘 公民館	防災ダック, 毛布で担架, 水 消火器体験	3
9/17- 20	第1次須崎派遣	高知県須崎市, 安芸市	須崎市: 視察, 懇親会, 打ち 合わせ, 安芸市: 打ち合わせ	2
10/27	スタッフ研修 (ゆりあげかもめ)	名取市市民活動 支援センター	クロスロードゲーム, HUG	2
11/23- 26	第2次須崎派遣	高知県須崎市 吾桑地区, 須崎地区	吾桑地区: 聞き取り調査 須崎地区: 防災茶話会 (さす けなぶる, 足湯茶話会)	1
12/8	関東学院大の現地視察 (ゆりあげかもめ)	名取市閑上地区, 市 民活動支援センター	関東学院大の閑上視察, イン タビュー, ほのぼの灯り作り	1
12/9	諏訪第一防災研修会 (ゆりあげかもめ)	名取市増田西公民館	ほのぼの灯り, 空き缶でコンロ作り	2
12/15	スタッフ研修 (ゆりあげかもめ)	名取市市民活動 支援センター	親子で防災	2



【写真】ゆりあげかもめ「防災学校」への参加 (左)、須崎市街地視察の様子 (右)

2-12. 地域共創部

地域共創部は 2018 年度後期より活動を開始した。活動の目的は「過疎地域の人と協力連携して、地域づくりを考え、その中で得た知識や経験をモデルとして活用すること」である。インクストーンズが活動先としている波板地区を皮切りに、沿岸被災地にかかわらず過疎地域の地域づくりを考えるグループとして発足した。とはいえ 2018 年度後期は波板地区に主軸を置き、住民と対話しつつ今後の活動の方針を固める半期であったといえる。

地域共創部では以下の表の通り、2 回波板地区で活動をした。また学内では隔週～週 1 回のミーティングを行い、聞き取り内容の共有や反省、次回の活動、次年度の予算などについて協議してきた。以下は表にあげた過去 2 回の活動について詳述する。

①11月24日（土）

波板地域交流センターに伺い、地域住民から現在の波板地区での地域づくりの方針や困りごと、学生に求めることなどについて話を聞いた。住民によると地域づくりの目的は震災直後から一貫して変わっておらず「波板の交流人口を増やして地域を存続させること」で、そのために波板地域交流センターを外部からの支援者の活動拠点としてほしいという。現在は波板地区の運営費確保が切迫した問題であり、そのための商品開発や制作を学生に手伝ってほしいという話を聞くことができた。

②12月9日（金）

12月の活動は、11月に住民から伺った要望を踏まえた活動に加えて、普段交流センターでの集まりには顔を出されない住民に直接聞き取りに伺った。11月の活動では、販売する商品は「波板らしい」「地区内で完結する」「(住民が)自分たちでできる」ものがいいという意向を聞いていたため、簡単な組みひもの作り方などを伝え、学生と住民と一緒に作業した。また販売用のサイトの会員登録なども行った。聞き取り調査では「交流センターの掃除が大変」「訪問者が少なく寂しい」などの声をきくことができた。

【表】2018年度の活動一覧

日時	活動場所	活動内容	参加人数
11/24	波板地域交流センター	住民との交流	3
12/9	波板地域交流センター	住民への聞き取り 商品開発のお手伝い	6



【写真】波板地域住民と食事しながら話し合いをした（11月24日）

2-13. 緊急時の災害対応

SCRUMでは、東日本大震災以外にも、各地で発生した災害への緊急対応を行ってきた。本年度は特に緊急災害が多く発生した年であり、前年度までの熊本地震被災地への派遣に加え複数の災害における支援を行ってきた。以下、それぞれについて報告する。

2-13-1. 熊本地震被災地への支援活動

2016年4月の熊本地震発生以降、本学では熊本地震被災地への学生ボランティア派遣を継続して実施している。一昨年度から昨年度にかけ、SCRUMとHARUが連携する形で10度の派遣（2016年5,6,8,9,11月・2017年2,6,8,12月・2018年2月）を実施し、のべ44名の学生が現地で活動を行った。今年度は、9月に11度目の派遣を実施し、学生7名が参加した。2月には、12度目の派遣を実施し、学生8名が参加した。

以下、各派遣の活動概要を述べていく。

2-13-1-1. 第11次派遣

9月10日から14日にかけて、第11次派遣を実施した。この派遣では、東北大学から学生7名が参加し、益城町内7箇所の仮設住宅で活動を行った。活動した3日間合計で、熊本大学の学生12名、熊本県立大学の学生22名（いずれものべ人数）と一緒に活動を行うことができた。

初日（10日）は、午前に入熊本入りした後、午後活動先へのチラシ配布・活動準備を行った。

2日目（11日）は、惣領仮設・木山上辻仮設・津森仮設の3箇所に分かれて活動を行った。木山上辻・津森両仮設では、足湯と手芸としてペットボトルのキャンドルホルダーと吊し飾りの作成を行った。惣領仮設では、足湯と手芸に加えて清掃ボランティアを行った。住民の方からは、「家にいてもなんもすることがなかけんこうやって大学生の方が来られると行きたくなるのよねー」という感想や、足湯に対して「冷え性だから最近手足が冷えてきて、足湯がとても気持ちいい」といった感想を伺うことができた。

3日目（12日）は、馬水東道仮設・櫛島仮設の2箇所に分かれて活動を行った。馬水東道仮設では、足湯と手芸、清掃を行い、櫛島仮設では、足湯と手芸に加え、食企画としてひとくちピザと白玉団子を来場者の方に振る舞った。住民の方からは、食企画に対して「とってもおいしいわ！おいしいおいしい。今の若い人は何でもできちゃうんだね。」といった感想を伺うことができた。

4日目（13日）は、馬水仮設・テクノ仮設の2箇所に分かれて活動した後、熊本大学に戻り交流会を行った。馬水・テクノ両仮設での活動では、足湯・手芸を行った。活動後の交流会では、各大学の活動紹介を行い、その後クロスロードゲームとワークショップを行った。ワークショップでは、大学ごとに分かれ、今後できることを「防災に関して」と「熊本に対して」という2つのテーマで話し合い、共有を行った。

最終日（14日）は、被災者支援および支援団体間のネットワーク構築活動を行っている一般社団法人よか隊ネット熊本を訪問し、熊本地震発生後の支援活動に関してお話を伺った後に意見交換を行った。その後、益城町（木山地区）・西原村（山西地区）の視察を行った。この際西原村では、普段活動している益城町よりも一足早く整備された災害公営住宅を視察することができた。

参加学生の感想としては、「熊本で学んだことを心に刻んで、今後の活動に生かしたい」（東北大学2年）、「今まで行ったことのない仮設にも行けたので、学ぶことは多かったです」（熊本県立大学2年）、「仮設から徐々に人が出ていく時期になっているので、次何ができるのか何をすべきかを考えなければならぬと感じている」（熊本大学大学院修士2年）といった感想を聞くことができた。



【写真】足湯をする東北大生（左）、三大学での交流会参加者の集合写真（右）

2-13-1-2. 第12次派遣

2月23日から27日にかけて、第12次派遣を実施した。この派遣では、東北大学から学生8名が参加し、益城町内7箇所の仮設住宅で活動を行った。活動した2日間合計で、熊本大学の学生8名、熊本県立大学の学生18名（いずれものべ人数）と一緒に活動を行うことができた。

初日（23日）は、午前に熊本入りした後、午後活動先へのチラシ配布・活動準備と、初参加のメンバーは熊本県立大学の学生の案内のもと、益城町内の視察を行った。

2日目（24日）は、惣領仮設にて活動を行った。活動内容は、食企画として東北の名物料理である芋煮作りを行い、その後ビンゴ大会・手芸の塗り絵・ちぎり絵を行った。住民の方からは、「暖かいご飯一緒に食べて嬉しいよ。賑やかだね。」といった感想を伺うことができた。また、一部のメンバーは今回活動することが出来なかった馬水東道仮設を訪問した。自治会長の方のご厚意により、今回の地震で被害が大きかった杉堂地区・堂園地区を案内していただいた。

3日目（25日）は、3班に分かれて馬水仮設・櫛島仮設・木山上辻仮設・木山仮設・赤井仮設・津森仮設ののべ6箇所で活動を行った。活動内容は、足湯と手芸の塗り絵・ちぎり絵を行った。住民の方からは、「（手芸は）ポケ防止になるからいいんだよね〜」（津森仮設）といった感想を伺うことができた。

4日目（26日）は、熊本県立大学にて交流会を行った。内容としては、グループに分かれ、互いに自分の所属する団体紹介をしたのち、「活動」「個人」の2つの視点からの振り返りのワークを行った。

最終日（27日）は、熊本城の視察を行った後に益城町に移動し、今回の派遣では活動することが出来なかったものの、発災の年から継続的に活動してきたテクノ仮設の自治会長の方からお話を伺った。避難所から仮設住宅にかけての話を具体的なエピソードを交えてしていただくことができ、とても貴重な機会となった。

参加学生の感想としては、「普段福島の活動ではあまり行かない仮設住宅での活動が印象的だった。」（東北大学2年）「初めて会った人ばかりで、純粋に住民の方との会話を楽しむことができた」（東北大学1年）といった感想を聞くことができた。



【写真】 惣領仮設での活動後の記念写真（左）、三大学交流会でのワークショップの様子（右）

【表】 今年度熊本派遣の概要（「参加人数」は参加した東北大生の数）

日時	活動場所	活動内容	参加人数	備考
9/10 ～ 9/14	益城町内仮設 (惣領/木山上辻/津森/馬水東道/櫛島/馬水/テクノ) 熊本大学	足湯・手芸（ペットボトルキャンドルホルダー/吊し飾り）・食（ひとくちピザ/白玉団子）・清掃 現地学生との交流 視察（益城町・西原村・熊本城） 意見交換（一般社団法人よか隊ネット熊本）	7	第11次派遣
2/23 ～ 2/27	益城町内仮設（惣領/馬水/櫛島/木山上辻/木山/赤井/津森） 熊本県立大学	足湯・手芸（塗り絵・ちぎり絵）・食（芋煮） 現地学生との交流 視察（益城町・熊本城）	8	第12次派遣

2-13-2. 大阪北部地震被災地への支援活動

2018年6月18日に発生した大阪北部地震被災地への支援活動として、7月1日から3日、同月14日から16日の2回活動を実施した。第1次派遣には学生1名が、第2次派遣には学生3名と教員1名が参加した。なお、第2次派遣は、神戸大学のボランティア団体「神戸大学学生震災救援隊」と関西大学社会安全学部、被災地NGO協働センターと協力・連携する形で活動を実施した。

2-13-2-1. 第1次派遣

第1次派遣は現地の状況を収集する目的で実施した。実際に活動したのは7月2日のみであり、高槻市内のニーズ調査及びブルーシート張りの手伝いを行なった。また、NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）の深山氏に現地やボランティアセンターの動向を伺った。

2-13-2-2. 第2次派遣

第2次派遣を実施した7月中旬になると、発災から1ヶ月ほどが過ぎたことから災害ボランティアセンターの活動も縮小しつつあった。そのため、1日目は学生2名が先に現地入りしたものの、当日のボランティア数充足により活動することはできなかった。

2日目は、関西大学の菅磨志保先生のご案内で高槻市三箇牧地区を視察した。また、高槻市の特別養護老人ホームで行われた足湯・子ども食堂の活動に参加した。老人ホームの入居者や子供、地域の方々の笑顔を見ることができた。活動後には、神戸大学のボランティア団体「神戸大学学生震災救援隊」のメンバーとの交流も行った。

3日目は、午前中に高槻市災害ボランティアセンターの活動として、高槻市昭和台地区でのニーズ調査（戸別訪問）を行った。ほとんどのご家庭からはニーズが上がらなかったが、「倒れたものを元に戻してほしい」というようなハード系のニーズがわずかにあり、1ヶ月経っても復旧作業が完了していないことを実感した。午後からは災害ボランティアセンター内で足湯を実施し、社協職員の方や、ボランティアの方に足湯の意義を知っていただくとともに、喜んでいただくことができた。

【表】大阪北部地震支援活動の活動概要（「参加人数」は参加した東北大生の数）

日時	活動場所	活動内容	参加人数	備考
7/1 ～ 7/3	大阪府高槻市	高槻市内のニーズ調査・ブルーシート張り	1	第1次派遣
7/14 ～ 7/16	大阪府高槻市	高槻市内の視察・特別養護老人ホームで足湯・子ども食堂に参加 高槻市昭和台地区でのニーズ調査・災害VC内での足湯	3	第2次派遣 教員1名参加

2-13-3. 西日本豪雨災害被災地への支援活動

2018年7月上旬に西日本を中心に広範囲にわたって記録的な大雨を観測した。河川の氾濫や土砂崩れが発生し、全国での死者・行方不明者数は245名、建物の全壊は6,767戸、半壊は11,243戸と被害は広範囲に及んだ。とりわけ岡山県・広島県・愛媛県の被害が大きかった。

センターとしてどの地域の支援活動に入るかが議論になったが、広島大学の学生ボランティア団体 OPERATION が東日本大震災以降に宮城県を中心にボランティア活動をしていたことや、以前に東北大学とも交流があったことから広島県を支援対象として活動を進めることになった。

2-13-3-1. 第1次派遣・第2次派遣

第1次派遣および第2次派遣は教員1名および学生2名での少人数での派遣となった。事前派遣的な意味合いが強く、現地での被災地の状況の確認や、広島大学の学生支援担当副学長と学生生活支援グループの職員とも意見交換を行った。広島大学の学生は東広島市社協の災害ボランティアセンターや呉市社協災害ボランティアセンター安浦サテライトの運営をサポートしていた。東北大学も現地の状況を知るため、災害ボランティアセンターを通じたボランティア活動に従事した。

2-13-3-2. 第3次派遣

8月26日(日) 教員1名と学生1名が前日入りし、関西大学菅磨志保准教授とともに東広島市安芸津から呉市天応地区の各地で現地の方のお話を伺いながら視察。その後、広島大学にて現地学生と共に今後の日程の打ち合わせを行った。

8月27日(月) 東北大から学生4名が合流し、関西大から学生が1名合流し、広島大学の学生も含めて坂町で活動した。被災地NGO協働センター頼政氏の仲介で小屋浦地区ふれあいセンターで足湯ボランティアの班と広島市の危機管理室の丹波氏のアテンドで坂町・広島市を視察する班に分かれた。夜には互いの班が合流してひろしまネットワーク会議に出席した。

8月28日(火) 午前は呉市安浦地区の視察と足湯ボランティアの打診をする班と東広島社協にて今後の展開や連携を伺う班に別れて活動し、午後は広島大学にてここまでの日程の一連の振り返りとなつがりの活動に関するワークショップを実施した。

8月29日(水) 安浦のまちづくりセンター内の避難所で足湯ボランティアをする班と、これまでにボランティア派遣を多くした東広島の安芸津地区にて今後の活動のきっかけを得るためにニーズ調査をする班に分かれて活動した。

8月30日(木) 災害時に集落が孤立していた安浦地区下垣内でのボランティア活動をする班と、東広島市志和地区でのニーズ調査をする班に分かれて活動した。

2-13-3-3. 第4次派遣

9月17日(祝) 仙台空港から神戸空港に飛行機で移動し、広島まではレンタカーで移動した。夕方頃に呉市安浦地区に到着し、安登仮設住宅の視察や安浦まちづくりセンターでお話を伺った。夜には東広島市内で広島大学の学生と意見交換やスケジュール確認を行った。

9月18日(火) 安登仮設住宅でサロン活動など心のケアを目的としたボランティアを展開するため、安浦まちづくり協会の方々と意見交換会を行ったり、安登仮設住宅で引き続き関係団体から情報収集をした。

9月19日(水) 8月にニーズ調査を行なった農家さんで水路に流れ込んだ土砂の撤去活動をする班と、仮設住宅を視察する班に分かれて活動を行なった。仮設住宅の視察班は、安登仮設住宅を担当する社会福祉協議会職員の方と情報交換をしたり、呉市天応地区の仮設住宅での現状をヒアリングした。

9月20日(木) 午後からOPERATIONつながりのミーティングが開催される予定であったため、午前中に東北大生とつながりの災害対応チームとで今後の方向性に関するミーティングを行なった。東北大組は正午ごろに広島を出発し、神戸から仙台への帰路についた。

2-13-3-4. 第5次派遣

11月30日(金) 先遣隊として教員1名と学生1名が仙台空港から広島空港に移動。午前中は東広島市や呉市の視察を行った。午後には広島大学にて学生支援担当副学長や学生生活支援グループの職員との意見交換を行った。夕方には坂町へ移動し、坂町支え合いセンターより平成ヶ浜仮設住宅団地の集会所を見学させてもらった。

12月1日(土) 学生4名が合流した。広島大学の学生と平成ヶ浜仮設住宅団地にて合流し、翌日の活動のシミュレーションを行った。午後からは翌日の活動に必要な買い出しの準備等を行った。

12月2日（日） 広島大学の学生と広島大学で合流し、坂町に移動して9時から平成ヶ浜仮設住宅団地で交流イベントを準備した。交流イベントでは東北からの応援ということで石巻焼きそばと芋煮を振る舞った。この活動では100名ほどの住民さんの来訪があり、20名ほどの住民さんに足湯をしてもらった。イベント終了後、広島大学に移動してその日の振り返りを行った。

2-13-3-5. 第6次派遣

3月8日（金） 教員1名と学生5名がそれぞれ現地入り。東北大学のみで3月9日に活動する三原市の旧船木小学校や3月10日に活動する呉市安浦地区にて現地視察を行った。坂町の小屋浦地区でも復旧の様子を視察した。夕方から広島大学にてOPERATIONつながりと今回の派遣に関する打ち合わせを行った。

3月9日（土） OPERATIONつながり農業ボランティアをする班と、旧船木小学校の住民さんとの交流会に参加する班に分かれて活動した。農業ボランティアでは水路に流れ込んだ土砂の撤去を行なった。旧船木小学校では足湯ボランティア、住民さんとの交流、子どもとの遊び相手などのボランティアを行った。夕方に広島大学で合流し1日の振り返りを行った。

3月10日（日） 学生2名がこの日から合流した。呉市安浦地区にてNPO法人ひろしまNPOセンターが中心となって開催した「元気になろうでえ(day)」のイベントに東北大学・広島大学・関西大学・神戸学院大学の学生が参加した。安浦ミュージカルと同日に開催したことで300人強の人々が来場した。イベントでは、キャンドルナイトで3.11への追悼や鎮魂、東北からの支援ということで芋煮、グリーンコープ生活協同組合ひろしまさんはちらし寿司を来場者の方ふるまっていた。

3月11日（月） 旧船木小学校で支援物資の整理や芋煮での住民さんとの交流を行った。東日本大震災発災の時刻に合わせて、住民さんに現在の東北の様子を伝えたり、黙祷を捧げるなどした。建設型仮設住宅に訪問して芋煮を配布する活動もした。教員1名は途中で抜けて広島大学の学生生活支援グループとの意見交換を行った。夕方には広島大学にて1日の振り返りを行った。

3月12日（火） 活動が当初の予定と変更になったためボランティア活動を行うことができず、原爆ドームの見学などをし、「遺構」に関する研修を行なった。夕方にそれぞれの帰路へとついた。

【表】西日本豪雨災害支援の活動概要（「参加人数」は参加した東北大学生の数）

日時	活動場所	活動内容	参加人数	備考
7/21-7/23	東広島市・呉市安浦地区	災害ボラセンを通した泥かき、広島大学生に向けた足湯講習等	2	第1次派遣 教員1名参加
7/27-7/30	東広島市・呉市安浦地区	災害ボラセンを通したニーズ調査、足湯ボランティア等	2	第2次派遣 教員1名参加
8/26-8/30	東広島市・呉市安浦地区・坂町小屋浦地区	東広島市社協との打ち合わせ、坂町小屋浦地区や呉市安浦地区での足湯ボランティア等	5	第3次派遣 教員1名参加

9/17-9/20	東広島市・呉市安浦地区	呉市安浦地区のまちづくり協議会との意見交換、東広島市の被災した農家でのボランティア活動等	3	第4次派遣 教員1名参加
11/30-12/2	坂町平成ヶ浜応急仮設住宅団地	平成ヶ浜中央公園応急仮設住宅団地でのボランティア活動	5	第5次派遣 教員1名参加
3/8-12	三原市旧船木小学校、呉市安浦地区、坂町小屋浦地区	三原市の被災した地域住民を対象としたボランティア活動、呉市安浦地区での3.11追悼イベントのボランティア、坂町小屋浦地区の公民館でのお茶会ボランティア活動	7	第6次派遣 教員1名参加



【写真】 呉市安浦でのボランティア活動後の様子（左）、旧船木小学校での足湯ボランティア（右）

2-13-4. 北海道胆振東部地震への支援活動

2018年9月6日に発生した北海道胆振東部地震を受け、9月22日～24日に学生2名で北海道・むかわ町に伺い、ボランティア活動を行った。

9月22・23日はむかわ町ボランティアセンターに受け入れていただき、地震で被害を受けた家屋での片づけなどを行った。22日は商店で、地震で散乱したネジや釘の仕分けと片づけ作業を行った。23日は二手に分かれ、一方は地震で自宅兼店舗の建物が損壊したため廃業する美容室の片づけ、もう一方では農家の納屋で散乱した物の搬出作業を行った。

9月24日はNPO法人レスキューストックヤードの紹介で、札幌市立大学の学生など共にむかわ町の指定避難所となっていた「四季の館」で足湯ボランティアを実施した。住民からは、「こんなに長く生きてきて初めてだ。何が起こったかわからなかった。(80代女性)」「今日足湯が来ると聞いて待っていた。食べるもの、入浴には困っていない。家に帰りたいが、すぐに帰られる時状態ではない。(30代女性)」などの声を聞くことができた。

本派遣は地震発生から2週間経った頃だったが、むかわ町内は被害を受けた家屋が目立ち、今回ボランティア先で出会った方々のように片づけがままならない住民がまだ多くいる様子だった。2018

年度の北海道派遣は緊急で動いたことや予算の関係もあり 1 回きりの活動となってしまったが、その後現地では足湯隊が発足し、現在も仮設住宅などで活動を続けている。

【表】今年度の活動一覧

日時	活動場所	活動内容	参加人数
9/22 ～24	むかわ町	住宅の片づけ作業、足湯	2



【写真】むかわ町「四季の館」にて札幌市立大学の方と足湯講習会

2-14. 他団体とのコラボ活動

SCRUM では、他の学生ボランティア団体との交流として、教職員と連携した活動・イベント（2-3. 渉外）以外にも、学生が主体となった多様なコラボ活動の企画を行なってきた。以下、それぞれの概要を報告する。

2-14-1. いっぽこ合宿

6月30日（土）～7月1日（日）の2日間、栗原市の花山青少年自然の家でいっぽこ合宿2018を実施し、SCRUM、HARU、たなぼた、AsOne、キッズドア、bridge 計6団体から22名が参加した。当日は、参加している個人・団体を知るワークショップや、復興支援について考えるワークショップを通して学びを得ることができたほか、野外炊事やスポーツ大会を通して参加者同士の親睦を深めることが出来た。また、コラボ企画を考えるワークショップも行われ、被災地の様子をまとめたマップをコラボ企画として行うこととなった。

【表】今年度いっぽこ合宿についての概要

日時	活動場所	活動内容	参加人数	備考
6/30 ～ 7/1	花山青少年自然の家	ワークショップ 野外炊事 スポーツ大会	22	いっぽこ合宿



【写真】ワークショップの様子（左）、いっぽこ合宿参加者の集合写真（右）

2-14-2. 山元町ハロウィンパーティ・ボランティア

山元町のコミュニティ形成支援の一助となるべく企画された活動であり、今回で4年目（4回目）の開催となった。2回目からは「つばめの杜西区自治会」が主催し、HARUとSCRUMが共催している。このイベントは、ハロウィンで仮装した子ども達が山元町の住民の方々の家を訪問し、一緒にミニゲームや記念撮影、お菓子交換などを行うことによって多世代交流をはかるものである。住民さんのお宅を訪問した後はピニャータや射的などで遊び、大学生も混じって一緒に交流した。

多くの子ども達が参加し、多くの住民にご協力いただいた。この活動を心待ちにしている住民さんや子供たちもあり、非常ににぎわった活動となった。子供たちはこの日の特別な仮装や、あまり会うことのない、大学生との交流を楽しんでいるようであった。つばめの杜西区自治会の方々をはじめ参加された住民さんからも継続実施を歓迎していただいた。



【写真】参加者全員の集合写真（左）、子ども達の射的の様子（右）

2-15. その他 SCRUM の学生が参加、企画したイベント

SCRUMの学生が参加や企画したイベントについて以下、報告する。なお2-15-1. 第一回 仙台若者アワードへの参加、2-15-2. 第2回 JCN 復興サロンへの参加については2017年度センター紀要に未掲載の昨年度の活動である。

2-15-1. 第一回 仙台若者アワードへの参加

昨年度 2018 年 2 月の出来事であるが、仙台市、コカコーラ社、一般社団法人ワカツクによって構成される、仙台若者アワード実行委員会が主催する第一回仙台若者アワードに東北大学 SCRUM として出場した。

仙台若者アワードは、現状あまり広く知られていない社会や地域の課題を解決しようとする若者主体の活動が、より活発になることを目標に企画されたコンペティションであり、最優秀賞が 1 団体、優秀賞が 2 団体、会場共感賞が 1 団体決定される。それぞれの賞には、賞状とトロフィーが授与される他、最優秀賞には団体の PR 動画の授与がされる。

審査は、書類による一次審査、面接による二次審査、プレゼンテーションによる最終審査と三ステージに分かれており、最終審査は仙台市市民活動サポートセンターの市民活動シアターにて行われた。また、審査員は、東北大学大学院経済学研究科 西出優子様、株式会社河北新報社 常務取締役編集担当 鈴木素雄様、特定非営利活動法人青春基地 代表 石黒和己様、仙台市市民局局長 村山光彦様、コカコーラボトラーズジャパン株式会社 CSV 推進部 地域共生課 課長 渡邊隼人様 の 5 名であった。

東北大学 SCRUM は一次審査、二次審査を通過し 10 団体による最終審査に出場した。最終審査では、「一歩先のボランティア」を合言葉に、団体が活動からの新たな地域課題への気づきを積極的に次の活動に反映させているという内容の 8 分プレゼンテーションをした。結果、最優秀賞を受賞した。

受賞特典の PR 動画はさることながら、ミヤギテレビ、河北新報でも取り上げられ仙台若者アワードへの出場は、効果的な広報活動としての側面もあった。



【写真】受賞式の様子（左、右）

2-15-2. 第 2 回 JCN 復興サロンへの参加

2017 年度から 2018 年度にかけて助成を頂いている Yahoo!基金のご紹介で、東北の被災地で活動する学生として、2018 年 3 月 13 日(火)に第 2 回 JCN サロンに参加した。東京都千代田区紀尾井町内の Yahoo!JAPAN 本社にある『LODGE』にて開催された。

JCN(東日本大震災支援全国ネットワーク)は、東日本大震災による被災者・避難者の支援にあたっている団体をつなぐ連絡組織である。

SCRUM からは、参加団体のほか、インクストーンズ、福興 youth からそれぞれ 1 名ずつ発表。発表では、被災地の現状や課題、実際の活動内容を報告した。SCRUM のほかには、福島大学の方 1 名、社会人の方 1 名から発表があった。

その後、インタビュー形式のパネスディスカッションを行った。パネルディスカッションでは、活動を始めたきっかけや、続けているモチベーションについて、将来への展望について話した。さらに、一般の参加者の方を含めたグループディスカッションを行った。一般参加者の方は、実際に東北の被災地で活動されている方や、東京都内で活動されている方、都内の学生や社会人の方で被災地での活動に関心がある方が集まっており、様々な立場の方との意見交換を行うことができた。

ディスカッション終了後は、東北で生産されたお菓子や飲み物を楽しみながら、参加者同士が自由に会話する時間が設けられた。

発表の機会を頂き、自分たちの活動に対して改めて向き合い、考え直す良い機会になった。また、東京という遠方の方と直接話すことにより、被災地の状況や現地での活動について知ってもらう、あるいは東京の方が被災地をどうとらえているのかを知る機会となった。

【表】 JCN 復興サロンの概要

日時	活動場所	活動内容	参加人数
3/13	Yahoo!JAPAN 『LODGE』	サロン内の企画でゲストとして発表。 パネルディスカッションやグループディスカッションへの参加。	4(内3人はゲストとして、1人は一般参加者として)



【写真】 JCN サロンの様子 (左)、福興 youth からの発表 (右)

2-15-3. 多大学合同ツアー

2019年2月に実施した9大学合同の多大学ツアー及びセミナーについて報告する

2-15-3-1. 本企画の企画背景

本企画の背景には、いくつかの文脈があった。第一に、日本財団学生ボランティアセンター (Gakuvo) との協定事業のプロジェクトの一つに「震災伝承の課題を学ぶ多大学合同ツアー in 宮城」があり、いくつかの大学生と東日本大震災の被災地を巡る計画があったこと。第二に、課外・ボランティア活動支援センターが2018年度に高度教養教育・学生支援機構の公募に申請して「社会連携・市民性教育・「居場所」創出に向けた「正課・課外リンク」の開発と評価」事業が採択され、セミナー開催のテーマを検討していたこと。第三に、6月の大阪北部地震、7月の西日本豪雨災害が続く中で、緊急災害時／災害後の大学間連携の必要性和重要性を痛感したこと。特に、西日本豪雨災害後の7月末に広島を訪問中、課外・ボランティア活動支援センターの江口と SCRUM の和久が、「広島大

学生を東北に招待できるといいね」と語り合ったことが直接のきっかけとなって企画が立ち上がった。

8月下旬から企画準備を開始し、11月頃には日程と概要、参加大学の大枠が固まり、SCRUM 震災伝承部を中心にツアーの企画を練り、課外・ボランティア活動支援センターを中心にセミナーの企画を行った。企画を練る中で、特にセミナーに関しては阪神・淡路大震災後の学生ボランティアの系譜を辿ることが一つのテーマになり、チラシでは次のようにその趣旨を説明している。「ボランティア元年」と言われた1995年の阪神・淡路大震災以来、様々な災害が起こる度に、学生ボランティアが現場を訪れ、活動に参加してきました。このようなボランティア活動は災害直後の一次的なものに留まらず、被災した地域や別の被災地で継続的に活動する学生団体も多く、課題解決や新たな文化の創造に関与してきました。被災地にとって学生ボランティアはどのような意味を持っているのか、また〈学ぶ存在〉である大学生にとって被災地でのボランティアはどのような意味を持っているのか。阪神・淡路大震災、東日本大震災、熊本地震、大阪北部地震、西日本豪雨災害等の被災地で活動する学生団体が集い、一緒に今後の可能性を考え合います」。

なお、ツアーおよびセミナーに参加した大学・団体は以下の通りである。元センター教員の藤室先生が現在勤務されてる中央大学にもお声がけしたが、学生の都合がつかず参加が叶わなかった。その他、東北大学生の中には「たなぼた」はじめ他のボランティア団体所属者も含む。なお、セミナーのみ聖学院大学でボランティアに取り組む学生、尚綱学院大学ボランティアステーション職員等の参加もあった。

【表】多大学合同ツアーに参加した団体一覧

団体名	人数	備考
神戸大学学生震災救援隊	1	阪神・淡路大震災後に結成。
神戸大学持続的災害救援プロジェクト Konti	1	熊本地震後に結成。
東北大学 SCRUM	11	東日本大震災後に結成。
尚綱学院大学ボランティアチーム TASKI	2	東日本大震災後に結成。
東北学院大学災害ボランティアステーション	2	東日本大震災後に結成。
熊本大学学生災害復旧支援団体 熊助組	10	2007年に結成。熊本地震後、SCRUMも連携して活動を実施。
熊本県立大学学生ボランティアステーション	2	熊本地震後に結成。SCRUMも連携して活動。
関西大学+Youth	1	大阪北部地震後に結成。7月にSCRUMと連携して活動したことが結成の契機の一つ。
広島大学 OPERATION つながり	2	東日本大震災後に結成。西日本豪雨災害後にSCRUMも連携して活動を実施。

2-15-3-2. 多大学合同被災地研修ツアー（2/18-19）に関して

①企画目的と概要

本ツアーの企画目的として、大きく2つを設定した。一つは、発災から10年を迎えようとしている現在の東北の被災地の状況を伝えること。そしてもう一つは、参加大学それぞれの支援活動に活かせるヒントを得るきっかけを作ることである。

熊本・広島・兵庫など日本各地で活動する学生がわざわざ東北まで足を運んで何を得るのか。ただ被災地の状況を伝えるだけの視察では少々物足りない。目で見てわかるインフラ的なものだけではなく、行くだけ、見るだけではわからない住民の姿や思い、同じ支援をする人と接する機会を設けることで地に足をつけ、それぞれが自分の活動先に持ち帰るものが多くなるようなツアーを目指した。

当日の日程は右上の表の通り。上記の目的のもと仙台から一泊二日でも十分な距離にある石巻市にて研修を行った。

時間	行程
2/18・1230	仙台空港集合
1400~1500	旧大川小学校視察
1530~1700	雄勝まちづくり情報館及び旧雄勝町内視察
1730~1930	女川（夕食・入浴）
2030	波板着 振り返り・懇親会・就寝
2/19・730	起床
800~1000	波板視察・活動
1130~1230	昼食@石巻げんき市場
1250~1400	石巻市門脇地区視察
1430~1600	一般社団法人石巻じちれん 訪問
1800~2000	懇親会@東北大学川内キャンパス

②当日の様子と成果

上記の日程は大きな遅れや事故も無く無事に終えることができた。遠方から参加した多大の学生からも訪問先の情報量の多さに戸惑いながらもそれぞれの目的意識を基に取り組んでいた。また、多大生同士の交流も十分に生まれており、雰囲気も賑やかなものになっていた。

このツアーによって得られたものは、多大生・東北大生ともに多くある。

上記の目的が達成されたことが大きな成果である。東北の復興の現状・課題をそれぞれが向き合う災害と比較することで、類似点・相違点の発見することができたという声が多く上がった。東北の多大学生にとっても同じ災害の他の被災地との詳細な現状・課題の比較に繋がり、遠方の多大生よりもより具体的な成果が生まれていた。

また、本ツアーは「発信する立場」の我々東北大生にとっても意味があった。それは、情報の整理に繋がったことである。訪問先のアテンドに当たり、それぞれの地域の情報をまとめるという作業が必要になった。特に旧大川小学校や旧雄勝町波板地区の案内は学生のみで担当したが、これまで活動や語り部による説明を通して断片的に蓄積してきた情報をまとめることにより、伝える側もこれまでより深い理解に繋がった。

その他、仲間意識の形成や訪れて初めて感じる空気感の共有など、寝食を共にする中で生まれた様々な成果があった。改めて意義深い企画になったと感じる。

2-15-3-3. 東北大学ボランティアセミナー「災害時の学生ボランティアの経験をつなぐ」

セミナーの企画概要は下表の通りである。講師には、阪神・淡路大震災後様々な支援活動を継続され、現在は神戸大学でコーディネーターを務められている東末先生をお招きし、ワークショップも交

えて震災の教訓や学生ボランティアの学びについてご講演いただいた。当日の全体進行は SCRUM1 年生が務め、パネルディスカッションの企画・進行も SCRUM の学生が担い、顔見知りの大学生同士での手作りイベントのような趣となった。最後のワークショップでは、フィールドは異なっても同じような支援活動、団体運営等の悩みを抱えていることがわかり、参加した学生からは好評だった。

【表】セミナー当日の概要

日時	2019年2月20日（水）9:00～16:00
場所	東北大学川内北キャンパス マルチメディア教育研究棟 M601 教室
タイムスケジュール	<p>9:00～ 開会の挨拶 小田中直樹氏（課外・ボランティア活動支援センター長）</p> <p>9:10～ 学生ボランティア団体の活動報告</p> <p>10:30～ 講演「災害時／災害後の学生ボランティアの教育的意義」 講師：東末真紀氏（神戸大学学生ボランティア支援室）</p> <p>12:45～ パネルディスカッション「大学生による災害ボランティアの歩みと現在」 司会：山本賢氏（東北大学3年） パネリスト：若林宏樹氏（神戸大学3年）、山本菜月氏（熊本大学M1）、 石崎花奈氏（広島大学2年）、和久晋太郎氏（東北大学2年）</p> <p>14:10～ ワークショップ ※3テーマ・5グループでディスカッション ①被災地のニーズに応じた支援活動のあり方 ②団体の組織運営 ③活動を続ける動機・モチベーション</p> <p>15:25～ 総括コメント（東末真紀氏、江口怜氏、菊池遼氏）</p>

参加者からは次のような感想が寄せられた。

- ・「(ツアーは) 2日とは思えないくらい充実していて、とっても楽しくたくさん学べたなと思っています。以前にも東北には来たことがあったけど、そこで活動したことのある、その土地に詳しい人とたくさん場所を訪れたことで、違った見方ができました」(広島大)
- ・「神戸や東北で活動を継続されている団体さんのお話を聞いたことで、今後の熊本での活動を考えていく良いきっかけになりました。団体ごとに発足のきっかけや運営形態は違えど、同じ悩みや課題を抱えて、それを乗り越えようと奮闘していることを知れて、励みになりました」(熊本大)



【写真】石巻市雄勝町浪板地区を視察（左）、セミナー終了後の記念写真（右）

3. 学生ボランティア団体の活動

東日本大震災の発生後、東北大学生のボランティア活動は、東北大学のある宮城県で主に行われていた。一方で2012年8月からは、神戸大学・岩手大学の学生等と連携して、岩手県陸前高田市で定期的に活動が展開されている。さらに2013年からは福島県でのスタディツアー等も始まり、2018年度には、SCRUM参加団体の「ぼかぼか」が岩手県で、「インクストーンズ」が宮城県で、「福興 youth」が福島県で、それぞれ活動している。また宮城県の被災地では、HARU、ReRoots、AsOne、たなぼた等の団体が東日本大震災関連の活動を継続している。

また震災以外のテーマで活動している団体もあり、高校生との交流を行う「bridge」やフェアトレードの推進を行う「フェアトレード推進サークル amo」の活動もここで紹介する。

3-1. 陸前高田応援サークルぼかぼか

ぼかぼかは今年度の3本柱として以下の3つを目標として活動を続けてきた。1つめは“仮設住宅への寄り添い”である。いまだに仮設住宅での生活を余儀なくされる方々に寄り添う活動をしていきたいと考えた。2つ目は“公営住宅でのコミュニティ形成のきっかけづくり”である。公営住宅に住む方からよく「公営住宅には知り合いが少ない」「どこにだれが住んでいるのかわからない」といったような声を聞く。そこで、我々が集会所などで企画をすることで自宅から外へ出るきっかけを作り、住民さん同士の交流のきっかけを作りたいと考えた。3つ目は“地域活動の支援”である。これは以前から関わらせていただいている高田町和野地区やNPO 法人パクトの子ども支援のみちくさルームのボランティアを行うことである。

3-1-1. 上半期の活動 2018年4~9月

昨年度に引き続き今年度も月に約1回のペースで陸前高田市にてボランティアツアーや子供支援などの活動を行った。4月はぼかぼかに加入している学生のみでの派遣であったが、5月は新入生向けに大々的にツアーを行った。1日目は陸前高田市内の震災遺構を視察した後、震災発生時避難場所になった気仙大工伝承館の館長さんのお話を伺い、東日本大震災についての知識を深めた。2日目は公営住宅で料理企画（たこ焼き、サンドウィッチ）を行い、住民さん同士の交流の場ができたのと同時に、新入生にとってもボランティアの楽しさを感じられる企画となった。

6月はぼかぼかの学生のみで子供支援の派遣と、一般学生を連れてのボランティアツアーの2回を行った。ボランティアツアーでは語り部さんの話を聞き、訪れた被災地の現状や復興の理解を深めた。

8月は2回ツアーを行った。1回目は4泊5日と長期で現地に滞在し、陸前高田市の伝統行事「うごく七夕」に和野まつり組に参加したり、毎年恒例の高田小学校の児童を集めての子供企画を行った。このツアーでは、栃ヶ沢公営住宅にて初めて「夜ご飯企画」を実施した。普段当団体が開催している手芸カフェや料理企画は日中に行われるが、その時間帯には来られない、働いている人や子供たちにも交流の場を提供するという目的で企画した。狙い通り50名を超える多くの住民さんが集まり、とても意義のある時間を過ごすことができた。

3-1-2. 下半期の活動 2018 年 10 月～3 月

10 月はボランティアツアーではなくぼかぼかメンバーのみで三陸スタディツアーとして沿岸地域を視察や語り部さんのお話を聞くツアーを行った。様々な地域の復興の違いを感じることが出来たツアーとなった。またツアー中に下半期の活動方針を決めるミーティングに時間を設けたが、そこで高台に自宅を再建された方の生活にも学生ボランティアとして寄り添いたい、という意見が出て、下半期からは新たな活動先として高台を設定し、ニーズ調査から始めるという方針が決まった。

その方針をもとに、11 月のツアー内で高台の調査を行った、以前から知り合いの住民さんの紹介で、高台 2 で行われているラジオ体操に参加させていただき、高台に住んでいる方と関係を持つことができた。学生が足を運ぶことに対してウェルカムな雰囲気だった。このツアーではパクトの子供支援にも参加した。

12 月は 2 回ツアーを行ったが、2 回目のツアーで再び高台 2 のラジオ体操に参加した。その後に住民さんたちとお茶会する機会があり、話を聞く中で「人が集まる機会がなく寂しいから高台でもイベントを開いてほしい」というニーズを拾った。このツアーでは、年末の大掃除の時期ということもあり、仮設住宅で清掃活動をしながら住宅を回った。住民さんの自宅に上がらせていただき、掃除の後お茶会が始まったりと普段のカフェ活動よりも住民さんとの距離が縮まったという声があった。

1 月は和野地区の伝統行事「虎舞」の手伝いをした。



【写真】 栃ヶ沢公営住宅での「夜ご飯会」の様子（左）、米崎中学校仮設住宅にて住民と交流（右）

3-1-3. 今年度の活動のまとめ

今年度は計 14 回の派遣を行い、約 45 名の学生がツアーに参加した。年度の頭に設定した方針に従いつつ、夜ご飯会などの新たな企画の実施や、後期からは高台という新たなフィールドを開拓するなど、現地のニーズに沿った活動ができた。

■住民の方の声

内容	活動日・場所
この 1 週間の中で今日が 1 番楽しかった。ずっと宿題して寝ての繰り返しだったから今日はすごく楽しかった。(10 代・女性)	5 月・今泉公営住宅 (料理企画)
今の山車が本当の山車だと思っちゃいけないよ。震災前の山車はもっとすごかったんだからね。(70 代・女性)	8 月・滝の里仮設住宅 (お茶っこ)
ここに移ってから、なにも一年で力を注ぐものがないの。お祭りとか。なんか一年が無駄に過ぎちゃったなあって感じ。(70 代・女性)	12 月・高台 2

■学生の声

内容	活動日
復興に伴う困難が自分の知っていた以上に厳しいことを知り、自分にできることはどれだけあるのだろうと考えさせられた。(経済学部・1年)	5月
初めて清掃ボランティアを行ったが、住民さんの家に上がることでより距離が近くなり、お話が沢山できてよかった。(文学部・2年)	12月
子供企画でも手芸でも大掃除でも住民さんに喜んでもらえて、陸前高田でのボランティア活動はまだニーズがあるなど感じた。特に米中で、大学生が外から来るお陰で住民さんが新しい情報に触れられていると聞いたのが一番印象的であった。(工学部・3年)	12月

【表】2018年度活動の概要

日時	活動場所	活動内容	参加者数	備考
4/21~22	栃ヶ沢公営住宅	視察・足湯・手芸・カフェ・料理企画(たこ焼き)	9名	一般参加無
5/5~6	気仙大工伝承館・今泉公営住宅・大野公営住宅	視察・講演を聞く・足湯・手芸・カフェ・料理企画(たこ焼き、サンドウィッチ)	23名	
6/15~16	みちくさハウス	子供支援	5名	一般参加無
6/23~24	陸前高田コミュニティセンター・下和野会館・中和野仮設住宅・米崎中学校仮設住宅・滝の里仮設住宅・田端仮設住宅・下和野仮設住宅	視察・講演を聞く・うごく七夕のあざふ染め・足湯・手芸・カフェ	20名	
8/6~10	陸前高田ドライビングスクール・和野会館・只出漁港・中田公営住宅・大野公営住宅・栃ヶ沢公営住宅・陸前高田コミュニティセンター・滝の里仮設住宅	視察・お話を聞く・うごく七夕に参加・料理企画(焼きそば、おにぎり)・足湯・手芸・カフェ・子ども企画・タコ漁体験	14名	「うごく七夕」は陸前高田市高田町の伝統行事
8/24~26	和野会館・みちくさハウス・米崎中学校仮設住宅	和野の納涼祭に参加・子供支援・足湯・手芸・カフェ	5名	

10/6~8	南三陸・気仙沼・釜石・大槌・宮古・田老	まちあるき・視察・お話を伺う・ミーティング	14名	一般参加無
11/17~18	陸前高田レインボーハウス・高台2・滝の里仮設住宅	視察・高台の視察、ニーズ調査・子ども支援・足湯・手芸・カフェ・料理企画(たこ焼き)	9名	
12/8~9	中田公営住宅・今泉公営住宅・下和野公営住宅	足湯・手芸・カフェ・掃除の手伝い	7名	
12/22~24	和野会館・高台2・田端公営住宅・米崎中学校仮設住宅・滝の里仮設住宅	視察・子供企画・高台の視察・足湯・手芸・カフェ・清掃活動	16名	
1/13~14	和野会館	視察・虎舞練習・参加	11名	虎舞は陸前高田市の伝統行事
2/9~10	中田公営住宅・栃ヶ沢公営住宅	視察・足湯・手芸・カフェ・料理企画(ひつつみ)	15名	
2/15~16	みちくさハウス	子供支援	3名	一般参加無
3/16~17	陸前高田グローバルキャンパス	「春呼び祭」の手伝い	8名	一般参加無

3-2. インクストーンズ

東日本大震災の支援は、宮城県では石巻市雄勝町を一つの拠点として活動を行ってきた。この活動は2016年度になると、「東北大学インクストーンズ」という愛称が定まり、東日本大震災学生ボランティア支援室やSCRUMから幾分自立した形で活動を展開するようになった。そして2017年度には東北大学インクストーンズは、学友会文化部準加盟団体として東北大学学友会に登録し、活動を継続している。以下では「東北大学インクストーンズ」の活動を、前期の活動、後期の活動、住民の方・ツアー参加者の声、活動まとめの順に紹介していく。

3-2-1. 前期の活動 2018年4~9月

2018年度前期は2017年度後期の活動に引き続き、①石巻市雄勝町波板地区の地域づくり支援、②石巻市の仮設住宅、復興公営住宅のコミュニティ形成支援、という2種類の活動を実施した。2017年度からの大きな変化としては、石巻市の多くの仮設住宅が夏頃に閉鎖されてしまったため、これまで行ってきた活動先・活動内容の根本的な見直しが必要になったことである。

① 石巻市雄勝町波板地区の地域づくり支援

石巻市雄勝町波板地区では、3回の派遣を行った。前期の派遣の間に行った住民さんへのヒアリングにより知ったニーズに応えるために、インクストーンズとは別に、地域共創部という団体を作ることになった。そのため、インクストーンズとしても波板に関わり続けて行くが、波板での活動を主に担うのは地域共創部となった。しかしながら、地域共創部の多くはインクストーンズのメンバーより構成されている。

② 石巻市の仮設住宅、復興公営住宅のコミュニティ形成支援

仮設住宅と復興公営住宅では7回の活動を行った。2017年度まで活動していた多くの仮設住宅が閉鎖されるとのことで、「最後の活動」が多くなった期間でもあった。



【写真】波板地域交流センター前(4/29) (左)、吉野町復興公営住宅でのお茶会 (12/8) (右)

3-2-2. 後期の活動 2018年10月～2019年3月

後期は、主に今後の活動先や活動内容について、夏休み頃より話し合いを進め、実践した。そのため、インクストーンズメンバーの派遣に重きをおいて活動を行った。活動先を決める際、先生方や、今までの活動で交流のあった会長さん、石巻じちれんの方にお話を伺った。

また、後期の大きな活動として、HARU、たなぼた、SCRUMメンバーと合同で行った、東北大学祭での石巻焼きそばの模擬店の出店もある。

3-2-3. 住民の方からの声、参加学生の声

2018年度は、4回のツアーと9回のスタッフ派遣を行った。その中で特徴的な住民の方の声、参加者の声を紹介する。

■住民の方の声

内容	活動日・場所
いろいろなことが想起・思索してしまい、薬がないと眠れない。夜中には起きてしまう。助かった方が良かったのか否か考えてしまう。しかし、娘、息子の姿を見送るたびに、後ろ向きなことは考えないようにしようと思う。(60代女性)	4/28・仮設大森第四団地
新しく引っ越してきた方がいるが、挨拶が向こうから来ないからこっちからいきづらい。(50代女性)	11/25・南境仮設団地
最近まで仙台に移住していたが、こっちに戻ってきた。自分の生まれ育った街が知り合いも多く、やっぱりいい。だが、人は減ってしまったし、祭りなども少なくなった(60代女性)	12/8 吉野町復興公営住宅

■参加学生の声

内容	活動日・内容
生で初めて被災した建物を見た。目の前の山に多くの子供が押し当てられて亡くなり、この場所を家や遺体が流れて行ったのを想像するといっても立ってもいられなかった。耳を塞いで目を閉じて逃げ出したかった。でも、生きている人間として現実を見逃さないのは義務だと思う。行けてよかった。(教育学部一年・女)	7/1・大川小学校
仮設住宅が、授業で聞いていた通りの有様だった。しかし思ったよりも住民の方々は明るく元気だった。自治会長さんのお孫さんが元気に遊んでいるところを見て、この子と同世代の多くの子が、大川小で被害にあったんだよなと思ってしまい、元気さと残酷さが重なってしまった。(文学部一年・男)	7/1・仮設飯野川校団地
”ボランティア”という感じではなく、”遊びに来ました!”という感覚で楽しく交流できた(農学部二年・女)	7/1・門脇復興公営住宅

【表】 2018年度の活動一覧(1) 実施ツアー(東北大学生に公募して実施)

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
4/15	門脇復興公営住宅 大川小学校 復興情報館	門脇で本間さんにお話を伺う、お茶会(門脇)、大川小学校の見学、情報館の見学	25	HARU, たなぼた共同
4/28~29	波板地区 三反走仮設住宅 仮設大森第四団地 大川小学校	新聞紙バッグづくり(三反走、大森)、大川小学校の視察	14	新歓ツアー
7/1	門脇復興公営住宅 仮設飯野川校団地	ミサンガ(門脇、飯野川)、大川伝承の会の方のお話	16	交流
2/10~11		日程のみ確定		

【表】 2018年度の活動一覧(2) インクストーンズスタッフ中心の活動

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
5/19	門脇復興公営住宅 仮設飯野川校団地 波板地区	餃子の皮ピザ(飯野川)、バスボム作り(門脇)、ペンダントトップ作り(波板)、波板でのヒアリング	5	
6/16	新西前沼第1住宅 大森第4仮設住宅	石巻焼きそばマイスターの取得(新西前沼第1住宅)、草刈り(大森第4仮設住宅)	20	HARU, たなぼた共同
7/7	南境仮設団地 百俵館	ヒアリング、視察	4	

8/4~6	南境仮設団地 波板地区	ミサンガ作り（南境）、海水浴 場運営の手伝い（波板） お話を伺う（石巻市役所の方、 オーリンクハウスの元職員さ ん）	12	
10/7	南境仮設団地 追波川仮設 二子団地	草刈り（南境）、ヒアリング、 視察	8	
11/2~4	東北大学祭	石巻焼きそばの模擬店	20	HARU、た なぼた、 SCRUM 共 同
11/25	南境仮設団地	お菓子作り、ヒアリング	7	
12/8	吉野町復興公営住 宅 名振地区	クリスマスカード・クリスマ スリースの作成・足湯（吉野 町）、ヒアリング、視察	7	
12/16	南境仮設団地	ケーキデコレーション	7	

3-3. 福興 youth

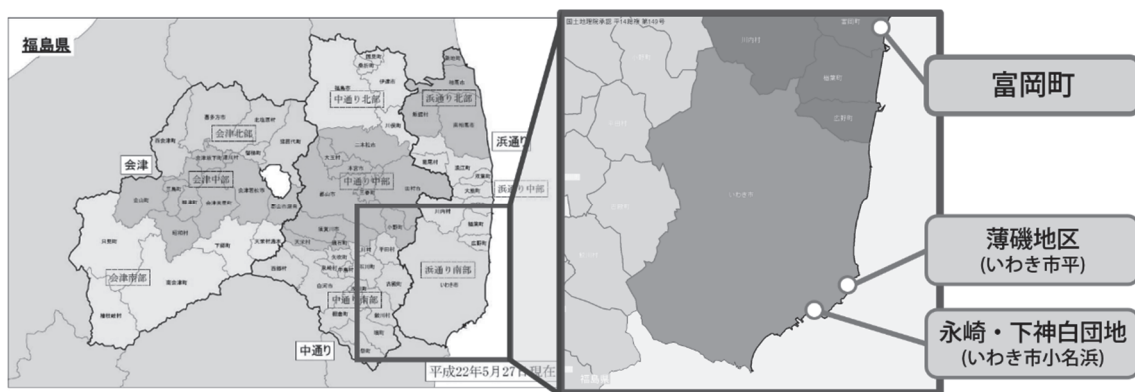
東北大学福興 youth は今年度、前身のいわゆる「福島部門」から数えて、活動開始6年目を迎えた。2013年に東日本大震災学生ボランティア支援室内に福島部門として誕生し、2015年より「福興 youth」と名乗り、福島県内の仮設住宅・災害／復興公営住宅等にてボランティア活動を行ってきた。

今年度は以下の3つの活動方針を掲げて活動した。

- ・住民の方の架け橋になり、コミュニティ形成を図る
- ・変化していく福島に寄り添い、支援が必要な人の受け皿となる
- ・福島の今に触れ続け、発信していく団体となる

2018年度の活動の主な特徴としては、

- ① 災害公営住宅「市営永崎団地」、隣接する原発避難者向け復興公営住宅「県営下神白団地」への定期的な訪問を活動の中心に据え、コミュニティ形成支援に取り組んだこと
- ② 「永崎団地」「下神白団地」での活動で、従来のカフェ活動と並行して昨年度から始めた子供企画を継続したこと
- ③ 主にスタディツアーで富岡町の視察を継続したこと
などが挙げられる。



【図】福島県内の位置関係(左)と、東北大学福興 youth の主な活動地域(右)

左図：気象庁福島地方气象台 HP <http://www.jma-net.go.jp/fukushima/alert/alert.html> より引用

右図：地図編集ソフト「白地図 KenMap」より作成。国土地理院発行の数値地図 200000

(海岸線・行政界) に準拠。

3-3-1. 2018年度の福興 youth をめぐる主な出来事

➤ 4月 代表が平野に交代

2017年4月より福島部門の5代目代表を務めていた山崎(経済学部3年)に代わり、平野(工学部2年)が6代目となる代表に就任した。

➤ 4月 「福島県富岡町スタディツアー」を実施

4月15日、原発事故による避難指示が2017年4月1日に一部で解除された双葉郡富岡町を訪れた。津波瓦礫や除染土壌などの廃棄物が入れられた通称「フレコンバック」が町のいたるところに積まれていたり、メガソーラー発電計画によって、大量のソーラーパネルがたくさん作られていたりする現状を見て、参加者が実感を持って復興の難しさを理解する機会となった。

➤ 5月 「いわき市薄磯地区 ボランティアツアー」を実施

東日本大震災の津波により甚大な被害を受け、福興 youth が2014年度より活動してきた薄磯地区を1泊2日で訪れた。薄磯地区の伝統行事である薄井神社・安波大杉神社の例大祭に参加し、若者の転出などにより人手が不足する神輿の担ぎ手として地区を巡った。活動を通して、被災者の方々と交流し、住民と学生とが心を通わせる有意義な時間を過ごした。

➤ 6月 「福島・いわきボランティアツアー」を実施

6月23～24日の1泊2日で行ったいわき市へのボランティアツアーを開催した。23日は永崎団地集会所でカフェ活動や手芸(風鈴作り)を行った。24日は昨年からはじめた、子どもを対象としたイベント「子ども企画」で、ホットケーキ、バター作りを実施した。子ども企画ではあったものの、大人も参加し、子ども・大人・学生が交流する良い機会となった。2日間ともに、永崎団地・下神白団地の地域住民と有意義な時間を過ごした。

➤ 9月 「福島スタディツアー」を実施

9月20~22日の3日間、福島県第一原発によって大きな影響を受けた福島県で、漁業や福祉など普段伺う機会の少ないテーマについて、最前線で携わる方々のもとを訪問し、お話を伺った。加えて、今回は元東電職員の方に、原発事故による被害を受けた地域をご案内していただいた。「一般社団法人AFW」「NPO シェルパ」「ふくしまこころのケアセンター」「小名浜漁業」の方々のご協力を頂きながら、富岡町からいわき市にかけて視察したほか、富岡町社会福祉協議会が栄町団地で主催する「ゆうゆうクラブ」に参加し、住民と交流することができた。全体を通して、現在の浜通り地方を取り巻く状況を多面的に見つめるツアーとなった。なお、スタディツアーの参加者としては、17名であった。

➤ 10月 「永崎団地・下神白団地秋祭りツアー」実施

10月27~28日の1泊2日で永崎団地・下神白団地で行われた秋祭りに参加した。運営補助を行ったほか、ビンゴ大会の主催、子供向けに射的の実施など福興 youth の持ち込み企画を実施した。2日間の祭りを通して、両団地の方と交流することができた活動であった。

➤ 12月 「永崎団地・下神白団地クリスマス会ボランティアツアー」実施

12月9日、永崎団地集会所でクリスマス会を実施した。カレンダー作りとカップケーキ作りで両団地の住民間親睦を深めることができた。なお、毎度学生との再会を喜ぶ住民も見受けられるなど、継続的な支援活動が定着している。

【表】 住民の方々の声

内容	活動日・場所
こないだ、〇〇さんが、そこの通りで倒れていたの。ぱったり。あの人ね、よく倒れるから。誰も面倒見る人いないから、うん。多分誰かが電話かけて、救急車呼んでくれたのよ。良かったわよ、倒れていたのが歩道で。車道とかだったら大変よ。誰か優しい人がいなかったら、本当に大変なことになってたわよ。(60~80代女性)	10月/ 下神白団地
(いつからこちらに住まれているんですか?) 12月14日。その前は山形にいたんだけどね。雪が大変で戻ってきたの。若い人が一緒にいればいいんだけど、私たちの年齢だとね。(70代女性)	6月/ 富岡町小浜
(花植の最中で) こういう草木の手入れ大好きなんだよねえ。もっと若い人たちに教えてあげたいよお。ただ、自分もどんどん年老いてきちゃって、なかなかできないことも多くなってるんだよねえ。やりたいのは山々なんだけど。(70代男性)	6月/ 富岡町小浜
〇〇さんは元々ここの住人じゃないから。震災を機に移り住んできた人だからね...(60代男性)	5月/ 薄磯地区
今の若い人は横の繋がりはあるけど、縦の繋がりをもとうとしない。例大祭のお神輿は縦の繋がりで、縦の繋がりで子供の頃から受け継いできたもの。薄磯に親しみを持ってもらうためには、伝統をしっかり続けていかなければならない。(60代男性)	5月/ 薄磯地区

この前、道に迷っちゃって、帰れなくなっちゃったんだあ。お姉ちゃんの娘と一緒に遊んで、帰れなくなっちゃってなあ。道聞こうと思ったんだけど、誰もいなくて。道わかんなくて、帰れながったんだあ。(60代男性)	5月/ 薄磯地区
--	-------------

【表】 2018年度の活動概要

月	日(曜日)	ツアー名	主な活動内容	参加者数 (内スタッフ・教員数)
2月	16(金) ～ 18(日)	川内村ツアー	課外ボランティア・活動支援センター特任助教江口怜の展開ゼミの受講生と福島県内で活動するNPO法人コースター代表坂上氏のコーディネート企画に参加し、双葉郡川内村の現状の学習や住民間の交流企画を行った。	19(6)
3月	9(金)～ 10(土)	いわき市合同ボランティア	いわき市営永崎団地にて、福島県営下神白団地住民も対象にしたカフェ活動を、明星大を中心として、いわき明星大とともに行った。	5(5)
3月	30(土)	福島大学災害ボランティアセンターとの交流	中通りにて、福島大学災害ボランティアセンターが普段から通っている二本松仮設の片づけの手伝いと福島大学での今後の福島での活動の意見交換。	7(7)
4月	1(日)	薄磯土地区画整理式典参加	いわき市平薄磯地区の土地区画整理事業のほとんどを終えたことの式典に参加した。	3(3)
4月	15(日)	福島県富岡町スタディツアー	「富岡町3・11を語る会」の方の案内で富岡町視察、「富岡プラス」の主催するボランティアに参加。	10(9)
4月	27(金) 28(土)	川内村かえるマラソン大会	「川内の郷かえるマラソン」給水所の設営、運営補助。	3(3)
5月	3(木祝)- 4(金祝)	いわき市薄磯地区ボランティアツアー	薄磯団地自治会顧問の大河内氏、薄磯復興協議委員会委員長の鈴木氏からお話を伺う。薄井神社例大祭に参加。	15(9)

6月	3(日)	富岡花植ツアー	富岡町の花植を実施。区長の松本氏、「富岡町3・11を語る会」の方からお話を伺う。富岡町視察。	8(4)
6月	23(土)- 24(日)	福島・いわきボランティアツアー	永崎団地にてカフェ実施・手芸(風鈴作り)・子ども企画を実施。花植えに参加。	17(9)
8月	19(日)	いわき市薄磯パークフェス	「海まち・とよま・パークフェス」の運営補助。	3(2)
8月	22(水) 23(木)	いわき3大学合同ボランティアツアー	22日：明星大学、いわき明星大学、東北大学の3大学で永崎団地にて企画を行った。 23日：薄磯地区豊間しおかぜ児童クラブで流しそうめん、うちわ作りを行った。	8(8)
9月	16(日)	いわき市勿来での筑波大との交流	いわき市勿来の防災緑地の除幕式の運営補助、いわき市勿来で活動する、筑波大学”Tsukuba for 3.11”と勿来住民との意見交換会を行った。	5(5)
9月	20(木) ～ 22(土)	福島スタディツアー	「一般社団法人AFW」「NPOシェルパ」「ふくしまこころのケアセンター」「小名浜漁業」の方々のご協力を頂きながら、富岡町からいわき市にかけて視察。富岡町社会福祉協議会が栄町団地で主催する「ゆうゆう倶楽部」への参加。	17(4)
9月	29(土) ～ 30(日)	川内村・富岡町派遣	川内村、富岡町の視察。草むしりのボランティア。マラソン大会の運営補助。	6(5)
10月	27(土) ～ 28(日)	永崎団地・下神白団地秋祭りツアー	永崎団地・下神白団地で行われた秋祭りの運営補助。持ち込み企画の実施。	12(9)
11月	10(土) ～ 11(日)	富岡町福祉祭りボランティアツアー	富岡町総合福祉センターにて第34回富岡町福祉まつりに、足湯ブースの出展・運営補助。川内村の視察。	9(4)

12月	9日(日)	永崎団地・下神白 団地クリスマス 会ボランティア ツアー	永崎団地にてクリスマス会実施 (カレンダー作りとカップケー キ作り等)。	13 (6)
-----	-------	---------------------------------------	--	--------



【写真】永崎団地・下神白団地で行われたクリスマス会の様子（左）、
富岡町で行われたスタディーツアーの様子（右）

3-4. 地域復興プロジェクト“HARU”

HARUは、東日本大震災からの復興支援・地域再生を目的として2011年3月に結成された団体である。震災直後には物資支援や瓦礫撤去などの現地支援、ボランティア情報の提供を行い、2011年9月よりさまざまなプロジェクトを立ち上げ、いちご農家の支援や仮設住宅における学習支援などに取り組んできた。被災地内外における多様なニーズに対応するため、2017年1月に活動拠点を軸とした「石巻部門」と「山元部門」という部門制を採用し、現在まで宮城県のこの2つの地域で定期的な活動を継続しているほか、他大学・団体との交流やツアー等を企画している。

以下では、各部門における今年度の活動についてまとめる。

3-4-1. 石巻部門

仮設住宅の集約と復興公営住宅への移転が進んでいる地域の現状から、新たな生活環境におけるコミュニティ支援の必要性を感じ、前年度と同様門脇西復興住宅での活動を継続して行っている。定期的な訪問の中で、足湯や手芸、料理などを通して住民と交流し、住民と学生のみならず住民同士の交流の機会となるようなイベント作りを心掛けた。門脇西復興住宅では、竣工して日が浅いため集会所の壁が寂しいという住民の声を受け、参加者全員で力を合わせて完成させた作品を集会所に飾る手芸カフェを多く開催している。

3-4-2. 山元部門

毎年恒例のイベントに加え、地元のNPO法人や行政とのつながりを増やしたことをきっかけに山元町における活動の幅を広げた一年であったといえる。「遊び隊」や「はじまるしえ」など地域を盛り上げるお祭りや松林を保護する取り組みに手伝いとして積極的に参加したほか、9月に

は持ち込み企画として今年で2年目となるスポーツ祭りが山元町教育委員会の後援を受けて開催され、子ども・学生・大人が混ざってチームを組み、運動を通じて交流を深める機会となった。また、4年目を迎えたハロウィンイベントではつばめの杜西区周辺に住む子どもと高齢者の世代間交流の促進を図るなど、地域の活性化に関わる活動に力を入れて取り組んだ。

【表】2018年度の活動一覧

日時	活動場所	活動内容	参加人数	備考
4/1	坂元神社	お神輿担ぎ	2	
4/8	荒浜海岸荒浜小学校	ツアー（海岸のゴミ清掃、荒浜小学校の見学）	5	SCRUM・たなぼたと合同
4/28	山元町植栽地	植樹祭	9	
5/3	坂元公民館	フラワーアート	10	NPO 法人「子育てひろば 夢ふうせん」子育て サークル「なかよし会」 主催 IVUSAと合同
5/4	坂元公民館	春の遊び隊	11	子どもも大人もみんなで遊び隊 実行委員会主催
5/19	大森第四仮設団地集会所	ちぎり絵、足湯、ベビーカステラ	8	
5/26	山元町植栽地	松林の管理	12	NPO 法人「生命と環境保全」と共同
6/16	石巻市新西前沼復興公営住宅 石巻市大森第四仮設住宅	石巻焼きそばマイスター取得 仮設住宅の草取り、お茶会	5	インクストーンズ主催、たなぼたと合同
6/17	石巻市門脇西復興住宅	南浜つなぐ館訪問 お茶会	12	えこーるど京大さんと合同
6/23	山元町	松林管理のお手伝い	5	
7/8	石巻市仮設大橋団地	写真展	5	
7/14	山元町	松林管理のお手伝い	4	
7/28	山元町坂元神社	夏祭りのお手伝い (焼きそば・焼き鳥の販売)	2	
8/4	山元町ふるさとおもだか館	「夏の遊び隊」でブース運営	8	子供も大人もみんなで遊び隊実行委員会主催

8/9, 10	山元町小平農村	「こでらんね夏まつり」	5	9日は準備、10日に本番
8/11	東北大学川内北キャンパス内	石巻で活動している団体との交流会	4	中央大学チーム女川、インクストーンズ、たなぼた
8/	山元町海岸地区	松林の管理	1	伊勢さん
9/1	亘理町	荒浜rock運営のお手伝い	3	実行委員会主催
9/13	東北大学図書館	茨城大学fleurさんとの交流	5	fleurさんと合同でワークショップ
9/23	山元町体育文化センターグラウンドおよび体育館	「山元スポーツ祭りの運営」	12	山元町生涯学習課
9/29	山元町	松林管理のお手伝い	2	
10/6	山元町	松林管理のお手伝い	2	
10/6,7	山元町	山元はじまるしえ前日準備のお手伝い 中止対応のお手伝い	2	山元はじまるしえ実行委員会主催
10/7	石巻市門脇東復興住宅	門脇西・東復興住宅合同の芋煮会に参加	9	
10/27	山元町つばめの杜地区	つばめの杜でハロウィンイベント	12	「つばめの杜西区自治会」主催 HARUとSCRUM共催
11/2, 3,4	東北大学	お茶会とニーズ調査	5	



【写真】山元町「フラワーアート」への参加 5/3

3-5. 震災復興・地域支援サークル“ReRoots”

ReRoots は、2011年3月11日に発生した東日本大震災の時に設立されたボランティア団体だ。当初は、仙台市青葉区の川内コミュニティセンターに避難した学生と地域住民による、避難所運営ボランティアとして動き出した。しかし若林区の農村地域の被害を目の当たりにし、住民目線で農村地域の生活を再建し、復旧・復興を支えるため同年7月に若林ボランティアハウスを設立、2014年まで復旧支援を行った。他大学の学生や全国・全世界のボランティアを巻き込み、復旧支援には延べ3万人が尽力した。現在は農業を柱にした地域おこしへ向けた活動を長期的な見通しを持って活動している。以下では、2018年度に行った活動について報告する。

3-5-1. 2018年度活動概要

2018年2月に行われた合宿にて、若林区の10年後を考えた活動に転換すべく、学生自らが住民の立場に立ち、今後の若林区をどのような姿にしていきたいかをまとめた地域おこし政策を立案した。それに伴い以前の農業・販売・コミュニティ・ツーリズムの4チーム体制から、農業再生・農村コミュニティ再生の2部門体制へと組織変革を行った。それぞれの部門の活動の一部を紹介する。

① 農業再生部門の活動 ReRoots ファーム

学生が野菜生産をすることによって農家の感性と労働を学ぶとともに、畑をコミュニケーションツールとして農家との交流を通じた農業や地域の課題の把握をしている。それにより、若者の農業への関心を引き出し、その中から農業を志す若者を育成することを目指している。約50アールほどの土地を地域住民から借り、ビニールハウス2棟と路地で野菜の栽培をしている。2018年度は、夏野菜ではナス、ピーマン、トマト、じゃがいもなど、秋冬野菜では白菜、大根、青梗菜、カブなどを栽培した。栽培した野菜は後述するりるまあとにも卸している。

② 農村コミュニティ再生部門の活動 六郷地区での映画上映会

震災後、若林区沿岸部では人口流出や高齢化が進み、地域コミュニティの衰退は急速に進んでしまった。その中で、東六郷地域では自らが主体となって地域を興そうとする住民の姿もあった。そこでReRootsは、地域のコミュニティセンターで映画上映会を実施し、ともに余暇を楽しむとともに、地域の今後について議論する機会を設けた。今年度は2回行い、それぞれ22名、25名の地域住民が参加した。2018年度は福祉の観点からも住民にアプローチし、今後の六郷地区の在り方を共に考えていくきっかけとなった。

【表】 ReRoots の主な活動内容

企画名	日付	場所	主な企画内容
第1回おいもプロジェクト	5月13日	ReRoots ファーム	サツマイモとの定植、わら細工を用いた体験交流会
青葉通りカフェ ※青葉通まちづくり協議会主催	5月19日、20日	藤崎ファースト タワー館前	野菜販売、復興グッズの委託販売
三本塚市民農園茶話会	6月2日	三本塚市民農園	市民農園の美化活動
二木町内美化活動 ※二木町内会主催	7月7日	二木地区公会堂	公会堂周りの清掃、花壇の花植え

第4回映画上映会	7月7日	東六郷コミュニティ・センター	映画(素晴らしき哉、人生)の鑑賞、お茶会
わら細工ワークショップ	7月8日、12月26日	白鳥神社集会所	稲わらを使った縄ない体験やわら細工作り
笹屋敷町内会夏祭り	8月4日	石場地区集会所	出店(子供向け魚釣り)、盆踊り大会
わたしのふるさとプロジェクト 「来てけさいん六郷東部夏祭り」	8月18日	東六郷小学校跡地	盆踊り、出店
第2回おいもプロジェクト	8月19日	ReRoots ファーム	サツマイモのつるかえし、ずんだ餅作り体験
三本塚市民農園 BBQ	9月1日	三本塚市民農園	市民農園の野菜を使った BBQ
わらアートオープニングイベント ※わくわくドキドキ五感で楽しむ若林実行委員会主催	9月15日、16日	仙台市農業園芸センター	わらアート展示開始(12月9日まで展示)
種次町内美化活動 ※種次町内会主催	9月22日	種次地区公会堂	公会堂周りの清掃
西公園祭り	10月14日	西公園	野菜販売
第5回映画上映会	10月21日	東六郷コミュニティセンター	映画(幸福の黄色いハンカチ)鑑賞、お茶会
六郷東部ふるさと交流祭 ※六郷東部まちづくり部会主催	10月28日	東六郷コミュニティ・センター	展示、ワークショップ
三本塚市民農園芋煮会	11月4日	三本塚避難タワー	地域の方々、市民農園利用者・地域住民とお菓子作り
六郷東部年越し祭 ※東北大学学友会邦楽部、若林ベンチャーズ参加	12月15日	東六郷コミュニティ・センター	音楽団体による演奏、年越しイベント、お茶会(ReRoots 手作りポトフのお振る舞い)
りるまあと	毎週土曜日	シャンボール第2 荒町	野菜販売
荒井なないろマルシェ	毎月	アライデザインセンター1階	野菜販売
ReRoots ファーム・三本塚市民農園畑作業	毎週	ReRoots ファーム	野菜栽培
ReRoots サポーター会員制度	8月24日～9月1日、12月8日～25日	ReRoots 若林ボランティアハウス	若林区外部のサポーターへ野菜発送



【写真】 地域住民との茶話会の様子（左） ファームでの農作業の様子（右）

3-6. 国際ボランティア団体“AsOne”

国際ボランティア団体 AsOne は 2013 年 11 月に発足しました。「AsOne」という名前の由来は主に 2 つの意味が含まれていて、1 つ目はボランティア団体として、我々の自己満足だけのボランティアはしたくないので、ボランティアする相手の人と同じ目線で AsOne(ひとつ)になってお互いプラスになるような活動にしたいということ。2 つ目はサークルのメンバーの中が良くないと、そもそもの各人のポテンシャルも出せないと思って、サークルとして AsOne(ひとつな、家族のような)な仲の良い団体にしたいという意味が込められています。

2018 年度は、多くの新入生を迎えることができ、様々な活動を行うことができました。昨年度まで行っていた女川にある果樹園カフェ夢ハウス、大森仮設での活動を継続的に行うことを断念し、様々な被災地に足を運んでみたいという新入生の声もあって、ひとつの場所にとらわれずに活動しました。また今年度も、海外建築ボランティアをカンボジアにて行う予定になっております。

【表】 2018 年度の活動概要

日時	活動場所	活動内容	人数
4/8	女川町	スタディーツアー	5
5/19	南三陸町	スタディーツアー	3
6/30.7/1	花山青少年自然の家	東北大学内でのボランティア団体間の交流を目的とした合宿を実施	13
7/16	陸前高田、大船渡	スタディーツアー	10
8/4	石巻市	スタディーツアー	8
8/22~25	石巻市、檜葉町	関東の学生と合同で、スタディーツアーやゴミ拾い、植林のボランティアを行なった。	4
8/25	東松島市	SEGA が運営する子供のレクリエーションのお手伝い	5
10/14	女川町	女川の果樹園カフェゆめハウスにて農作業のボランティア	14
10/20	名取市関上	スタディーツアー	6
11/10	名取市関上	ゴミ拾いボランティア	12
11/11	石巻市	こころの森ハウスにて植林のお手伝い	8

11/23~25	気仙沼市、南三陸町	スタディーツアー	19
12/8	東松島市	SEGA が運営する子供のレクリエーションのお手伝い	10
12/9	石巻市	こころの森ハウスにて植林のお手伝い	5
12/16	石巻市	ヒーローショーのお手伝い	4
12/22	石巻市	こころの森ハウスにくる高校生に対するお手伝い	6
2/21~3/4	カンボジア	Habbitat for humanity が行なっている海外建築ボランティアプログラムに参加	22



【写真】スリランカでの建築ボランティアの様子

3-7. 基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークル“たなぼた”

「たなぼた」は、2016 年度前期の「ボランティア活動と地域課題」という基礎ゼミの受講生により結成された。この基礎ゼミは藤室特任准教授によって開講されたもので、東日本大震災の被災地におけるボランティア活動の企画・実施を通して地域課題の解決に挑戦する姿勢を学ぶという内容であった。実際にボランティア活動を企画・実施することを通して「私たちにもできることがある」「ボランティア活動は継続することが重要である」ということを受講生の多くが感じた。また、仮設住宅での入居者減少による支え合いの難しさ、復興住宅での新たなコミュニティ形成の課題等を学んだ。そのような受講生が今後の活動のあり方について議論した結果、新たにボランティアサークルを立ち上げることを決めた。「たなぼた」は「**たん**い**が**なく**ても** **ボ**ランティア**し**たい」「**棚**から**ぼ**た**餅**」という 2 つの言葉から誕生した名称である。

3-7-1. たなぼたの活動目的・活動理念

様々な地域から住民が移り住んできた仮設住宅や復興公営住宅では、家族や友人・隣人と支え合えるコミュニティの喪失による課題や、新たなコミュニティの形成という課題がある。これらの課題解決のために、住民の方々同士が交流し親睦を深める機会を増やすことが重要である。私たち学生が地域の集会所などをお借りして様々なイベントを企画、運営することで、その地域住民の方々が集い、知り合い、そして仲を深めるきっかけを作ることができる。さらに、活動を通じ住民の方同士や住民と私たち学生の交流を図ることで、私たちが企画するイベントが震災に関する心の傷や日常生活の悩みなどを吐露することができる場にもなると考える。

私たち「たなぼた」は「3Bota(Band,Biginner,iBasho)」を独自の活動目標として掲げ、東北大学生がボランティアを始めるにあたって、壁を感じずに気軽に参加できる企画作りを大切にしている。また、住民の方々が心を通わせる場所を作ると同時に、私たち自身にとってもボランティアを楽しく続ける居場所を作ることが重要だと考えている。今後も SNS や大学内の広報等を利用して私たちの活動を周囲の人に知ってもらい、気軽なボランティア活動参加を促すことで活動の輪を広げていきたい。

3-7-2. 2018 年の活動概要

昨年度から継続して、仙台市・石巻市の復興公営住宅の集会所にて、コミュニティ形成の支援につながるサロン活動やお茶会の実施、自治会等が主催する地域行事の支援を主に行っている。今年度は従来の復興公営住宅内だけでなく、その周辺にある既存の住宅街や、震災後の自立再建による住宅街の住民も含めた町内会規模、街全体の振興目的のイベントにも関わった。たなぼたが企画する活動以外に、他のボランティア団体と連携しての活動、団体の起源である基礎ゼミ・展開ゼミの企画への参加などもある。

活動頻度は、仙台市大和町市営住宅および石巻市新西前沼第二復興住宅での月 1 回ずつの活動を主軸に、夏季・春季休業期間には仙台市あすと長町地区や石巻市新蛇田地区の復興公営住宅などでも同様の活動を行う方針である。サークルには 40 名以上の東北大生が所属し、準備や運営にも携わっている。また SNS や学内の広報により、サークルに所属していない東北大生・留学生らも一緒に活動に参加している。

「ボランティア」「復興支援」と聞くと堅苦しいイメージを抱く人は少なくないが、未経験者でも気軽に楽しんでボランティアに参加できるような機会の提供も活動の一環である。サークル公式のゆるキャラ（ぼたちちゃん）を用いて、SNS 等を通じた参加の呼びかけや活動後の報告を行い、少しでも学生にとって身近で、ハードルの高さを感じないような工夫をしている。

【表】 2018 年の活動一覧

日時	活動場所	活動内容	参加人数	備考
4/8	仙台市荒浜地区、 仙台市大和町市営住宅	海岸清掃活動、 震災遺構見学など	3	SCRUM さん・ HARU さんと合同
4/15	石巻市南浜・門脇地区、 石巻市門脇西復興住宅	震災伝承施設での学習、 集会所にてお茶会	5	インクストーンズさ ん・HARU さんと合 同
4/22	石巻市新蛇田第一集会所(石 巻じちれん事務所)・新沼田第 二復興住宅	石巻じちれんからヒアリン グ、集会所にてお茶会・折り 紙工作	16	基礎ゼミと合同
4/28	仙台市卸町市営住宅・中倉市 営住宅・大和町市営住宅	各団地会会長にヒアリング、 大和町市営住宅にてお茶会・ 折り紙工作	21	基礎ゼミと合同

5/12	石巻市南浜つなぐ館、 石巻市新西前沼第二復興住宅	震災伝承施設見学、集会所にてお茶会・足湯・フルーツポンチ作り	9	
5/19	石巻市大森第四仮設住宅	お茶会・足湯・ちぎり絵工作	1	HARUさん主催
5/27	仙台市大和町市営住宅	お茶会・足湯・フルーツポンチ作り	13	
6/16	石巻市新西前沼第一復興住宅・石巻市大森第四仮設住宅	石巻焼きそば作り講習会、仮設住宅の清掃活動	4	インクストーンズさん主催
6/17	仙台市大和町市営住宅、 仙台市旧荒浜小学校	集会所にて音楽コンサートに参加、お汁粉提供、震災遺構見学	8	自治会主催の行事
6/23	石巻市復興まちづくり情報交流館、石巻市新西前沼第二復興住宅	震災伝承施設見学、集会所にてお茶会・足湯・白玉ぜんざい作り	6	
6/30	仙台市卸町市営住宅・中倉市営住宅・大和町市営住宅	住民交流イベント(流しそうめん、お好み焼き・ホットケーキ作り、ビンゴ大会など)	21	基礎ゼミの企画に協力
7/1	石巻市新沼田第二復興住宅・新西前沼第二復興住宅	住民交流イベント(流しそうめん、たこ焼き作り、ゲームコーナーなど)	24	基礎ゼミの企画に協力
7/29	仙台市あすと長町復興住宅	夏祭り支援(屋台の手伝い)	3	自治会主催の行事
8/5	仙台市大和町市営住宅	夏祭り支援(子ども向けゲームコーナーの手伝い) 高校生ボランティア参加	8	自治会主催の行事 若林区社協のボランティア事業
8/12	石巻市新西前沼第一復興住宅	夏祭り支援(子ども向けゲームコーナーや屋台の手伝い)	12	地元有志運営の行事
8/26	仙台市若林区大和町松木公園	夏祭り支援(輪投げ・型抜き のブース出展)	6	町内会主催の行事
9/3	仙台市あすと長町第三復興住宅	お茶会・足湯・たこ焼き作り	3	宮崎大学さん主催
9/15	仙台市大和町市営住宅	お茶会・足湯・折り紙工作とレク	5	
9/24	石巻市新西前沼第二復興住宅	お茶会・足湯・折り紙工作とレク	4	
10/13	石巻市新西前沼第二復興住宅	お茶会・足湯・牛乳パック工作	2	
10/14	仙台市ファイブブリッジ	仙台ミラソンにて事例報告	2	ワカツクさん主催のイベント

10/21	石巻市新西前沼第一復興住宅	芋煮会支援(子ども向けゲームコーナーや屋台の手伝い)	7	自治会主催の行事
10/21	仙台中倉市営住宅	炊き出し訓練参加	4	自治会主催の行事
10/28	石巻市新西前沼第二復興住宅	芋煮会支援(受付や準備の手伝い)	5	自治会主催の行事
11/11	石巻市南浜つなぐ館、 石巻市新西前沼第二復興住宅	震災伝承施設見学、 集会所にてお茶会・足湯・鈴 カステラ作り	8	
11/25	仙台市大和町市営住宅	芋煮会支援(準備の手伝い) 高校生ボランティア参加	8	自治会主催の行事 若林区社協のボラン ティア事業
12/9	仙台市若林区大和コミュニテ ィセンター	クリスマス会支援(クイズ・ しりとり爆弾ゲームの企画)	7	大和地区社協主催の 行事
12/15	仙台市市民活動サポートセン ター	仙台若者アワード二次審査	6	ワカツクさん主催の イベント
12/15	石巻市新西前沼第二復興住宅	クリスマス会支援(コンサ ート鑑賞・お茶会準備)	5	自治会主催の行事
12/16	仙台市大和町市営住宅	クリスマス会支援(準備や抽 選会の手伝い)	7	自治会主催の行事



【写真】 工作の様子 (左)、大和町松木公園にて夏祭りの様子 (右)

3-8. 高校生支援団体 bridge

本団体は、「高校生の“架け橋に”」という理念のもと、高校生に、大学生のリアルな姿に触れることで多様な人生観を知り、将来に対する考えを見つめ直す手がかりを得て欲しいという思いから活動している。高校生1人1人がより一層輝ける未来への”架け橋”となることを目指し、高校生対象の座談会やプレゼンテーション等の企画を実施している。

本年度は、企画の実施に加え、他団体との連携や、新たな活動の策定・実施を行ってきた。これらについて、以下に示す。

3-8-1. 2018 年度の実施企画

①福島県立磐城高等学校 1 年生対象「大学生・大学院生とのディスカッション」への参加

工学部電気情報物理工学科からの依頼で、当団体から 1 名が参加した。グループに分かれ、高校時代のことや大学での生活について話したり、質疑応答を行ったりした。高校生から活発に質問があり、とても良い時間であった。

②東北学院高等学校 2 年生対象「大学説明会」への参加

東北学院高等学校主催の「大学説明会」に、当団体から 2 名参加した。大学説明会は、複数の大学が参加し、高校生がローテーションをして、複数の大学の説明を聞くというものであった。東北大学の説明や受験に向けたアドバイス等についてお話しした。また、高校生（2 年生、他学年希望者）向けの説明に加え、保護者向けの相談会も行った。

高校生や保護者の方々がどのような悩みを抱えているのかを知ることができ、私たちにとっても有意義な時間であった。

③福島県内での活動

本団体所属の福島県出身の 2 人は、高校時代に一般社団法人ふくしま学びのネットワーク主催の企画に参加しており、そのご縁で、7 月～12 月にかけて複数の企画にボランティアや運営サポートとして参加させていただいた。「夢をかなえる勉強法」では、運営のサポートをさせていただいた。また、「中学生数学セミナー」では、中学生の自主学習の際のサポート（質問対応など）を行った。



【写真】東北学院高等学校「大学説明会」7/10（左）、「中学生数学セミナー」8/10・11（右）

3-8-2. 2018 年度の新たな取り組み

①他団体との連携

東京大学の「FairWind」との正式な連携を取り始めた。（FairWind は、高校生を対象とした地方出張セミナーやキャンパスツアー等を行っている団体である。）

現在は、SNS やホームページを用いたお互いの活動紹介や、活動上の情報共有等について行っている。今後、共同企画の計画・実施などを行うことができると考えている。

②大学生図鑑の作成

高校生に、大学生の“リアル”を知ってもらい、進路選択の一助としてもらうことを目的とし、大学生それぞれが大学で学んでいること、行っている課外活動、高校時代のことなどについてまとめた「大学生図鑑」を bridge のホームページ上に新たに作成した。

現在掲載しているのは、bridge の所属メンバーが中心であるが、bridge に所属していない東北大学生についても協力をお願いしており、今後順次掲載していく予定である。

【表】 2018 年度の活動一覧

日時	活動場所	活動内容	参加人数	備考
4/18	東北大学 青葉山キャンパス	福島県立磐城高等学校 1 年生 「大学生・大学院生との ディスカッション」	大学生・大学院生 4 名 程度(内当団体 1 名)、 高校生 40 名	工学部電気情報物 理工学科からの依 頼。
7/10	東北学院高等学校	東北学院高等学校 2 年生 「大学説明会」	当団体 2 名	東北学院高等学校 主催。 他大学からの参加 有り。
7/15	福島県福島市内	「夢をかなえる勉強法 11」の運営サポート	当団体 2 名	一般社団法人ふく しま学びのネット ワーク主催。
8/10・ 11	福島県福島市内	「中学生数学セミナー」 学生ボランティア	当団体 2 名	福島市教育委員会 主催、一般社団法 人ふくしま学びの ネットワーク共 催。
12/22	福島県相馬市内	「夢をかなえる勉強法 12」の運営サポート	当団体 2 名	一般社団法人ふく しま学びのネット ワーク主催。

3-9. フェアトレード推進サークル“amo”

フェアトレード推進サークル amo は、東北大学を中心として東北地方へのフェアトレード活動の普及を目指しています。「フェアトレードが当たり前の中を目指して」というスローガンを掲げ、イベント、大学構内における活動を通してフェアトレードの推進活動を行なっています。以下では「東北大学フェアトレード推進サークル amo」の活動を、前期の活動、後期の活動、活動のまとめの順に紹介します。

3-9-1. 上半期の活動 2018 年 4~9 月

2017 年度の活動に引き続き、週に一度のミーティングではイベントの準備を行いました。また、今年度は前年度の活動に加え、せんだい地球フェスタをはじめとする国際系の団体が集まるイベントに積極的に参加することによって外部の団体と横のつながりを形成することだけでなく、一般の

来場者にフェアトレード商品を実際に販売することによって多くの方々にフェアトレードや国際課題について、そして我々が行なっている活動について知ってもらうことができました。また、他団体と協力し、フェアトレード関連映画の上映会を行いました。

学内では、東北大学生協に協力していただきフェアトレード商品（チョコレート、紅茶）の生協販売を行いました。学生が手に取りやすい価格帯の商品を中心に販売したため、売れ行きもよく販売開始1週間で全商品を売り切ることができました。売り上げ以上に認知度の上昇に大いに寄与したと考えられるフェアトレード商品の生協販売は今後も続けていきたいと考えています。そのほかに、不定期で東北大学の学生を対象としたフェアトレードの認知度調査を行いました。前年度の調査の際の認知度よりも、学生のフェアトレードへの認知度が高くなっていたのが印象的でした。

3-9-2. 下半期の活動 2018年10月～2019年3月

主に他大の大学祭でのフェアトレード商品の販売と東北大学祭での amo カフェの運営に向けたミーティングを毎週火曜の昼休みに継続的に行いました。また、国際系のイベントに参加しフェアトレード商品を販売することで周知活動を行うことに主に力点を置いていた前期とは異なり、後期では所属メンバー自身のフェアトレードに対する理解をより深めるためにミーティングにて勉強会を行いました。メンバー間で行われる勉強会は週ごとに発表担当のメンバーが論文や書籍を購読し、PPT等にまとめて発表した後にその内容に関する質疑応答・議論をするという形式で行いました。普段、フェアトレードの推進を行なっている団体として自分たちがその取り組みに対する理解をより深いものにするために来年度以降もこの勉強会を継続的に行う見込みです。



【写真】商品の生協販売の様子（左）、NPO 法人ゆうわにおける活動の様子（右）

【表】2018年度の活動一覧

日時	活動場所	活動内容	参加人数	備考
4/17	東北大学附属図書館多目的室	フェアトレード映画上映会	4	学問と社会をつなぐサロンとの合同イベント
5/27	エナジールーム アトモス	ルイボスティーリフレッシュセミナー	6	

5/31	東北大学川内北キャンパス	フェアトレード認知度調査	7	東北大学の学生が対象
6/23	NPO 法人ゆうわ 事務所	地域の方と交流	6	
7/21	仙台市内の保育園	地域の方と交流	5	
7/31,8/1	東北大学川内北キャンパス	オープンキャンパス	8	
9/17	国際センター	せんだい地球フェスタの参加	5	国際系サークルが集まるイベント
10/13,14	東北学院大学土樋キャンパス	フェアトレード商品の販売	4	
11/2,3,4	東北大学川内北キャンパス	東北大学祭 (amo カフェ、フェアトレード書品の販売)	9	

第Ⅱ部 執筆者一覧

江口怜 課外・ボランティア活動支援センター 特任助教	1-1. 課外・ボランティア活動支援センター 2018年度の概括 1-2. 高度教養教育・学生支援機構の自己評価 1-3. 事務連絡会議（運営会議） 1-4. 日本財団学生ボランティアセンター（Gakuvo）との協定事業 1-5. 課外・ボランティア活動研修会 1-6. ボランティア登録団体の支援 1-7. 開講した授業 2-15-3. 多大学合同ツアー
菊池遼 課外・ボランティア活動支援センター 教育・研究支援者	1-7. 開講した授業 1-8. 国内外の大学・高校との交流 1-9. 緊急災害時の学生ボランティア派遣 1-10. 課外活動団体合同研修会および滝沢理事への要望 2-13-3. 西日本豪雨災害の支援活動
松村礼子 学生支援課活動支援係長	1-11. 東北大学学友会の支援・連携
小林大一郎 工学研究科修士課程1年	第Ⅱ部全体を執筆・編集 1-3. 事務連絡会議（運営会議） 1-5. 課外・ボランティア活動研修会 1-7. 開講した授業 1-10. 課外活動団体合同研修会および滝沢理事への要望
和久晋太郎 経済学部2年	2-1. 2018年度の学生スタッフチーム SCRUM の概要 2-7-3. 考えるソファ 2-9. 震災伝承部 2-15-3. 多大学合同ツアー
穴澤ゆず 理学部2年	2-2. 総務
竹井愛 工学部2年	2-3. 渉外
江藤ゆうの 理学部2年	2-4. 広報 3-2. インクストーンズ
森坂太一 教育学部2年	2-5. 会計
松田敦之 歯学部2年	2-6. 企画
三條祐貴 文学部1年	2-7-1. オープンキャンパス
千葉隆司 理学部1年	2-7-2. 東北大学祭
辻壹万 経済学部1年	2-7-2. 東北大学祭
名古屋雄大 工学部2年	2-8. 国際部
大庭佳乃 文学部3年	2-10. 人権共生部（ひととも）

山崎英彦 経済学部 3年	2-11. もしとさ
名古屋円花	2-12. 地域共創部
文学研究科修士課程 1年	2-13-4. 北海道胆振東部地震への支援活動
山本賢 文学部 3年	2-13-1. 熊本地震被災地への支援活動 2-13-2. 大阪北部地震の支援活動 2-14-1. いっぽこ合宿
高嶋優佑 工学部 1年	2-14-1. 山元町ハロウィンパーティ・ボランティア
近藤智哉 工学部 3年	2-15-1. 第一回 仙台若者アワードへの参加
齋藤美久 教育学部 2年	2-15-2. 第2回 JCN 復興サロンへの参加
富岡奈央 文学部 2年	3-1. 陸前高田応援サークルぽかぽか
平野杜萌 工学部 2年	3-3. 福興 youth
小林奎太 法学部 3年	3-4. 地域復興プロジェクト“HARU”
高田祐希 農学部 3年	3-5. 震災復興・地域支援サークル“ReRoots”
菊地寿茂 農学部 2年	3-6. 国際ボランティア団体“AsOne”
高橋遥 文学部 2年	3-7. 基礎ゼミ・展開ゼミ継続サークルたなぼた
北畠なつみ 医学部 3年	3-8. 高校生支援団体“bridge”
大友裕太 経済学部 1年	3-9. フェアトレード推進サークル“amo”

2019（平成 31）年 3 月 31 日 発行

2018 年度 課外・ボランティア活動支援センター紀要

発行：東北大学 高度教養教育・学生支援機構 課外・ボランティア活動支援センター

<連絡先>

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41 番

東北大学高度教養教育・学生支援機構 課外・ボランティア活動支援センター

センター長 小田中直樹 特任助教 横関理恵

TEL : 022-795-4948 E-mail : volu-s@grp.tohoku.ac.jp

2018年度

課外・ボランティア活動支援センター紀要

the Journal of the Center for Service Learning and
Extra Activities 2018

東北大学 高度教養教育・学生支援機構
課外・ボランティア活動支援センター
2019年3月発行